

富士宮市文化財調査報告書第43集

代官屋敷遺跡Ⅱ

—㈱山田不動産による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第43集

代官屋敷遺跡Ⅱ

—側山田不動産による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2010

富士宮市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、静岡県富士宮市小泉字代官屋敷2231番2ほかに所在する代官屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、佛山田不動産（代表取締役　山田順次）による宅地造成工事に伴い、同社より調査の依頼を受けた富士宮市教育委員会が、関東日の支援業務をもって実施したものである。
- 3 発掘調査は、平成21年9月7日から同11月20日まで現地調査を実施して、調査面積はおよそ900m²となった。同24日から整理作業、報告書作成作業を継続して平成22年5月31日に事業を完了した。
- 4 発掘調査の体制は、以下のとおりである。
調査主体者 佐野敬祥（富士宮市教育委員会教育長）
調査担当者 馬飼野行雄（平成21年度教育文化課・22年度富士山文化課主幹兼係長）
渡井英智（同主任学芸員）・保竹貴幸（平成22年度主査）・石文佑弥（平成21年度嘱託員）
佐野恵里（平成21・22年度嘱託員）・田中城久（平成22年度嘱託員）
支援業務員 小金沢保雄（関東日監督員）・阿部稔男（同作業員・以下同じ）・石川
眞・斎藤之弘・佐藤法夫・渋谷政夫・園田勝・田中 稔・松野秀一
山田泰三・渡辺剛・渡辺敏雄・大平美奈子・山崎美美子・渡辺成子
佐藤節子（同整理作業員・以下同じ）・渡辺麻里
- 5 本書の執筆は、以下のとおりである。
馬飼野行雄 第II章、第III章、第V章 1
保竹 貴幸 第I章
佐野 恵里 第IV章 1、第V章 2
田中 城久 第IV章 2、第V章 3
- 6 写真撮影は、馬飼野・石文・佐野・田中が分担して担当している。
- 7 本書の編集・印刷・出版に関する事務は、富士宮市教育委員会富士山文化課が行った。
- 8 発掘調査に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会で保管している。
- 9 本報告書作成にあたり、ご指導・ご協力をいただいた方々は以下のとおりである（敬称略）。
北垣俊明氏（財団法人石の博物館 奇石博物館）
池谷信之 小崎晋 原田雄紀（沼津市文化財センター）

凡　例

- 1 挿図中に示す座標は、世界測地系を用いた測量値である。方位は、真北を示している。
- 2 揿図中に示すトーンは以下のとおりである。



… 燃土



… 磨り面



… 敲打面

- 3 土器観察表の色調は、土器の最も広い範囲を専有する色合いを原則として取り上げている。色調は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局)による。

(富士宮市の位置)



目 次

第Ⅰ章 環 境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査の経緯と経過	7
1 経緯と経過	7
2 遺跡の現況と調査の方法	9
第Ⅲ章 遺 構	12
1 集 石	12
2 炉 穴	18
3 土 坑	20
第Ⅳ章 遺 物	22
1 土 器	22
2 石 器	57
第Ⅴ章 ま と め	72
1 遺 構	72
2 土 器	74
3 石 器	75

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地質図	2
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査区位置図	8
第4図 遺構分布図	9
第5図 土 層 図	10
第6図 第1号集石実測図	12
第7図 第2号集石実測図	13
第8図 第3号集石実測図	13
第9図 第4号集石実測図	14
第10図 第5号集石実測図	14
第11図 第6号集石実測図	15
第12図 第7号集石実測図	16
第13図 第8号集石実測図	16
第14図 第9号集石実測図	16
第15図 第10号集石実測図	16
第16図 第1号炉穴実測図	19
第17図 第2号炉穴実測図	19
第18図 第3号炉穴実測図	19
第19図 第4号炉穴実測図	20
第20図 第1号土坑実測図	21
第21図 第2号土坑実測図	21
第22図 第3号土坑実測図	21
第23図 遺構内 出土土器	22
第24図 第I群土器実測図	22
第25図 第II群土器実測図	23
第26図 第III群第1類土器実測図	25
第27図 第III群第2類土器実測図	26
第28図 第III群第3類土器実測図	27
第29図 第III群第4類土器実測図(1)	28
第30図 第III群第4類土器実測図(2)	29
第31図 第III群第5類土器実測図	30
第32図 第IV群土器実測図	31
第33図 第V群土器実測図(1)	33
第34図 第V群土器実測図(2)	34
第35図	35
第36図	36
第37図	37
第38図	38
第39図	39
第40図	40
第41図	42
第42図	43
第43図	44
第44図	45
第45図	46
第46図	46
第47図	46
第48図	46
第49図	46
第50図	46
第51図	47
第52図	47
不明	47
第53図	47
清水柳E類土器接合関係	47
石織実測図	58
石匙実測図	59
第55図	59
石錐実測図	59
打製石斧実測図	60
搔器実測図	60
削器実測図	61
礫器実測図	62
石核実測図	62
磨石実測図	63
敲石実測図(その1)	64
敲石実測図(その2)	65
磨敲石実測図	67
磨敲石・特殊磨石・石皿実測図	68
石材別石器剥片分布図	71

挿表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	4
第2表	出土土器觀察表	48
第3表	出土石器組成表	66
第4表	石器觀察表	68
第5表	石器組成割合表	70
第6表	集石土坑出土遺跡一覧	72
第7表	市内遺跡出土集石土坑一覧	73

図版目次

図版1	1. 調査区全体 / 2. 調査状況	
図版2	1. 第1号集石 / 2. 第2号集石	
図版3	1. 第2号集石(半裁状況) / 2. 第2号集石(土坑)	
図版4	1. 第3号集石 / 2. 第5号集石	
図版5	1. 第5号集石(下層) / 2. 第5号集石(土坑)	
図版6	1. 第4号集石 / 2. 第4号集石(土坑)	
図版7	1. 第6号集石 / 2. 第6号集石(土坑)	
図版8	1. 第7号集石 / 2. 第9号集石	
図版9	1. 第8号集石 / 2. 第8号集石(土坑)	
図版10	1. 第10号集石 / 2. 第1号炉穴	
図版11	1. 第2号炉穴 / 2. 第3号炉穴	
図版12	1. 第4号炉穴 / 2. 第1号土坑	
図版13	1. 第2号土坑	
図版14	1. 第I・II群土器 / 2. 第III群土器(1)	
図版15	1. 第III群土器(2) / 2. 第IV群土器	
図版16	1. 第V群土器(1)(第33図1) / 2. 第V群土器(2)	
図版17	1. 第VI群土器(1) / 2. 第VI群土器(2)(第39図1)	
図版18	1. 第VII群土器 / 第VIII群土器	
図版19	1. 石鏃(第54図1~32) / 2. スクレイパー(搔器: 第58図1~5 削器: 第59図1~6)	
図版20	1. 碓器(第60図1・2) 石核(第61図1~4) / 2. 石錐・石匙・打製石斧 / 3. 磨敲石・特殊磨石・石皿 / 4. 磨石・敲石	

第Ⅰ章 環境

1. 地理的環境

富士宮市は富士山の西南麓に位置し、北と西は富士山と天守山地を挟んで山梨県と接し、東と南は富士山麓と富士川を境に富士市と接し、南西は富士川を越えて静岡市と接している。市内のほぼ全域は富士山頂から傾斜する山麓状の地形となっている。南西側には羽飼丘陵・星山丘陵があり、安居山断層により隆起した羽飼丘陵は西に向かう緩斜面を形成し、星山丘陵は大宮断層によって南西側が隆起して形成されている。羽飼・星山丘陵の東側に沿うように潤井川が流れ、羽飼丘陵の西には西側が隆起する芝川断層に沿って芝川が流れ、星山丘陵の南側には富士川が流れて沖積地を形成している。

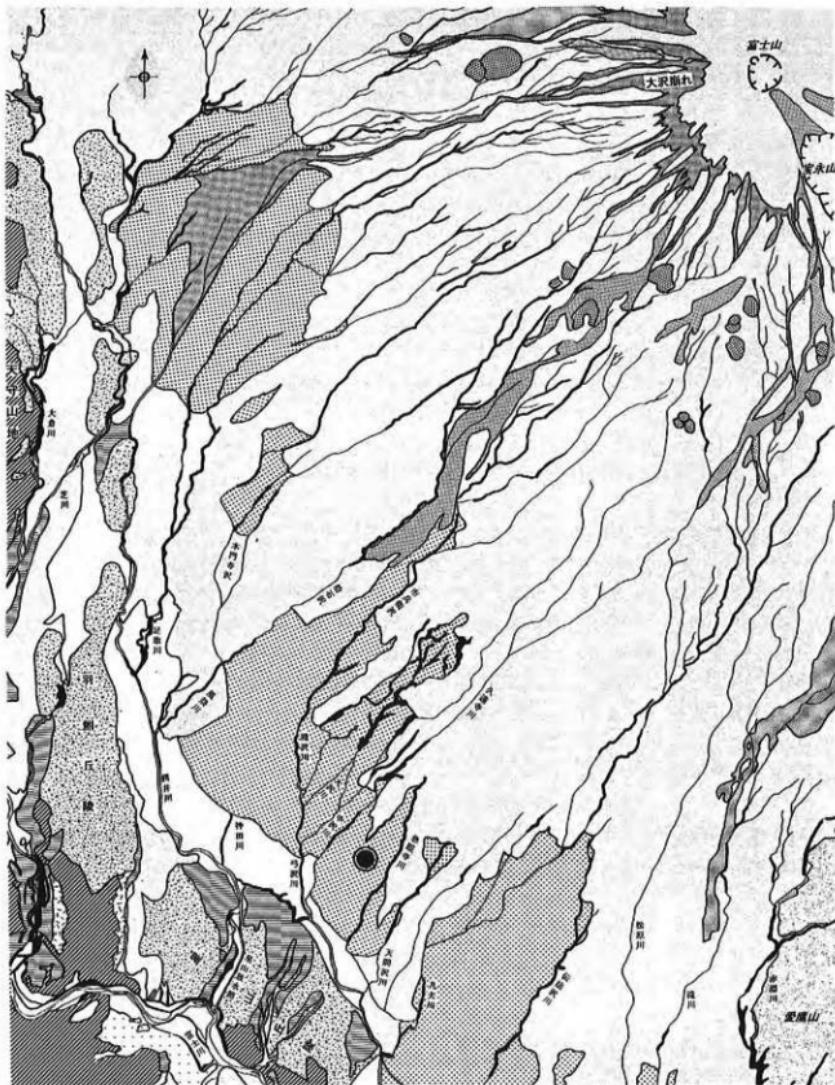
市内の大部分は富士山の火山活動の影響を強く受けている。富士山の成立過程は、小御岳、古富士、新富士という火山活動により形成されている。最近の調査では小御岳の前に先小御岳が存在したことが指摘されている。古富士火山は小御岳火山の南西麓を火口とし、その噴出物は小御岳火山の大部分を覆い、小御岳火山は北側中腹にその火口丘を残すだけとなっている。浸水性のある新富士火山噴出物と不透水性の古富士火山堆積物の間からは数多くの湧水が湧き出しており、その様子は市内各地で見られる。

富士山南西部の羽飼・星山丘陵には古富士火山の堆積物が分布しており、その堆積物は古富士泥流と呼ばれている。約10万年前～5万年前の堆積物は、羽飼丘陵の南西斜面の標高350～200m、星山丘陵の南東斜面の標高200～150mの平垣面に分布している。市内の古富士火山堆積物の大部分は新富士火山の噴出物に覆われているが、両丘陵は断層運動によって隆起したために地表に残されたものである。約5万年前～2万年前の堆積物は侵食によって削られた星山丘陵の谷を埋め、標高160～70mの2段の地形面をつくっており、星山丘陵の北東を流れる潤井川沿いや白糸の滝から狩宿間の芝川沿いでも見られる。約2万年前の古富士火山の終期には、山体が南西に向かって斜面崩壊する岩屑などが起きており、その堆積物は田貫湖周辺の標高650～400mの丘陵や元村山から小泉にかけての標高550～100mの範囲に分布している。

新富士火山の噴出物は多量の溶岩流が特徴で、約17,000年前～8,000年前にかけて、丘陵地や富士川以西を除くほぼ全域に流下している。新富士火山の溶岩流は浸水性に富むため、不透水性の古富士火山堆積物との間から富士山の雪解け水や雨水が湧水として湧き出している。芝川溶岩流は芝川沿いを流れて富士川にまで達し、羽飼から沼久保にかけての富士川沿いでは段丘状の地形をつくり、富士川・芝川沿いでは柱状節理が見られる。白糸溶岩流は白糸の滝で見られ、富士山麓の浸透水が溶岩流と古富士火山堆積物との間から滝となって流れ落ちている様子が良くわかる。万野風穴を作り出した万野溶岩流は浅間大社付近にも分布しており、溶岩からの湧水が湧玉池をつくり、神田川となって潤井川に流れ込んでいる。

大規模な溶岩流を噴出したあと約8,000年前～5,600年前は活動が低下して小規模な噴火となる。市内の縄文時代の包含層である富士黒土層の大部分はこの時期に形成されている。約5,600年前～3,700年前には山頂及び山腹から数多くの溶岩が流れしており、約3,500年前～2,300年前には山頂及び山腹での爆発的な噴火があり、この時期に市内各地で見られる堅いラビリ層を形成する大沢スコリアが降下している。約2,300年前からは山頂での噴火は起きなくなり、山腹での割れ目噴火が中心となる。

代官屋敷遺跡は、富士山西南麓末端部の丘陵台地上にあり、南に潤井川、西に久遠寺川・弓沢川が流れ、東は福泉川（慈眼寺沢）を挟んで、富士市との境となる。遺跡のある小泉地区には、古富士火



<凡例> ● 代官塚跡

- [Symbol: Hatched area] 雪代堆積地・火山麓扇状地(現成)
- [Symbol: Hatched area] 側火山
- [Symbol: Hatched area] 富士火山新期溶岩流
(約2,300年前以降に噴出した溶岩流)
- [Symbol: Hatched area] 富士火山旧期溶岩流
(約2,300年以前に噴出した溶岩流)

原図 国土地理院 2003『富士山』1:50,000火山土地条件図

0 3km

- | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------|-----------------------------|---------------------------|---------------------------------|---|------------------------------|
| [Symbol: Hatched area] 富士火山火山蓋扇状地 | [Symbol: Hatched area] 古富士泥流堆積地 | [Symbol: Hatched area] 谷底平野・氾濫原 | [Symbol: Hatched area] 急崖 | [Symbol: Hatched area] 河岸段丘 | [Symbol: Hatched area] 崖錐 | [Symbol: Hatched area] 扇状地・緩扇状地 | [Symbol: Hatched area] 第三紀や第四紀の地層からなる山地
や丘陵地 | [Symbol: Hatched area] 愛鷹山火山 |
|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------|-----------------------------|---------------------------|---------------------------------|---|------------------------------|

第1図 遺跡周辺地質図

山堆積物を地盤とする地形がその後の富士山の溶岩流の堆積から免れ、丘陵状台地として残ったものが見られる。遺跡はその台地上に位置する。

2. 歴史的環境

代官屋敷遺跡(1)は縄文時代早期～中期を中心とする遺跡である。第Ⅰ次調査では、縄文時代早期は中葉～末葉の高山寺式土器、田戸下層式土器、野島式・鶴ヶ島台式土器、茅山系土器の押型文土器・燃糸文土器・沈線文土器・条痕文土器が出土し、前期では後葉の諸磯B・C式期の住居跡が出土したほか十三菩提式・北白川下層式・大歳山式土器が出土し、中期では初頭の五領ヶ台式土器期の住居跡が出土している。

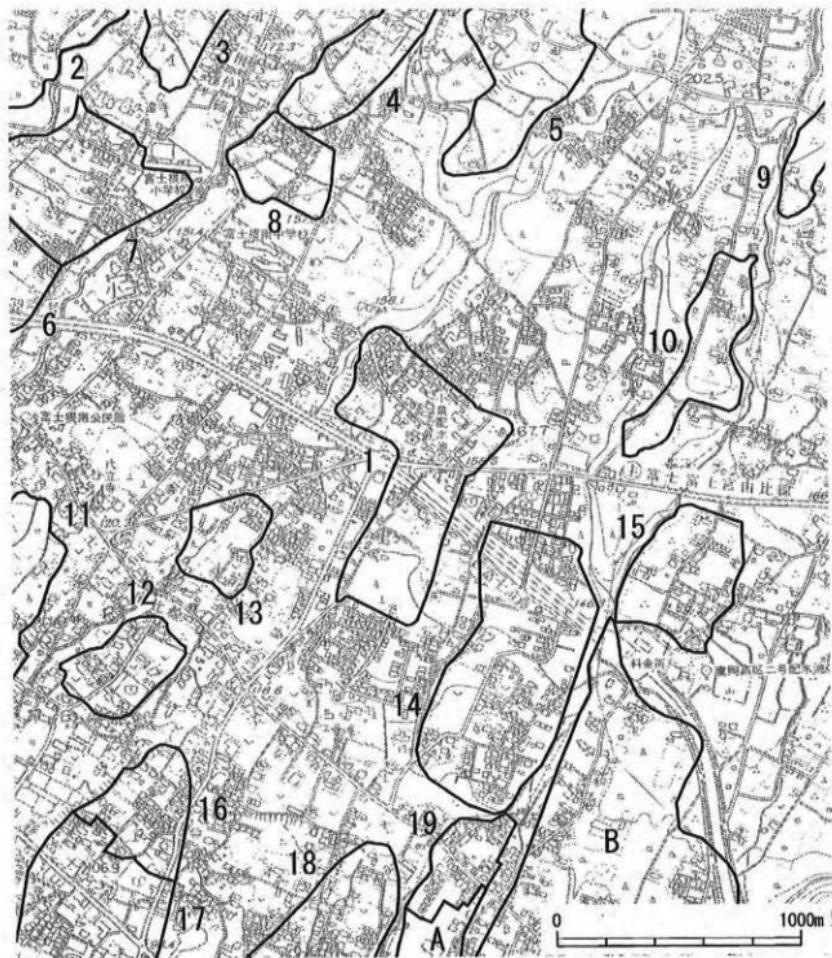
遺跡の南東には縄文時代早期の住居跡が多数確認された若宮遺跡(14)が存在し、福泉川(悲眼寺沢)を挟んだ富士市天間沢遺跡(B)からは縄文時代中期中葉の勝坂式土器・曾利式土器・加曾利E式土器が多くの住居跡とともに出土している。また、若宮遺跡や富士市天間沢遺跡からナイフ形石器が採集されていることを考えると、旧石器時代の痕跡が確認される可能性がある。

市内の旧石器時代から縄文時代の遺跡は、羽鮒・星山丘陵をはじめ、富士山の溶岩流の影響が少ない地域に多い。羽鮒・星山丘陵は古富士火山堆積物を基盤とし安居山・大宮断層の活動によって隆起した丘陵であり、代官屋敷遺跡のある富士山西南麓の小泉地区や大岩・杉田地区に見られる台地状の地形は、古富士火山の火山麓扇状地や岩屑なだれの堆積物を基盤としている。古富士火山の堆積物は新富士火山の溶岩流に覆われるが、丘陵ではほぼ縁でせき止められ、尾根状の地形は台地状となって残されている。このような古富士火山堆積物の残る地形上には、旧石器時代・縄文時代の遺跡が数多く残っている。また、新富士火山の溶岩流を基盤とする台地上や、富士川・潤井川・芝川などの河川が作り出した沖積地や河岸段丘などにも遺跡が存在する。

旧石器時代の遺跡は数が少ない。富士川沿いの沼久保坂上遺跡から剥片が、潤井川上流の千居遺跡ではナイフ形石器が見つかっているが規模は小さい。羽鮒丘陵では小塚A遺跡からナイフ形石器・尖頭器・細石刃石核などが包含層から出土しているが遺構は発見されていない。なお、羽鮒丘陵の遺跡については調査の事例が少なく、遺跡の内容や分布状況はよくわかっていない。また、第二東名高速道路工事に伴う星山丘陵の下高原遺跡の発掘調査では、旧石器時代のナイフ形石器・尖頭器などが出土地とともに石器ブロックや礫群など旧石器時代の遺構が確認されており、この地域での新たな発見もある。

縄文時代草創期では、羽鮒丘陵西側に国指定史跡の大鹿窪遺跡があり、草創期後半の押圧縄文土器期を中心とする集落跡が尖頭器などの石器を伴って出土している。また、小塚A遺跡からは細長起線文土器と有舌尖頭器を伴う尖頭器の製作所跡が出土するなど、羽鮒丘陵での分布が確認されている。一方、星山丘陵では出口遺跡で爪形文土器・奥山地遺跡で押圧縄文土器がいずれも1点採集され、南部谷戸遺跡・月の輪遺跡から有舌尖頭器が見つかり、小泉地区的上石敷遺跡・若宮遺跡から有舌尖頭器が採集されているが、遺構は確認されていない。

早期では遺跡の数が増え、小泉地区や羽鮒・星山丘陵など広範囲に分布域が見られる。小泉地区では表裏縄文土器・燃糸文土器・押型文土器を伴う多数の住居跡が出土した若宮遺跡があり、石敷遺跡(11)から燃糸文土器・相木式土器併行の押型文土器・田戸上層式土器併行・判ノ木山西式土器の沈線文土器が出土し、上石敷遺跡から早期後葉の燃糸文土器・野島式土器が出土している。羽鮒丘陵には早期後半の条痕文系土器が出土した猫沢遺跡、高山寺式の押型文土器・沈線文土器の田戸式系土器



第2図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	代官屋敷遺跡	縄文(早・中・後)、古墳	12	萩間遺跡	弥生(後)、古墳(前)、奈良
2	神社遺跡	縄文(早・中)、古墳	13	中ノ土手遺跡	縄文(前)、古墳(前)
3	寺ノ後遺跡	縄文(中)	14	若宮遺跡	縄文(早)
4	出水東遺跡	縄文、古墳(前)	15	大宝坊遺跡	縄文(中)
5	金井坂遺跡	縄文(中)	16	上宿遺跡	縄文(早・中)、古墳
6	小泉中村遺跡	縄文(後)、古墳(前)	17	椎原遺跡	縄文(前・中)、古墳(前)、奈良
7	寺内遺跡	縄文(前・中)、古墳	18	篠入越遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳
8	小泉向原遺跡	縄文(中)	19	ジンゲン沢遺跡	縄文(早・中・後)、古墳
9	新製遺跡	縄文(早・前・中・後)		富士市	
10	杉田西原遺跡	縄文(早・中)、古墳	A	ジンゲン沢遺跡	縄文(早・前・中)
11	石数遺跡	縄文、弥生、古墳(前)、奈良、中世	B	天間沢遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)

第1表 周辺遺跡一覧表

・早期後葉の条痕文系の鵜ヶ島台式土器が出土した小塚A遺跡がある。星山丘陵では黒田向井林遺跡から撚糸文土器・押型文土器・条痕文土器が出土し、富士川沿いの小松原A遺跡・沼久保坂上遺跡からは早期中葉～後葉の押型文・撚糸文・沈線文・条痕文土器が出土している。また、代官屋敷遺跡南側の富士市ジングン沢遺跡（A）では早期の野島・鵜ヶ島台式土器が出土している。富士山西南麓では、草創期から早期にかけての生活の痕跡が目立っていることが特徴的である。

前期になると小泉地区などが分布域の中心となり、羽鮒・星山丘陵では数が少なくなる。小泉地区には寺内遺跡（7）・中ノ土手遺跡（13）・椎現遺跡（17）があり、大岩地区には清水ノ上II式土器を伴う住居跡が出土した箕輪B遺跡・清水ノ上I式土器が多数出土した峯石遺跡があり、杉田地区には木島式土器が出土した滝ノ上遺跡がある。羽鮒丘陵の小塚A遺跡では諸磯式土器を伴う住居跡が出土し、小塚B遺跡では木島式土器・諸磯B式土器が採集されており、羽鮒・星山丘陵間では前期前半の清水ノ上式土器・関山式土器、前期後半の諸磯式土器が出土した滝戸遺跡がある。また、南方の富士川右岸の富士市木島遺跡は縄文時代前期の木島式土器の標式遺跡として著名である。

中期では遺跡の数は急増し、比較的狭い範囲で継続的に営まれるようになる。小泉地区では中期初頭の鷹島式・北裏C I式土器・曾利I式土器が出土し五領ヶ台式期の住居跡が出土した上石敷遺跡があり、大岩地区には勝坂式土器・曾利式土器が出土した箕輪A遺跡・中期前半の勝坂式土器・中期後半の加曾利E式・曾利式土器が出土した滝ノ上遺跡がある。羽鮒丘陵には加曾利E式土器が採集された貓沢遺跡があり、星山丘陵沿いの滝戸遺跡からは中期後半の曾利II式土器期の住居跡が出土し、羽鮒・星山丘陵間の大中里坂下遺跡からは中期中葉の北屋敷式土器・中期後半の曾利式土器・加曾利E式土器が出土している。富士川沿いには中期後葉の曾利V式土器が出土した南原遺跡があり、芝川沿いには中期前半の五領ヶ台式土器・中期中葉の勝坂式土器・中期後半の曾利式土器・加曾利E式土器が出土した袖野の辻遺跡がある。代官屋敷遺跡の南東には、中期中葉の勝坂式土器・曾利式土器・加曾利E式土器が多く住居跡とともに出土した富士市天間沢遺跡があり、富士市ジングン沢遺跡では中期前半の藤内式土器を伴う住居跡が出土している。また、潤井川上流には中期後半の加曾利E式土器・曾利式土器を伴う住居跡が出土した、配石構造が特徴的な国指定史跡の千居遺跡がある。

後期では中期から継続して営まれている遺跡が多く、大岩地区に堀之内I式土器を伴う住居跡が2軒出土した箕輪A遺跡があり、代官屋敷遺跡の南には称名寺式土器・堀之内式土器が出土した富士市天間沢遺跡がある。星山丘陵沿いでは後期初頭の称名寺式土器が出土し後期前半の堀之内式土器期に最盛期を迎える滝戸遺跡、羽鮒・星山丘陵間には後期前葉の称名寺式土器・堀之内式土器・後期中葉の加曾利B式土器を中心に・曾谷式土器・安行1・2式土器が出土した大中里坂下遺跡があり、芝川沿いに称名寺式土器・堀之内I式土器が出土した袖野の辻遺跡がある。

後期前葉の堀之内式土器期以降は遺跡数が減少している。これは地盤規模での環境の変化により採集生活から漁撈生活へと主軸が移ったことと、大沢スコリアを降下させた富士山の活動もその影響の一つとして考えられている。晩期までの時期では、後期から晩期の土器が出土した大岩地区的辰野遺跡・晩期前半の大洞B式土器・大洞B C式土器が出土した滝戸遺跡や大中里坂下遺跡でわずかに確認できるのみとなっている。

以後、市内では縄文時代の遺跡は見られず、弥生時代中期初頭に至り、潤井川を望む台地上の渋沢遺跡などで生活の痕跡が見られるようになり、弥生時代後期には石敷遺跡・萩間遺跡（13）など小泉地区でも確認されるようになる。

<参考文献>

- 山本孝広・石塚吉浩・高田亮 2007 「富士火山南西山麓の地表及び地下地質：噴出物の新層序と化学組成変化」
『富士火山』山梨県環境科学研究所
- 吉本充宏・金子隆之・嶋野岳人・安田敦・中田節也・藤井敏嗣（東京大学地震研究所） 2004
「掘削資料から見た富士山の火山体形成史」『月間地球』号外48
- 地質調査研究推進本部地質調査委員会 1998 「富士川河口断層帯の調査結果と評価について」
- 加藤学園考古学研究所 1975 『千居』
- 富士市教育委員会 1984 『天間沢遺跡Ⅰ』
- 富士市教育委員会 1985 『天間沢遺跡Ⅱ』
- 富士市教育委員会 2007 『ジンゲン沢遺跡』
- 芝川町教育委員会・加藤学園沼津考古学研究所 1972 『駿河小塚』
- 芝川町教育委員会 1985 『南原遺跡』
- 芝川町教育委員会 1995 『小塚遺跡－第3次調査及び4次調査報告書－』
- 芝川町教育委員会 2004 『辻遺跡』
- 芝川町教育委員会 2006 『猫沢遺跡』
- 芝川町教育委員会 2006 『大鹿塚・塙B遺跡（遺物編）』
- 富士宮市教育委員会 1981 『滝ノ上遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1982 『代官屋敷遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1985 『沼久保坂上遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1985 『上石敷遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1986 『黒田向林遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1989 『小松原A遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡』
- 富士宮市教育委員会 1997 『滝戸遺跡』
- 富士宮市教育委員会 2000 『石敷遺跡』
- 富士宮市教育委員会 2001 『箕輪A遺跡』
- 富士宮市教育委員会 2003 『富士宮市の遺跡Ⅱ』
- 富士宮市教育委員会 2005 『大中里坂下遺跡』
- 富士宮市教育委員会 2007 『滝戸遺跡Ⅱ』

第Ⅱ章 調査の経緯と経過

1. 経緯と経過（第3図）

代官屋敷遺跡は、JR富士根駅から北へ1.5kmほど向かった台地上に所在する。それは富士山から樹根状に沖積地に下る幅広い洪積台地のひとつで、隣接して縄文時代早期の集落跡として著名な若宮遺跡が存在する。遺跡は昭和53年から4カ年に亘って、西富士道路建設の事前調査が実施され、縄文早期の集石跡や中期の竪穴住居跡が発見されている。

この度の発掘調査の起因となったのは、**㈱山田不動産**（代表取締役 山田順次）が計画する宅地分譲地造成工事が、遺跡南辺の富士宮市小泉字代官屋敷2231番2の内ほか2筆、3773.16m²に計画されたことによるもので、周知の埋蔵文化財包蔵地内の土木工事として、平成21年6月4日付けで、文化財の所在の有無について照会がされた。

これを受けて、富士宮市教育委員会（以下、市教委）は平成21年7月1日から同16日まで遺跡の確認調査を実施して、縄文時代早期の東海系土器を主体に中期初頭まで、ほぼ前回の調査と類似した遺物構成をもつ包含層を検出したため、同年7月30日付け、富教文第264号の2で、文化財が所在していることを回答した。

この回答をもって、**㈱山田不動産**は市教委と効果的な遺跡保存ための検討を重ね、保存の不可能なおよそ850m²を調査対象予定地として、平成21年8月11日付けで、静岡県教育委員会（以下、県教委）教育長宛に埋蔵文化財発掘の届出書を提出した。

これを受けた県教委は平成21年8月21日付けで、土木工事等のための発掘に係る指示について、保存不能な900m²に対して本発掘調査を、残り部分を市教委による工事立会いを実施することを通知して、**㈱山田不動産**は、市教委に埋蔵文化財発掘調査依頼書を同年8月28日付けで提出してきた。

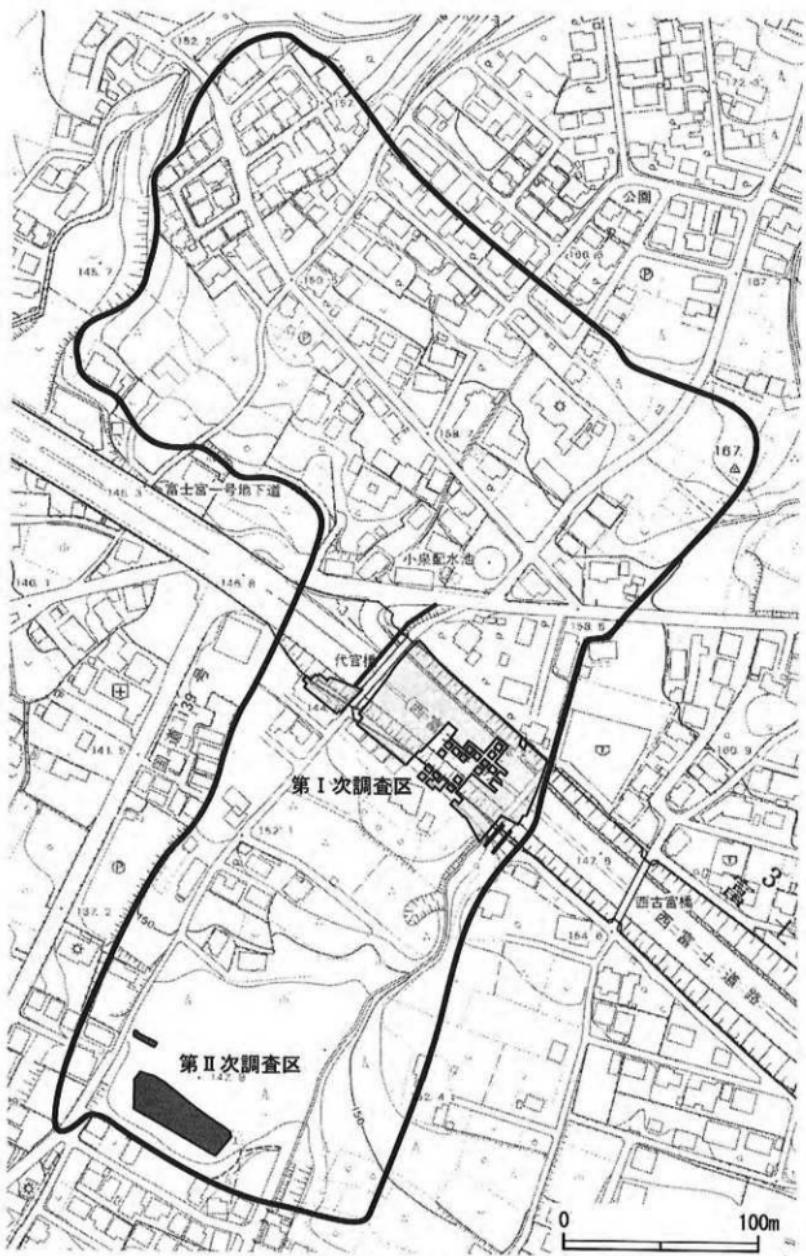
また、**㈱山田不動産**は本発掘調査の迅速化を図りたいとして、同日に**㈱東日**と埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託契約を締結し、併せて市教委と3者をもって「富士宮市代官屋敷遺跡埋蔵文化財発掘調査等に関する協定書」を交わした。

発掘調査は市教委が主体となり、平成21年9月7日から重機による抜根・表土除去を行い、同14日から人力による掘削が開始された。表土から栗色土・富士黒土層と包含層を除去しながら、遺構構築面を追及したが、表土面の平坦とは予想に反して調査区中央が大きく窪んだ、南北に開口するC字状の地形が検出されたため、掘削深度は予想以上となった。

この緩斜面に縄文時代早期後半を主体にした集石跡が10基、炉穴跡4基、土坑3基等が検出され、土器片、石器等石器片を合わせて収納コンテナ7箱分の遺物を得た。現地調査は平成21年11月20日に終了し、同年11月24日から12月9日に遺物の洗浄と注記を行い基本的な整理作業を終えた。

出土文化財は平成21年11月30日付けで、県教委教育長宛に埋蔵文化財保管証を、同年12月1日付けで富士宮警察署長に埋蔵物の発見届を提出し、同年12月28日付け、静宮計第76号で埋蔵文化財の認定を受けた。

以後、本格的な整理作業と報告書作成作業を実施して、平成22年5月31日に本書の刊行をもって本事業を完了した。

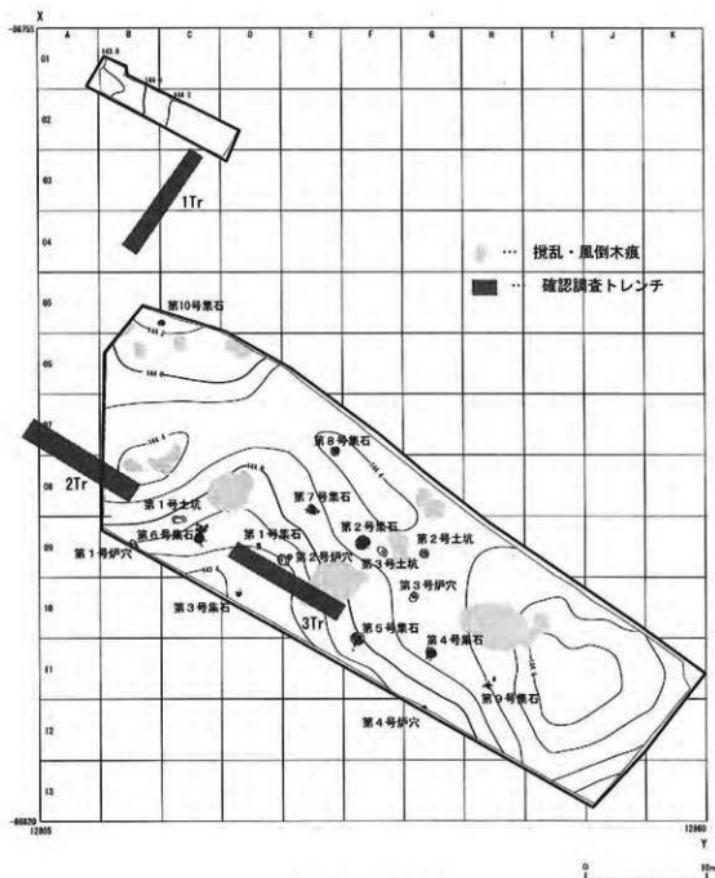


第3図 調査区位置図

2. 遺跡の現況と調査の方法(第4・5図)

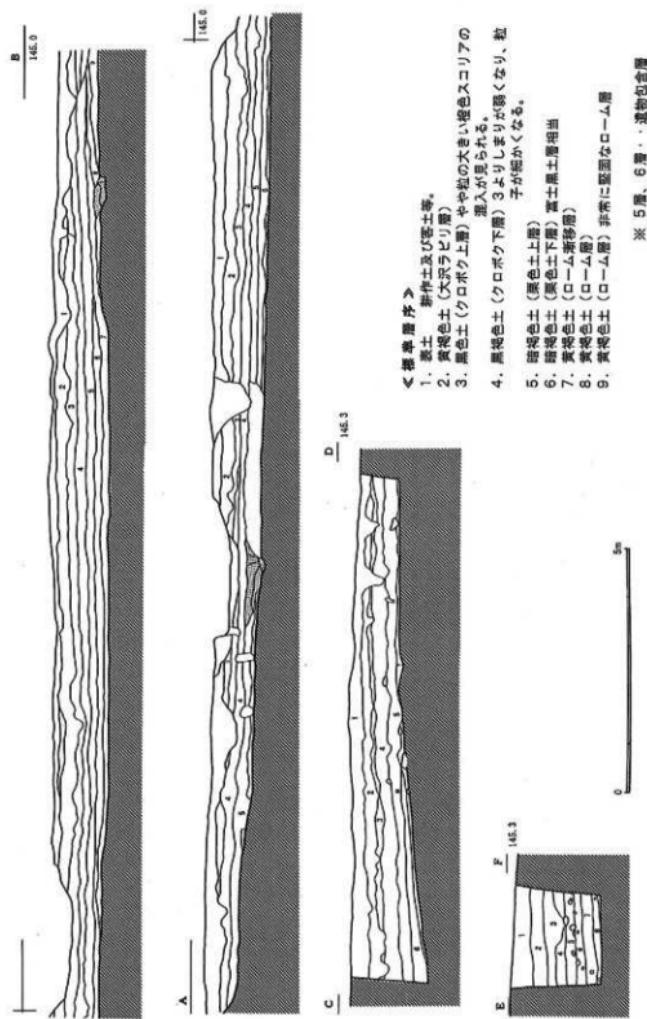
代官屋敷遺跡のうち、今回の発掘調査の対象となったのは包蔵地の南辺の台地先端で、それより南は比高20mで沖積地に下る崖状の肩部分にあたり、西側は古富士泥流の露頭を直接看取できるほどの急峻となっている。東側は台地の源頭部に湧出した鍋沢川によって侵食谷が形成されて、幅150m程の独立した地形景観が作られている。

この鍋沢川は開発計画地一帯に至ると、計画地の北70mで西へ大きく抉り込んで計画地の北側に当たり、それから東へ向けて大きくS字状に迂回している。この蛇行の原因は侵食されにくい古富士泥流の間を流水が縫った結果で、計画地は東西90m、南北50mの東西に長い蒲鉾状の地形となって残っている。



第4図 遺構分布図

第5図 土層図



開発計画地の現況は40～50年生のヒノキの植栽がされ、それ以前は畑地耕作がされていたと言う事で現表はほぼ平らに成形されていた。また、東側一帯は植林以前に觀賞用梅園としたため、小丘の高まりが掘削された痕跡や、一面に重機の掘削痕が10箇所以上に認められた。

発掘調査区の土層堆積状況（第5図）は、本地域の自然堆積構造を示している。東西の端にそれぞれ小丘が存在していて、そこからの攪拌された流入土が下層部分に認められ、また、両端の小丘より中央に緩く下る地形条件となるため中央の堆積が厚くなっている。その状況から遺構構築面の等高線を追うと、調査区中央から南西に向かって緩く開口する馬蹄地形が描かれる（第4図）。遺物はV層暗褐色土層（栗色土上層）からVI層暗褐色土層（栗色土下層）富士黒土層相当を主体に包含され、それぞれの漸移層に少量が散在しながら地形に沿って窪み面に向かった散布を見る。

なお、調査区には風倒木痕が5箇所、古富士溶岩瘤状露頭が1箇所出土したが、昭和50年代に調査が実施された代官屋敷遺跡、若宮遺跡に共通する出土物である。縄文草創期から早期の遺跡の発掘調査で掘削深度が深くなり、古富士泥流上部層に達すると確認される傾向にある。

開発計画地はおよそ東西75m、南北35m、面積3773m²で、調査区はそのうち、遺跡の保存が不可能な北側擁壁部分（北側調査区）と、中央道路及び駐車場（南側調査区）の900m²が対象となった。これに座標に沿って5mの方眼を設定し、東西にアルファベット、南北に数字列を用い、グリッドは左上交点をもってグリッド名とした。それにより、A～K、1～13まで53グリッドが対象となった。

また、国家座標（世界測地系・平面直角座標第VII系）上の位置は、A 1杭がX = -86755・Y = 12805、L 14杭がX = -86820・Y = 12860を示している。

第III章 遺構

1. 集石

1号集石（第6図）

位置 D 9グリッドの北側中央に検出される。標高143.8m付近にあたり、調査区西辺で緩い南向き斜面に位置する。南東3mで2号炉穴、さらに隣接して焼土ブロックを見るなど、燃焼遺構がまとまつた中にある。

構造 6個の角礫から構成された、検出遺構中最も小規模な集石である。50cm程の範囲のなかに15cm前後の人頭大に近い大形礫4個を主体にして組まれ（非被熱礫1個）、下部に構造は持たない。

遺物 なし。

2号集石（土坑）（第7図）

位置 F 9グリッドの北西に検出される。標高144.1m付近で、調査区中央の平坦面に位置する。南東2mに3号土坑が、西5~6mに7号集石や焼土ブロック等の遺構がある。最も近い集石土坑は、北7mに8号集石（土坑）跡がある。

構造 集石 111個の角礫から構成される。範囲は径120cm程の円形で、土坑に応じた配置となっている。構成礫は10~20cm程の丸味を帯びた角礫で、拳大が主体で半数に明確な被熱痕が見られる。坑底よりおよそ2段で積まれ、下層の礫が幾分大きい。底面には数個の扁平礫が敷かれていた。礫間に炭化財が目立つ。

土坑）形状は北西-南東に若干長い略円形で、規模は115×100cmを測り、集石域より一回り小さい。深さは20cm、皿状で埋土・覆土に焼土は目立たない。

遺物 なし。

3号集石（第8図）

位置 D10ポイントから南西1.5m程に検出される。標高143.5m付近で、調査区南西隅の最も窪んだ地点に位置する。北東5.5mで2号炉穴、北西6mで6号集石（土坑）と接するが遠く他遺構と隔絶した感じを受ける。

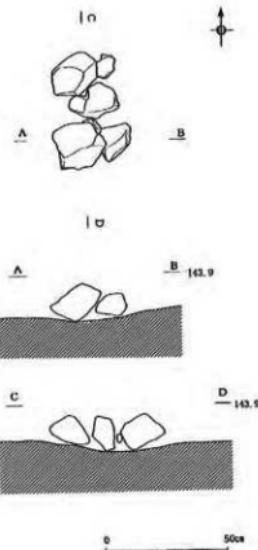
構造 11個の角礫で構成される。50cm程の範囲のなかに納まり、下部に構造を持たないなど、1号集石に似る。10cm内外の扁平な割礫5個を敷いた周間に拳大の被熱礫6個を並べている。

遺物 なし。

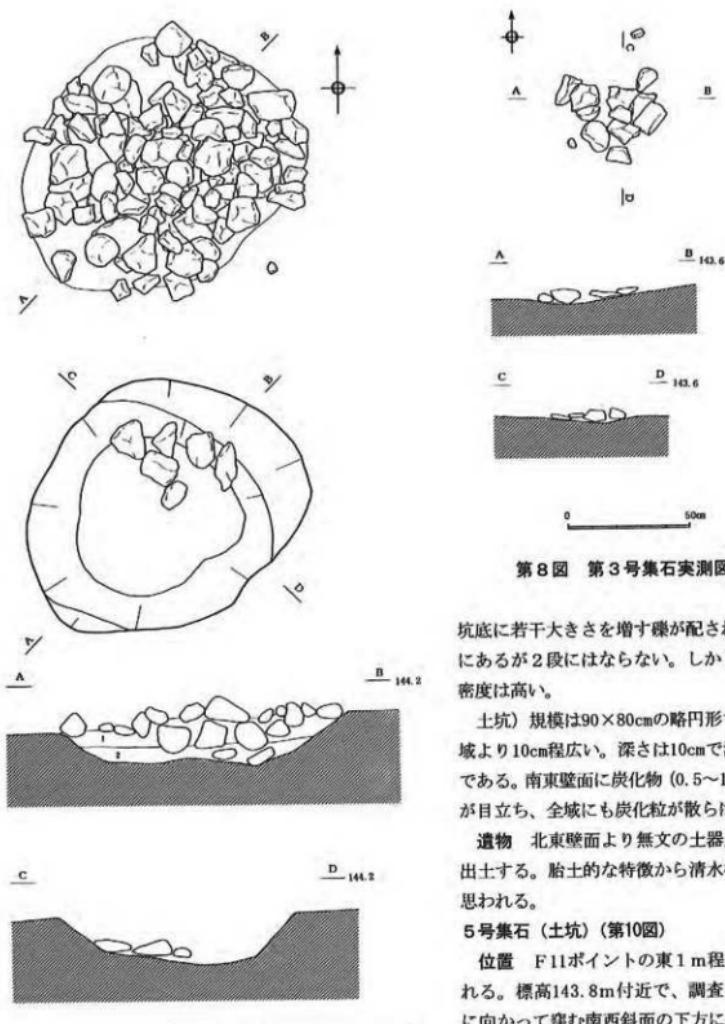
4号集石（土坑）（第9図）

位置 G11グリッドの北西に検出される。標高144.2m付近で、調査区中央南に向かって馬蹄形に窪む南西向き斜面に位置する。本跡を中心に5·6m離れて東に9号集石、西に5号集石（土坑）、南に4号炉穴、北に3号炉穴を見て、調査区東側の遺構集中区にある。

構造 集石 48個の角礫から構成される。範囲は径75cm程の略円形で、大方が土坑の窪みに応ずるが、南北に2個がずれる。構成礫は10cm前後の丸味を帯びた角礫で、数個を除いて被熱痕が明瞭に認められる。



第6図 第1号集石実測図



第7図 第2号集石実測図

1. 黄色土 粒子が細かく、粘性、しまりが強い。橙色スコリアを少量含む。
2. 褐色土 ロームブロック、炭化物（炭化材、1~2cm大）の混入が見られる。

第8図 第3号集石実測図

坑底に若干大きさを増す砾が配される傾向にあるが2段にはならない。しかし、集積密度は高い。

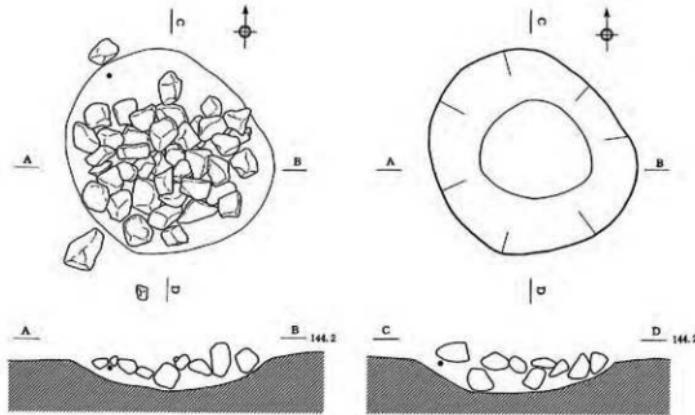
土坑 規模は90×80cmの略円形で、集石域より10cm程広い。深さは10cmで浅い椀状である。南東壁面に炭化物（0.5~1.0cm大）が目立ち、全城にも炭化粒が散らばる。

遺物 北東壁面より無文の土器片が1点出土する。胎土的な特徴から清水柳E類と思われる。

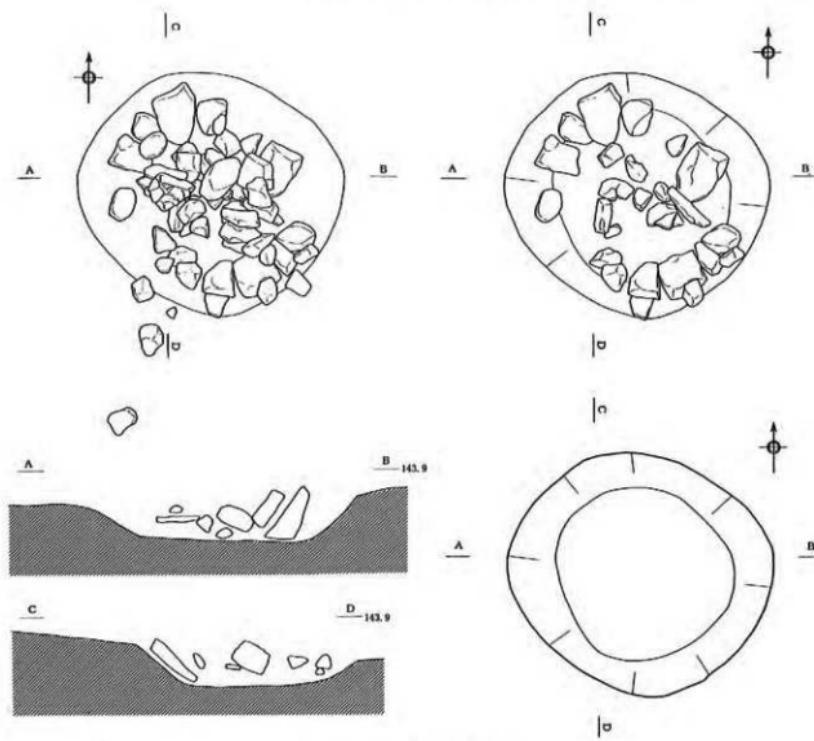
5号集石（土坑）（第10図）

位置 F11ポイントの東1m程に検出される。標高143.8m付近で、調査区中央南に向かって窪む南西斜面の下方に位置し、斜面を東へ6m上ると4号集石（土坑）、北東に6m上る3号炉穴を見る。北西から南西には遺構は遠く離れる。

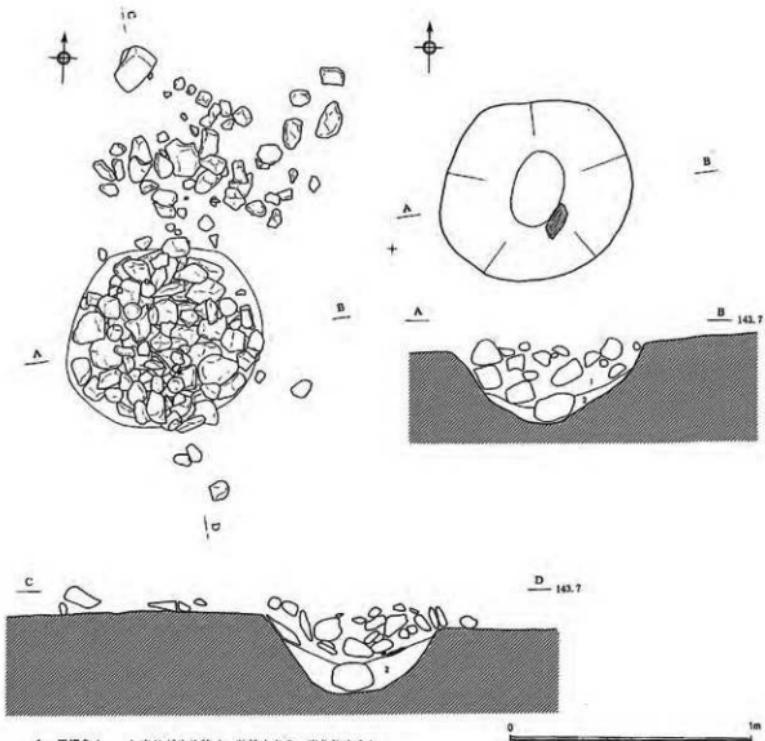
構造 集石 54個の角砾から構成される。範囲は径95cm程の円形で、土坑の底みに沿



第9図 第4号集石実測図



第10図 第5号集石実測図



第11図 第6号集石実測図

って一辺20cm程の板状割礫を張り付けるように回している。その内側の底面に10cm前後の拳大や小板状の角礫を置き、上に20cm前後の大形角礫を無造作に置いて密度は高くない。大半の礫に明瞭な被熱痕が認められる。

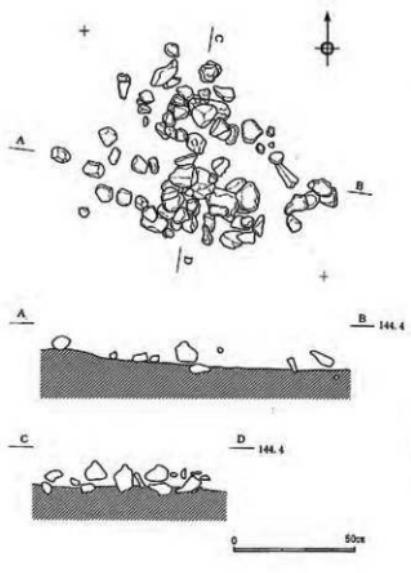
土坑）規模は径100cmの略円形で、板状の割礫が組まれるため外側に10~15cm広く穿たれている。深さは20cm程で、断面は皿状となる。坑内の炭化粒は下層に従い量を増すものの、全体的には微量である。

遺物 坑内下部より黒曜石片が出土する。

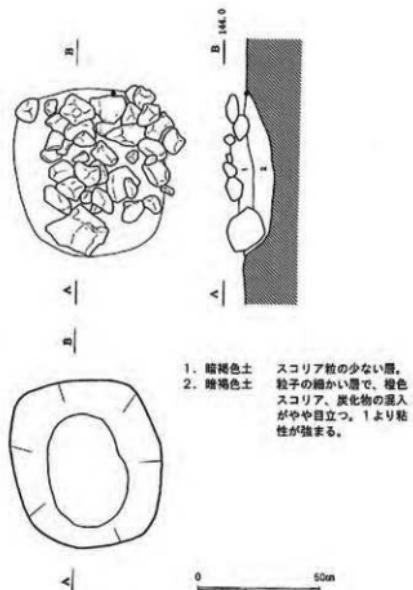
6号集石（土坑）（第11図）

位置 C 9グリットの中央北に検出される。標高143.6m付近で馬蹄形地形の南東向き斜面に位置し、馬蹄形地形のなかに分布する集石土坑では最も西に構築されたものである。北西に隣接して1号土坑、さらにそれぞれ5m程して西に1号炉穴、東に1号集石、南東に3号集石を見て、それらに囲まれた中にある。

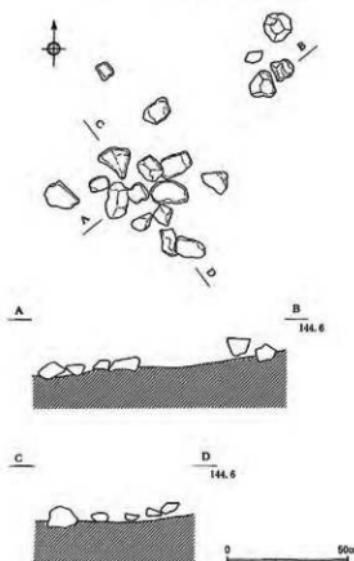
構造 集石）南北150cm、東西100cmの広い範囲に159個の角礫で構成されて、その南側に土坑が穿たれ、そのうちの112個が納められていた。構成礫は10cm前後の丸味を帯びた拳大の角礫を主体にして、15~20cmの角礫が混じり、被熱痕も大半に認められて大過もなく、同一行為のものとの遺構と理解できる。坑内の



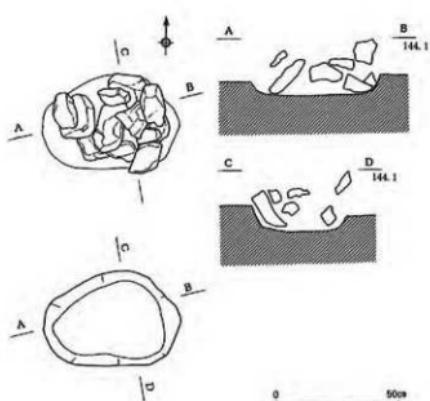
第12図 第7号集石実測図



第13図 第8号集石実測図



第14図 第9号集石実測図



第15図 第10号集石実測図

集積状態は底に径20cm程の人頭大の礫を配し、その上部に3段以上で隙間なく詰め、その密集度と厚さは本遺跡出土のなかで最も高い。

土坑) 規模は径80cmの略円形、深さは30cm程を測る椀状で、集石は坑底より溢るように詰められている。埋土には10cmを超える炭化材が認められたが、特に炭化粒が目立つことなく、他集石土坑と差を感じるものではなかった。

遺物 なし。

7号集石跡（第12図）

位置 E8グリッドの南側中央に検出される。標高143.9m付近にあたり、調査区中央北側に拡がる平坦面に位置する。北東5mに8号集石（土坑）、南東5mに2号集石（土坑）、南西4m一帯に1号集石、2号炉穴、焼土ブロック塀を見るが、北西から西に向かって遺構が無くなるから、遺構群の外縁にあたるか。

構造 82個の角礫を120×70cmの東西に若干長い範囲に集積している。全体的には南北2箇所の径15cm前後の拳大より幾分大き目の礫の周囲を10cm前後の拳大の礫で2・3段に積んでいる。大形礫には被熱痕はないが（地山礫に可能性高い）、拳大の礫は本遺跡の普通の被熱率が伺える。

遺物 なし。

8号集石（土坑）（第13図）

位置 F8ポイントの北東0.5mに検出される。標高144.0m付近の調査区の北側平坦面で、南東5mに7号集石を見る以外は遺構に遠く離れ、馬蹄形緩斜面に沿って並ぶ遺構群の北西外縁にあたる。

構造 集石) 39個の角礫から構成される。径70cm程の円形に集積されるが、南西側の被熱されない25cm程の大形角礫に、径10cm前後の通例の被熱割合を持つ拳大の礫が押し被さるように配されている。それは2段に積まれる部分もあるが、坑底に及ぶ事無く、密集度も高くない。

土坑) 規模は径65cm程の略円形で、およそ集石域をなぞる。深さは10cm程の浅い皿状で、埋土は暗褐色土で炭化粒の多少（下部多い）で2層に分かれる。

遺物 坑底より角せん石破片1片が出土する。

9号集石（第14図）

位置 H11グリッドの中央南西に検出される。標高144.4m付近にあたり、調査区の最東辺で、緩い南西向き斜面に位置する。それより東は円丘状の高まりが掘削されて平坦に整形されており、遺構の最東端である確証はない。北西6mに4号集石（土坑）、南西に6m下って4号炉穴がある。

構造 20個の角礫から構成される。120×90cmの範囲に10cm前後の拳大の礫が散在的に配されている。大方の礫に明瞭な被熱痕が認められる。

遺物 なし。

10号集石（土坑）（第15図）

位置 C6ポイントの直ぐ北に検出される。標高139.9m付近で、調査区の北西端の標高が最も高い場所にあたり、南17mに1号土坑、南東18mに8号集石（土坑）と他遺構に遠く離れて単独で位置する。

構造 集石) 12個の角礫から構成される。45×40cmの範囲に15cm前後の拳大より幾分大き目の礫が坑内に2~3段で隙間なく納められている。被熱痕は上部の礫に明瞭に観察されるが、坑底のものは明瞭でない。狭い坑のなかに本遺跡の一般的な構成礫より大き目の礫を押し押し詰めた状況は、位置関係からも他集石土坑とは差異が認められるものである。

土坑) 規模は55×40cmの東西に若干長い椭円形で、集石域に準じている。深さは10cmで皿状であるが、集石上部の礫のレベルから見ると20cm以上で穿たれていたものと思われる。埋土の炭化粒は目立たない。

遺物 なし。

2. 炉穴

1号炉穴（第16図）

位置 B 9 グリッドの中央で、調査区の西隅にあたり、土層断面の確認のための掘削時に検出されたものである。標高は143.5m付近で上部を本地域の標準土層に80cm程で覆われ、縄文早期の包含層である黄褐色土層漸移帶からの掘り込みが観察できる。北東5mに1号土坑、及び6号集石（土坑）を見るが、西から北に遺構は無く馬蹄形地形に並ぶ遺構群の西端として捉えられる。

構造 幅40cm程で長さ90cm以上、深さ25cmの細長い構造をもつ炉穴で、西側面が深く掘り込まれて、焼土塊が詰まっている。

遺物 なし。

2号炉穴（第17図）

位置 E 10 ポイントの北1mに検出される。標高は143.6m付近で、調査区中央の緩い南東向き斜面に位置し、東に隣接して焼土ブロックの散在エリヤ、北西3mに1号集石を見る。

構造 100×80cmの略円形で、深さは30cmの逆円錐状の掘り方を主体に、北東壁に径40cm程の浅い小坑を伴っているが、同一遺構である確証はつかんでいない。焼土は坑中央から東壁にかけてブロック状に厚さ20cmで50×20cm程に拡がり、隣接する焼土ブロック散在エリヤとの関連も伺える。

遺物 なし。

3号炉穴（第18図）

位置 G 10 グリッドの中央北西に検出される。標高144.1m付近で、調査区中央から南西に緩く下る変換地に位置する。北4mに2号土坑、南5mに4号集石（土坑）を見て、馬蹄形の東側遺構群のひとつにあたる。

構造 80×60cmの北東—南西に長い梢円形で、北東寄りを径35cmで一段と深く掘り込んだ2段掘り風の掘り方をもって、最深で30cmを測る。焼土は深い坑より手前にかき出されたように30×15cmの範囲で肩の部分に詰まれている。

遺物 なし。

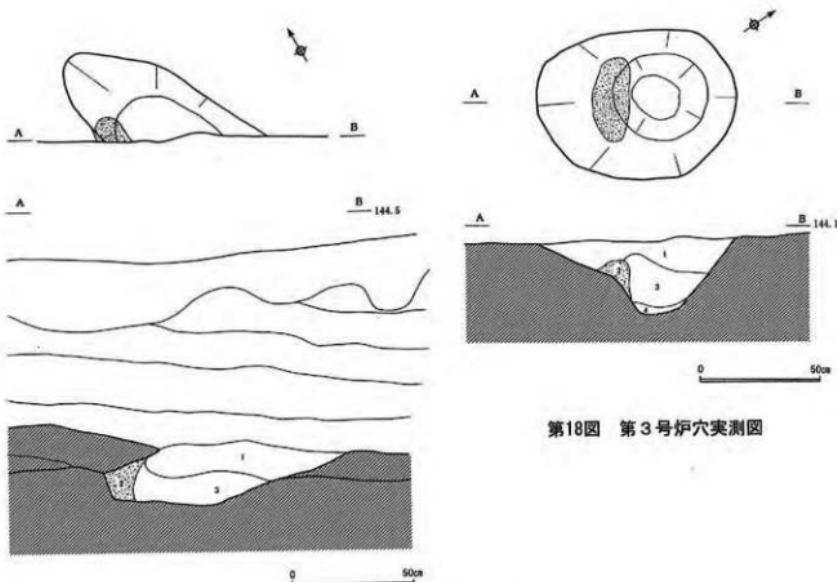
4号炉穴（第19図）

位置 H 11 グリッドの北西で、調査区の東端近くにあたり、土層断面作成のための掘削時に検出されたものである。標高は143.9m付近で、上部は東側小丘より下る搅拌土層に50cm程で覆われている。北4mに4号集石（土坑）、北東5mに上って9号集石を見る。これより東は円丘状の高まりが掘削され、遺構構築面が削取されている部分である。

構造 土層確認トレチの掘削部分で不明な部分が多いが、長さ180cmの細長い構造が想定される。西側に足場的な平坦があり、東側に径30cmの壇堀状の窪みが築かれ、その中に径20cm、厚さ5cmで焼土が充填されている。

遺物 なし。

以上、炉穴を説明するが、土層断面図作成のための掘削トレチ内から2基の炉穴が検出されたように、その構造的な性質から平面精査での遺構追及は不完全で、必ずしも本調査の実体数を現すものではないことを付記しておく。

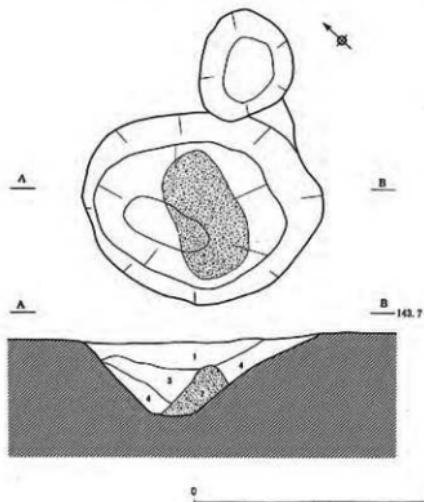


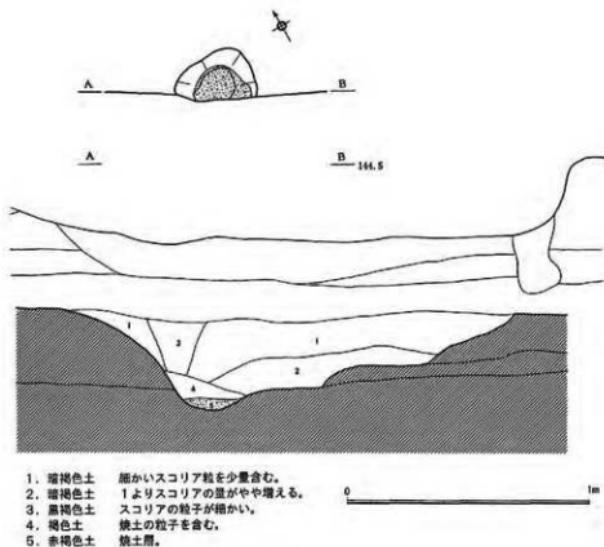
第18図 第3号炉穴実測図

第1号炉穴
 1. 褐色土 粘性が比較的強い層。スコリア粒子が見られる。
 2. 赤褐色土 焙土層。
 3. 黒褐色土 スコリア粒の混入が目立つ層。

第2号炉穴
 1. 黒褐色土 粘性のやや強い層で、スコリアを少量含む。
 2. 非褐色土 焙土層。
 3. 褐褐色土 粘性のやや強い層で、スコリアを含む。
 4. 褐色土

第3号炉穴
 1. 黑褐色土 粘性のやや強い層。
 2. 褐褐色土 焙土層。
 3. 黑褐色土 粘性のやや強い層で、スコリアを少量含む。
 4. 褐色土





第19図 第4号炉穴実測図

3. 土 坑

1号土坑（第20図）

位置 C9ポイントの東1mに検出される。

標高143.8m付近で、馬蹄形に並ぶ遺構の西縁にある。C9土層帶内に位置したため、南壁を失っている。南東に隣接して6号集石（土坑）を、南西5mで1号炉穴を見る。それより西から北へ遺構は広く空白となる。

構造 長さ110cm、幅80cmが推定される、東西に長い楕円形土坑である。深さは20cmで、坑底は平らな皿状を呈している。下部の埋土に若干の炭化粒を観察できる。

遺物 なし。

2号土坑（第21図）

位置 G9グリッドの中央に検出される。標高144.0m付近で、検出遺構中最も北東隅に位置する。西3mに3号土坑、南4mに3号炉穴を見、北西6mの2号集石（土坑）が最も近い集石土坑である。

構造 径70cmの円形で、深さ20cmの椀状の底面を持つ。坑底から10cm程上部に15~20cmを測る3枚の扁平剖面が組まれ、それを炭化粒含有の暗褐色土で覆っている。

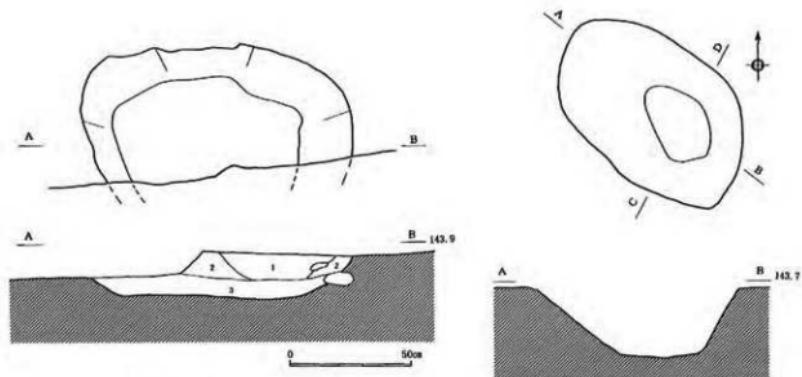
遺物 なし。

3号土坑（第22図）

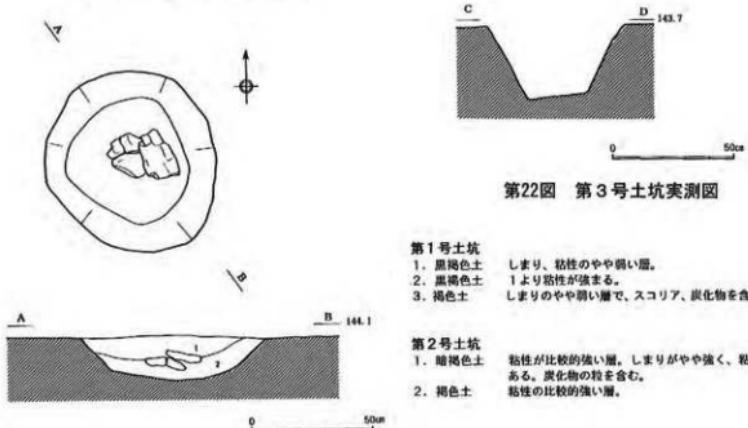
位置 F9グリッドの中央北西に検出される。標高143.7m付近で、調査区中央の平坦地から南西に向けて斜面が変わろうとする位置にある。北西3mに2号集石（土坑）、東4mに2号土坑を見る。

構造 90×60mの北西—南東に長い楕円形で、南東側に30cm程の深さの平坦な底面をもつ。壁面は底面より角をもって直線的に立ち上がっている。

遺物 なし。



第20図 第1号土坑実測図



第22図 第3号土坑実測図

第1号土坑

1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 暗色土

しまり、粘性のやや弱い層。
1より粘性が強まる。

第2号土坑

1. 暗褐色土
2. 暗色土

粘性が比較的強い層。しまりがやや強く、粘性もある。
炭化物の粒を含む。

第21図 第2号土坑実測図

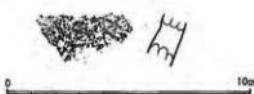
第IV章 出土遺物

1. 土器

本遺跡出土土器は、縄文時代早期前半から中期前半までの土器であり、以下の通り分類される。

出土層位は標準層序による5・6層の暗褐色土層であり、富士山南西麓の標準土層にてらすと栗色土層上層と下層(富士黒土層相当)にそれぞれ対応する(第5図)。一部、ローム漸移層からの出土も見られている。

- 第I群 燕糸文系土器(早期前半)
- 第II群 押型文系土器(早期前半)
- 第III群 高山寺式土器(早期中葉)
- 第IV群 貝殻沈線文系土器(早期中葉)
- 第V群 清水柳E類土器及びその併行時期の土器(早期後半)
- 第VI群 条痕文系土器(早期後半)
- 第VII群 前期・中期の土器
- 第VIII群 無文・その他の土器



(1) 遺構内出土土器(第23図)

第23図 遺構内出土土器

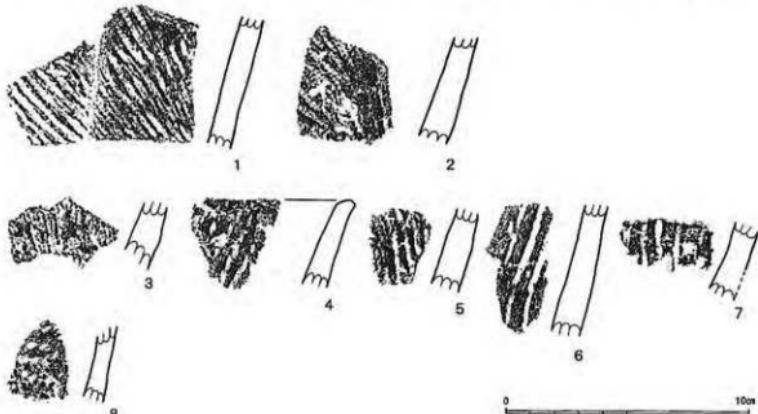
4号集石内より出土した。無文の胴部破片である。胎土には石英・長石といった無色鉱物が多く含まれ、有色鉱物・繊維等も含まれる。砂粒のようなものも見られ、胎土的特徴は第V群清水柳E類土器に類似する。

(2) 包含層出土土器

第I群 燕糸文系土器(第24・25図)

第1類 縄文土器(1・2)

1・2いずれも胴部の破片で、胎土に多くの繊維を含み、軽量で軟質である。色調も似かよっている。1は、縄文RLを斜位に施文している。破片の範囲内では密接施文である。2は、同じく縄文RLを斜



第24図 第I群土器実測図

位に施文しているが、縦位の帯状施文となっている可能性がある。

第2類 撫糸文土器(3~7)

第1類繩文土器と同じく、胎土に多くの纖維を含み、軽量で軟質である3~5と、3~5よりはやや纖維が少なく、白色鉱物等の粒が多量に混入される6・7がある。3は、胸部の破片で細い撫糸^トを使い縦位に密に施文している。4~7は、3よりも太い撫糸を使っていている。撫りは^トがほとんどと思われるが、5は1の可能性もある。4は口縁部で、口縁端部は若干外反し、斜位に撫糸文が施文されている。5~7は、胸部の破片で、縦位または斜位に撫糸文が施文されている。

第3類 線状帯圧痕文が施文される土器(8)

胸部破片である。第1・2類に比べ器壁が薄く、胎土に雲母や有色鉱物を多く混入し、纖維の有無はわからない。第1・2類に比べて硬質である。8の1例のみであり、時期不明である。

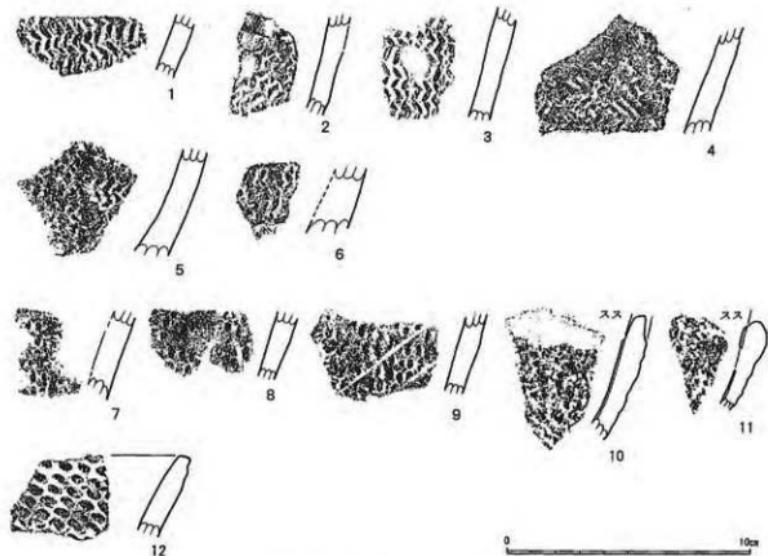
第II群 押型文系土器(第25・46図)

第1類 山形押型文が施文される土器(1~6)

第I群第1・2類土器の繩文土器・撫糸文土器と胎土の特徴を同じくし、多くの纖維を含み、軽量で軟質である。いずれも破片資料のため全体の文様構成は不明だが、観察できる範囲で見ると縦位密接に施文されていると考えられる。1~4は胸部、5・6は胸部~底部にかけての破片である。

第2類 構円押型文が施文される土器(7~11)

7~9は、山形押型文が施文される土器(第1類)と同様で、第I群第1・2類土器の繩文土器・撫糸文土器と胎土の特徴を同じくし、多くの纖維を含み、軽量で軟質である。いずれも破片資料のため文様構成は不明だが、観察できる範囲で見ると、縦位密接施文されていると考えられる。いずれも胸部破片であ



第25図 第II群土器実測図

る。10・11は同一個体とみられ、土器成形時の粘土接合部分が観察できる。胴部へ底部にかけての破片で、内面には煤の付着が著しい。胎土は、纖維は少ないか混入されておらず、比較的硬質である。外面は表面の剥離があり、施文方向はわかりづらい。12は、口縁部の破片で、口縁端部から横位密接に施文されている。胎土も一見して他と異なり、纖維は少ないか混入されておらず、無色鉱物等は少なく有色鉱物あるいは砂粒が多く混入されている。雲母も目立つ。12は、細久保式土器と考えられる。

第Ⅲ群 高山寺式土器(第26~31・47図)

第1類 比較的小さな楕円押型文が施文される土器(第26図)

口縁部から胴部上半の破片で内面に斜行沈線が見られる1~3と、胴部から底部の破片の4~16がある。1~3に見られる内面の斜行沈線は、ほりが深く沈線間の間隔も狭い。外面の楕円押型文は、楕円の形状がある程度はっきりしている4・5・10・14と、楕円というよりやや菱形に近い形状の1~3・6~9・12・13・15・16がある。押型文は施文が重複してなされているものがほとんどである。器壁はいずれも厚く、1.2~1.5cm程度である。胎土には粒の大きな石英・長石といった無色鉱物が多量に含まれている。

第2類 比較的大きな楕円押型文が施文される土器(第27図)

口縁部の破片1~4と、頸部破片の5・8、胴部破片の6・7・9~13がある。そのうち、1・2・8に内面に斜行沈線がある。ほりは第1類に比べて浅く、施文される範囲も短くなっている。また、沈線間の間隔は広いようで、破片の範囲では確認できない。1の内面斜行沈線は、先端が口唇部まで達している。3・4は口唇部に対して斜めに棒状工具による刻みがつけられている。

楕円押型文は、粗大で、ほりも深い。施文が重複することはない。また、第1類に比べ、土器表面が内外面共に平滑になっており、器壁も1.2cmほどのものもあるもの、口縁部では0.7cm程度と薄くなっている。焼成も第1類に比べ良好で、硬質の感がある。

胎土は第1類と同じく、粒の大きな石英・長石といった無色鉱物が多量に含まれている。

第3類 格子状撚糸文が施文される土器(第28図)

口縁部の破片1~4と、頸部から胴部にかけての破片5~14がある。そのうち、口縁部破片3では、内面の斜行沈線かと思われる部分がわずかに見られる。頸部でも口縁部に近い破片である6は、内面に斜行沈線が見られる。沈線はほりが深く、断面がL字状となっている。また、口縁部破片である1・2は、内面口唇部付近に刺突がみられ、口唇部に刻みが施されている。3は、波状口縁となっている。

格子状撚糸文は原体1またはRであり、1であるものの1~3・5~7・9~11・13・14、Rであるものの4・8・12である。原体1であるもののほうが多い。器壁の厚さは1.0~1.2cm程度のものがほとんどだが、口縁部付近で0.8cm程度の4・6のようなものもある。

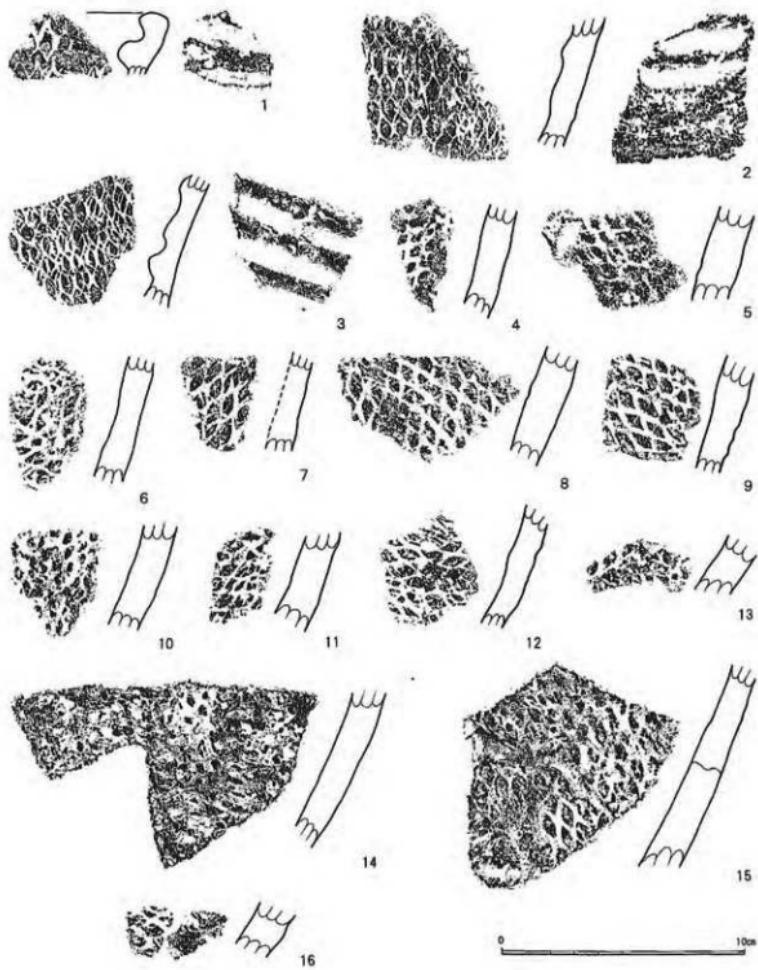
胎土は、第1・2類と同じく、粒の大きな石英・長石といった無色鉱物が多量に含まれている。第2類と同じように土器表面が平滑で、焼成が良好で硬質の感のある1~3、5~12・14と、第1類と同じくやや軟質の4・13がある。

10は、土器破片の破断面が一部磨耗しており、転用している可能性がある。

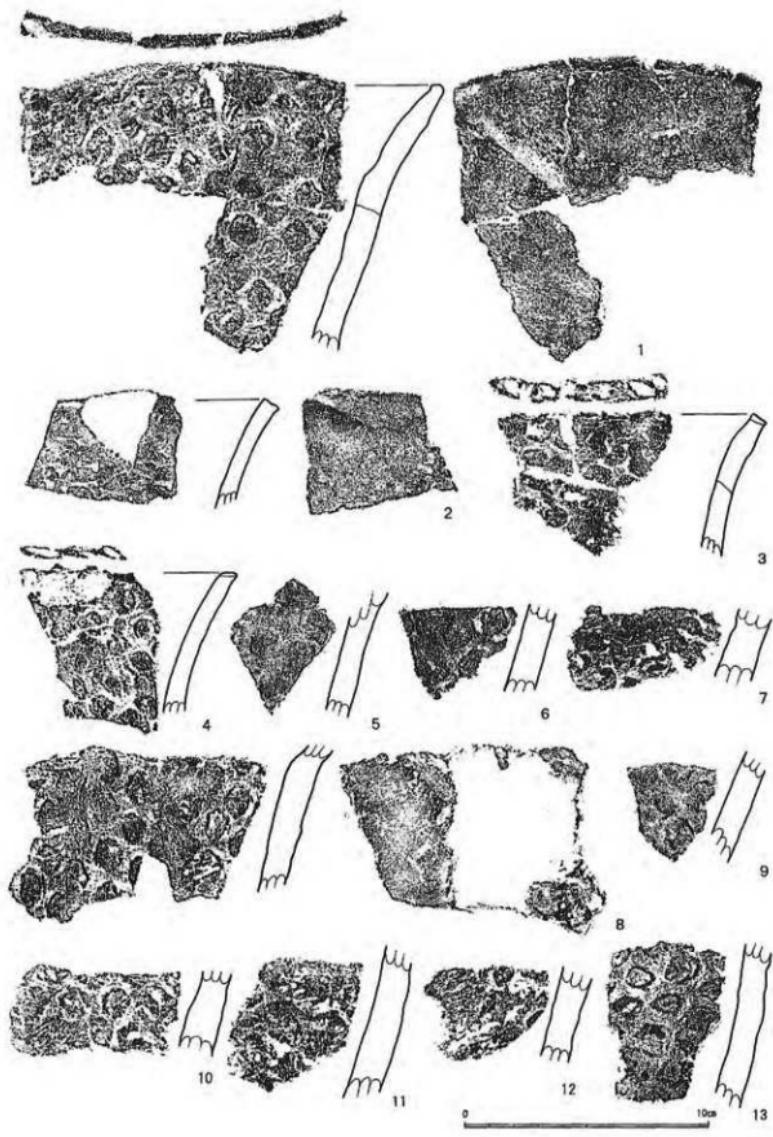
第4類 撥糸文が施文される土器(第29・30図)

撚糸文は、縦位から斜位に施文されている。口縁部破片である第28図1~3、頸部から胴部破片の第28図4~16、第29図1~7がある。そのうち、第28図3・7には内面に斜行沈線が施文されている。3の斜行沈線は、ほりが浅く、口唇部直下までの短い範囲、7の斜行沈線は、ほりが浅く、頸部まで施文されている。

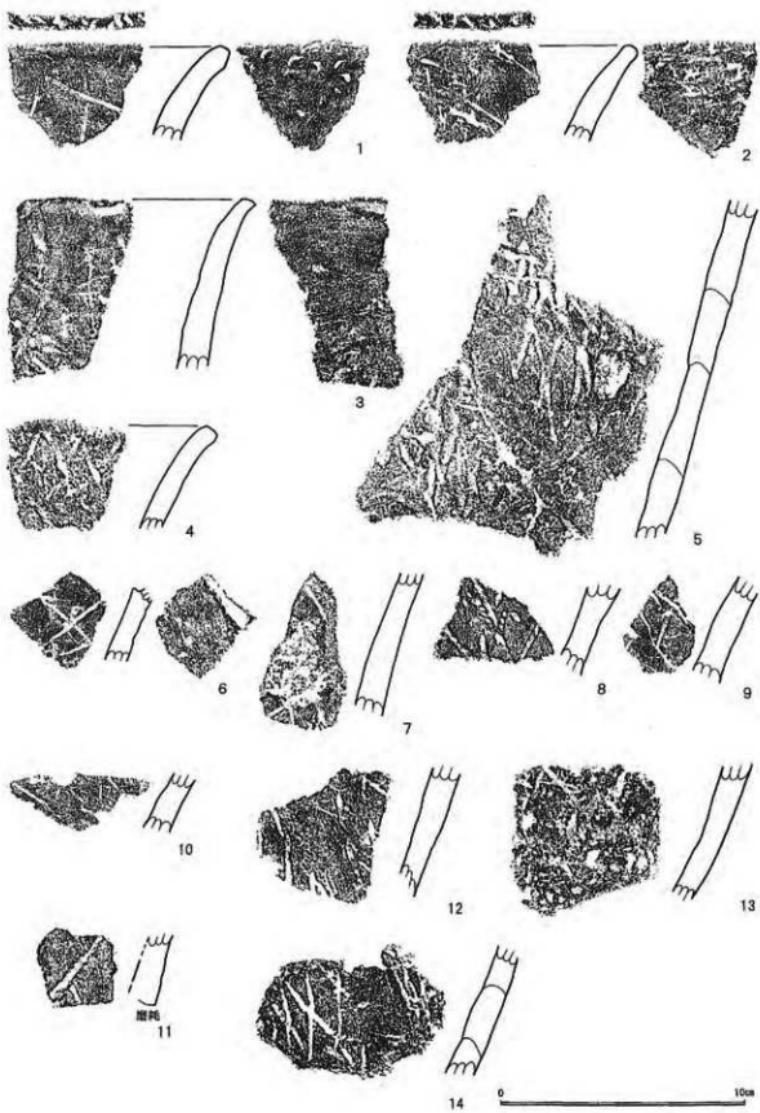
撚糸文は、施文単位が短かく、一部重複するなど乱雑に見受けられる。撚糸文は、原体1であるもの第



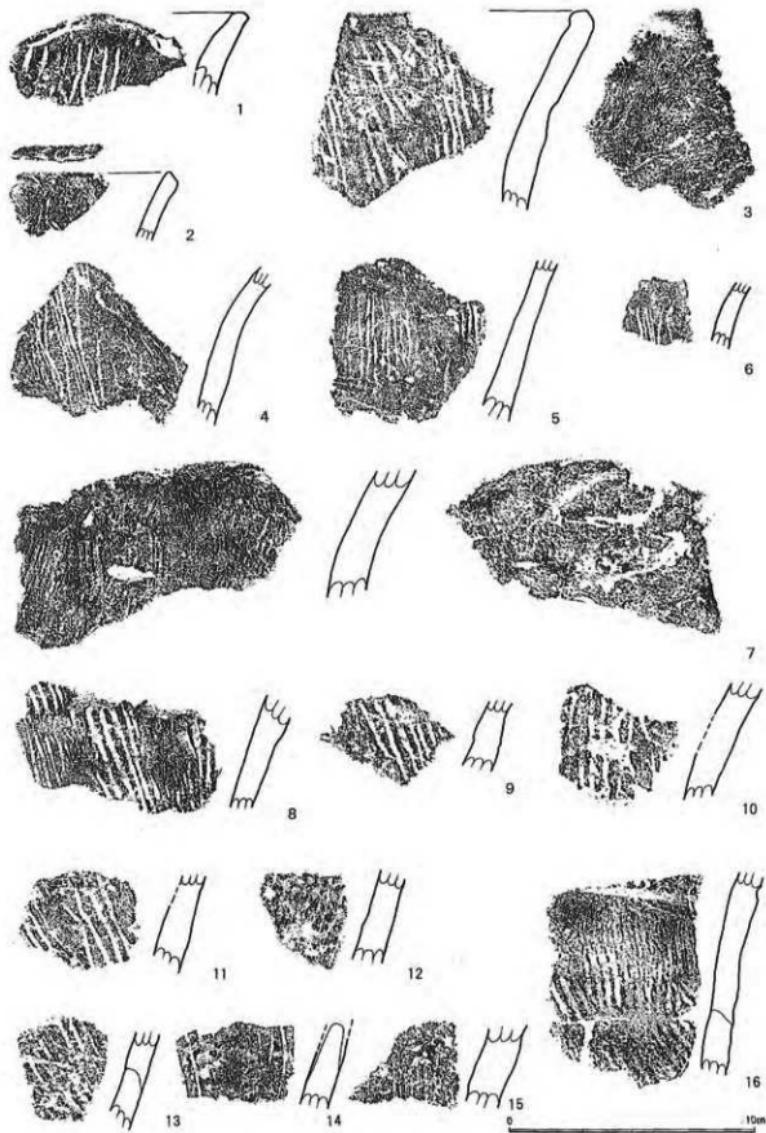
第26図 第III群第1類土器実測図



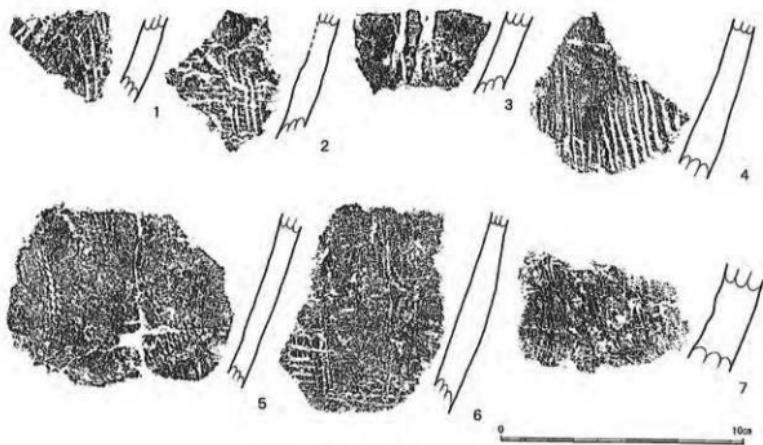
第27図 第III群第2類土器実測図



第28図 第III群第3類土器実測図



第29図 第III群第4類土器実測図(1)



第30図 第III群第4類土器実測図(2)

28図1・3・4・8・10・14・16、第29図1・2・4・6・7、原体rであるもの第28図5・6・7・13、原体Rであるもの第28図9、第29図3・5で、第3類格子状撚糸文の原体と同じく1が多く、原体Rが含まれることは共通するが、原体rのものが見られることは異なっている。器壁の厚さは第3類と同じく、1.0~1.2cm程度のものがほとんどだが、口縁部から頸部にかけて0.6~0.8cm程度のものがあり、また1.5cm程度の厚さのあるものも含まれる。

胎土は、第1~3類と同じく、粒の大きな石英・長石といった無色鉱物が多量に含まれている。焼成は、ほとんどが土器表面が平滑で、硬質の感があるものだが、器壁の厚い第29図15・第30図7はやや土器表面が粗く焼成も普通である。

第5類 無文の土器(第31図)

第1~4類土器に胎土的特徴や器形的特徴が類似する無文の土器である。1~8は口縁部の破片、9~16は胴部~底部にかけての破片である。いずれも、粒の大きな石英・長石といった無色鉱物が多量に含まれ、また繊維を含んでいる。焼成は、表面が平滑で、硬質の感がある1~6・8と、普通程度の7・9~16がある。器壁は口縁部では0.8cm程度と薄くなっているが、胴部以下は1.5~1.8cmと厚くなっている。

口縁部の形状は、大きく外反する1と、外反するもののやや直線的に立ち上がる2~6がある。そのうち、1・3には口唇部に斜め方向に押圧が加えられている。6には、穿孔が見られる。

第IV群 貝殻沈線文系土器(第32~48図)

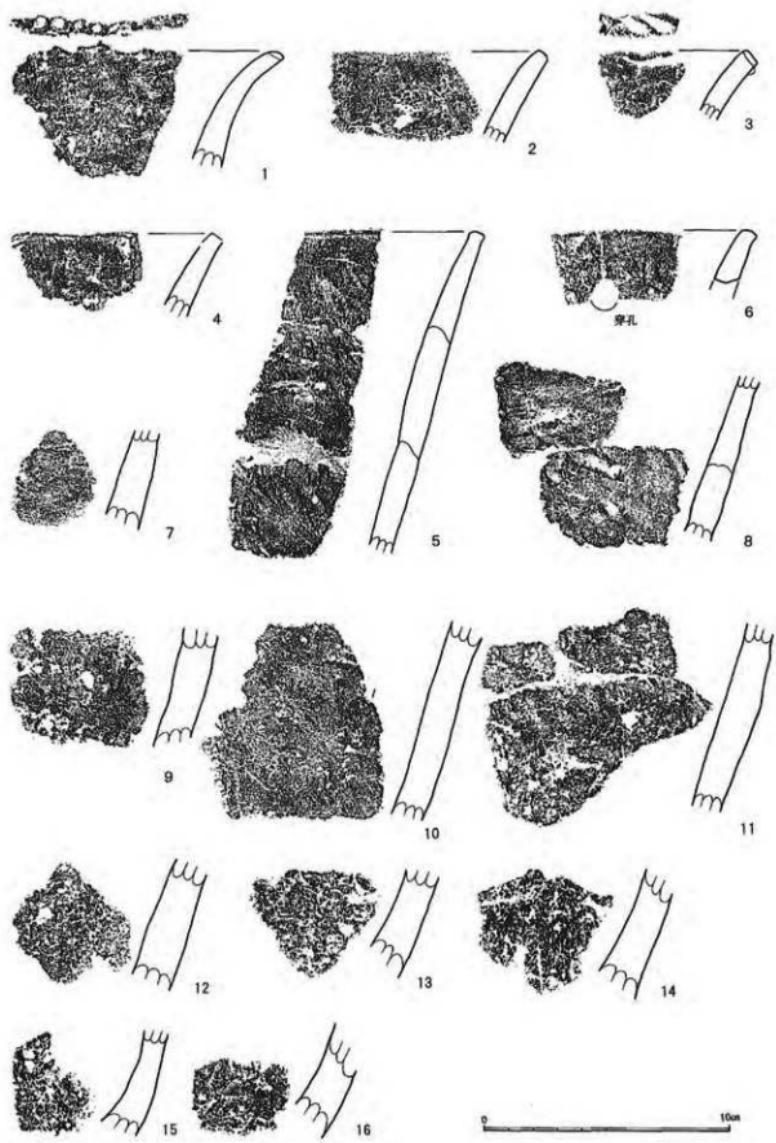
第1類 貝殻腹縁文を施す土器(1~2)

沈線による区画がなされ、沈線間に斜位に貝殻腹縁文を施している。いずれも、胴部上半の破片と思われる。1は、やや直線的に口縁部に向かい立ち上がる形状であるが、2にはわずかに内湾する傾向が見られる。文様構成に貝殻腹縁文を含むことから、田戸上層式終末の土器と考えられる。

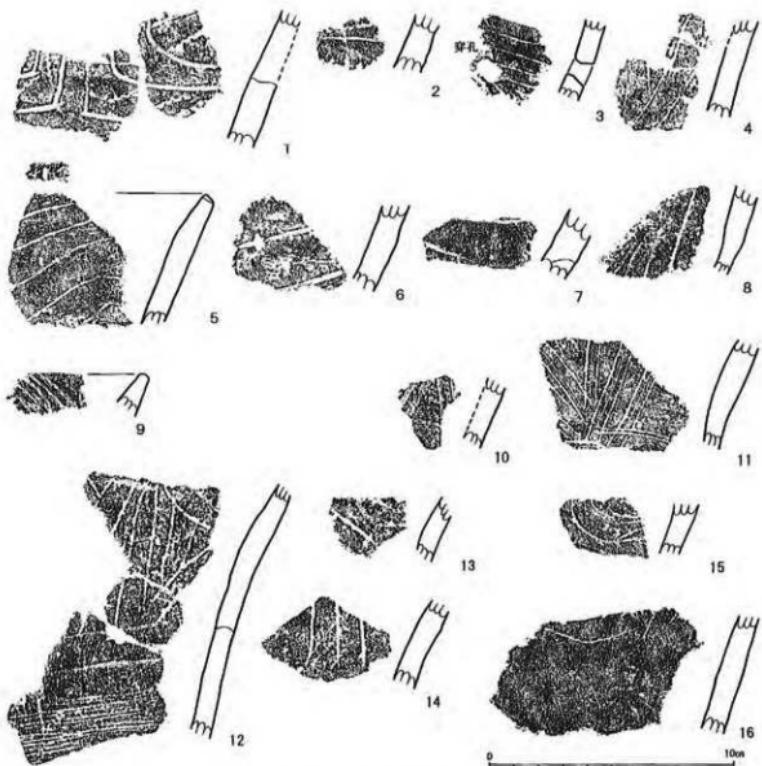
胎土には雲母は含まれず、やや大粒の無色鉱物あるいは砂粒のようなものが含まれている。器壁は1cm程度である。

第2類 1本単位の沈線を鋸齒状・矢羽状・綾杉状に施文する土器(3~9)

いずれも、小片のため、文様構成は不明であるため、沈線を鋸齒状・矢羽状・綾杉状に施文すると思わ



第31図 第Ⅲ群第5類土器実測図



第32図 第IV群土器実測図

れる土器を一括した。5・9は口縁部破片、3・4・6～8は胴部上半の破片である。口縁部が内溝すると考えられるものは3・6・7で、4・5・8・9は比較的直線的に立ち上がっていると考えられる。

3・4は、胎土に雲母を多量に含み、脆くなっている。沈線を胴部上半に船歯状に施文している可能性がある。貝殻腹縁文は見られない。

5～8は、1本単位である沈線が斜位に施文されており、矢羽状になっている可能性がある。5は、口縁部の破片で、口唇部に刻みが見られる。5～7は、沈線間の幅が広く、8は狭くなっている。

胎土に雲母を含むものは8のみで、5～7には含まれない。6は、胎土的特徴や焼成が第1類によく類似する。

9は、沈線間が狭く、わずかに継位の沈線が確認されることから、綾杉状に施文されている可能性がある。胎土には多量の石英・長石といった無色鉱物粒に加え雲母も含まれている。

第3類 2本単位の沈線を格子状に施文する土器(10)

半裁した竹管などを用いた2本単位の沈線を格子状に施文している。いずれも胴部上半の破片である。

口縁部まで比較的直線的に立ち上がっていると考えられる。10は、格子状の沈線下に横位の条線が確認できる。中部高地の長野県判ノ木山西遺跡で類似する多くの土器が出土しており、「判ノ木山西式」が想定されているものと考えられる。

第4類 3本単位の沈線を施文する土器(11~16)

いずれも胴部上半を中心とした破片である。胴部にくびれがみられる、11・12・14、くびれのみられない16がある。また、11・12は、口縁部がわずかに内湾すると考えられる。いずれの土器にも雲母が含まれ、有色鉱物が多く石英・長石といった無色鉱物が少ない。

11は、半裁した竹管などを用いて3本単位の沈線を施文しており、胴部上半に縦位の沈線を施文し、これを中心とした向かい合わせの斜位に同様の沈線を施文している。文様の下端は横位の同様の沈線で区画している。

12は、胴部上半に縦位の3本単位の沈線を施文し、これを中心とした向かい合わせの弧状に沈線を施文しているようである。文様の下端は横位の沈線で区画され、この部分が胴部のくびれ部分にあたっている。胴部下半は横位の条線が施文されている。13は、個体は違うが12の弧状沈線の施文と同様と思われる、口縁部に近い。14は、胴部のくびれ付近の破片と思われる。破片の範囲では、12に見られた横位の沈線による区画は見られない。

15は、3本単位の沈線を弧状に施文している。16は、3本単位の縦位の沈線と、弧状の沈線がみられる。文様下端を横位の沈線で区画しているようすは見られない。

第V群 清水柳E類土器及びその併行時期の土器(第33~35・49・53図)

第1類 絡状帯圧痕文を施文する土器(第33図1~第35図9)

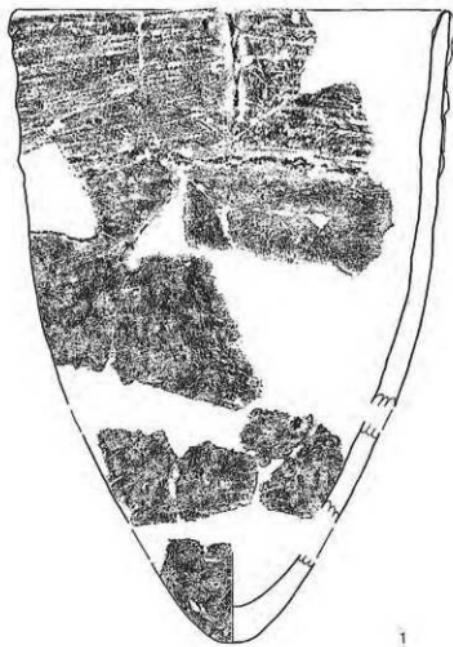
口縁部から胴部上半の破片である。本遺跡出土の清水柳E類土器は、同一個体と思われるものが多く、8個体程度出土したと思われる。そのうち、絡状帯圧痕文を施文する土器は7個体程度で、復原個体第33図1と第34図3~8、第34図1~3、同図4~9は、それぞれ同一個体と思われる。

文様は、胴部中ほどよりも上部から口縁部にかけて施文されている。絡状帯圧痕文を横位に施文するが、厳密なものではなく、やや斜位に施文する部分もある第33図1のような個体もある。第34図1、第35図1~3、同図4~9は比較的密に絡状帯圧痕文を施文しているが、それ以外のものは施文の単位がやや離れている。施文単位は重複することがあまりないようである。

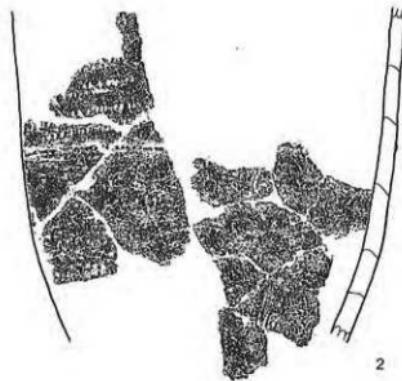
また、絡状帯圧痕文を微隆起線で区画した内部に施文する、第33図1・2、第34図38、第35図1~9と、微隆起線で区画された部分を無文とし、その直下から施文する第34図9がある。微隆起線は、口縁部から垂下する縦位の隆起線と横位の微隆起線で構成される。また、微隆起線は、第33図1・第34図9を見ると口唇部を越えて口縁内面まで連続して貼付されている。微隆起線の断面は、三角形状のようである。微隆起線の幅は一定ではなく、微隆起線上を斜位に絡状帯圧痕文を施文している第33図1・第34図3・4・7・8、第34図3・7~9、微隆起線上に横位に絡状帯圧痕文を施文する第33図2がある。第34図1には、微隆起線は見られず、横位の絡状帯圧痕文で文様帶を区画している。

土器の形状は、第32図1を見ると、口縁部は緩く外反するもののや直線的で、胴部中ほどから底部にかけてすぼまり、底部は尖底となる砲弾型である。他の個体も基本的に同様と思われるが、第35図1~3は、やや口縁部が大きく広がり口縁部文様帶部分にふくらみを持つようである。口縁部は、第34図1のように波状口縁となるものと、平縁となる第33図1・第34図3・4、同図9、第35図1、同図3・5がある。

胎土に纖維を多く含みやや軟質の感があり、器面が赤褐色を呈する第33図1の個体と、前者ほどではないが纖維を含み、石英・長石等の無色鉱物粒が多く混入し、器面が橙色へにぶい褐色を呈するその他の土



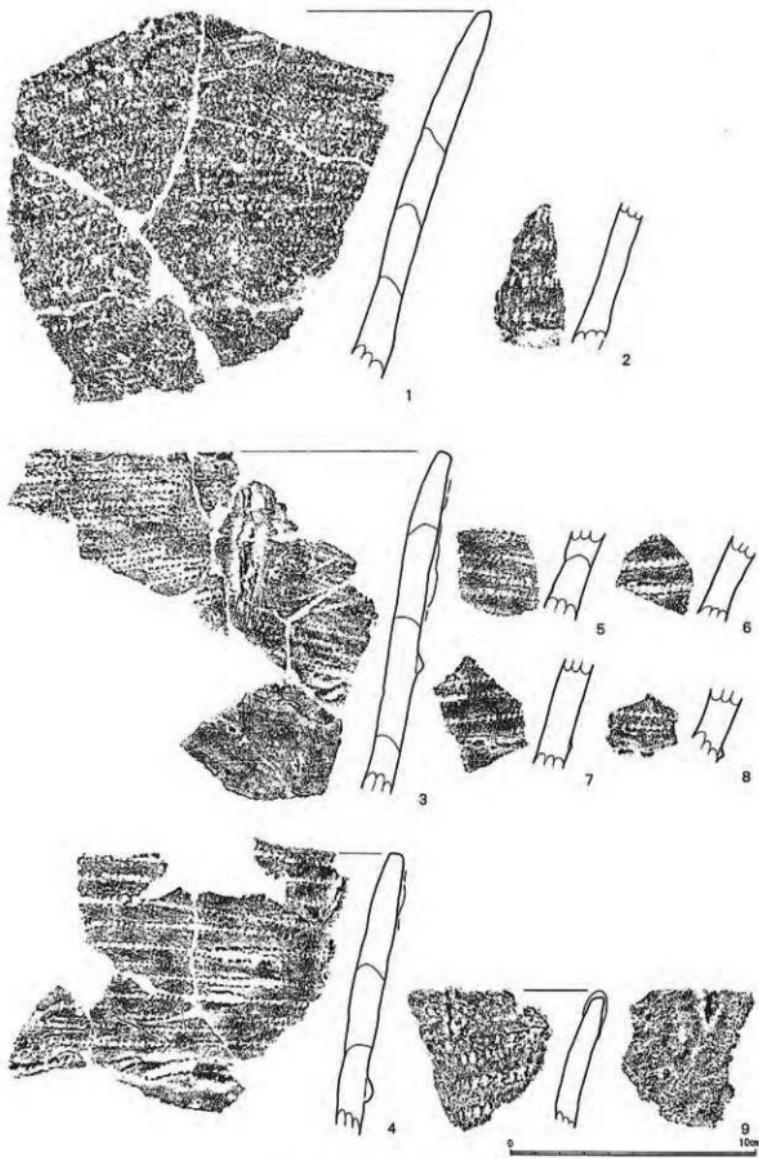
1



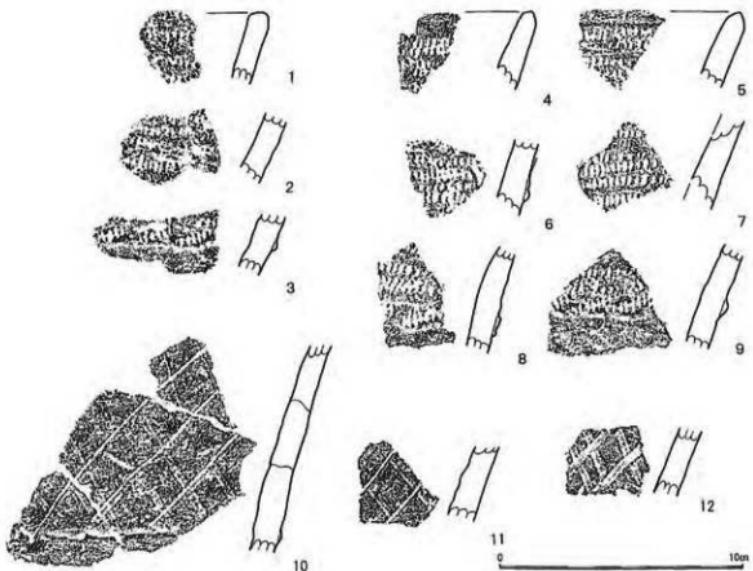
2

0 10cm

第33図 第V群土器実測図(1)



第34図 第V群土器実測図(2)



第35図 第V群土器実測図(3)

器に分かれる。

第2類 格子状沈線が施文されるもの(第35図10~12)

10・11は、同一個体と思われる。いずれも、第1類と同じく、胴部中ほどよりも上部から口縁部にかけて施文されている。格子状沈線は、5mm程の板状の工具によって施文されているようで、工具先端はささくれているため、線状痕が数条見られる。10には、横位の微隆起線が見られるが、格子状沈線の施文が達して一部途切れている。

胎土・色調共に、第1類の繊維を含み、石英・長石等の無色鉱物粒が多く混入し、器面が橙色～にぶい褐色を呈する土器と違いがない。

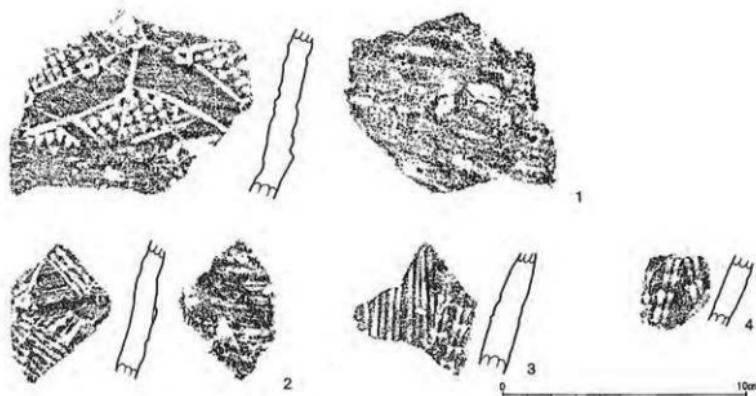
第VI群 条痕文系土器(第36~40・50図)

第1類 鶴ヶ島台式土器(第36図)

4点が出土し、全てを図示した。3・4は同一個体と思われる。1は、胴部に屈曲を有する土器片で、屈曲部から上に施文がなされ、下は無文となっている。文様は、沈線によって襷掛け状の無文帯を設け、その間を押引文で充填し、沈線の交点には円形の刺突文が施文されている。内面には斜位の条痕調整が見られる。胎土には、多量の石英・長石といった無色鉱物と有色鉱物が多量に含まれ、雲母も目立つ。

2は、横位の隆帶が見られる胴部の土器片で、隆帶の上部では、沈線による格子状の区画を設け、その間を押引文で充填しており、隆帶の下部では、鋸歯状に押引文を施文している。内面には横位～斜位の条痕調整が見られる。

3・4は胴部破片で、縦位の条痕状の沈線と、斜位の押引文が見られる。押引文は、2本単位で施文



第36図 第VI群第1類土器実測図

しているようである。内面には条痕調整は見られない。3・4の胎土は石英・長石といった無色鉱物粒が少なく、雲母が目立つ。

本類の土器には、全て雲母が含まれている。

第2類 元野式土器(第37~39図)

第37図1~4、第38図1・2、同図3、第36図がそれぞれ同一個体と思われ、胴部下半の条痕のみ見られる土器片である第38図4~7を合わせて5~6個体程度の出土と思われる。胎土は、以下のA種においては、石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物に加えて砂粒のような粒子が含まれており、纖維は比較的多く、器壁も場所によって厚さが0.6~1.0cm程度の範囲で異なっている。焼成は纖維が多いいやや軟質の感がある。B種では、胎土には砂粒のようなものは含まれず、纖維は含まれるがA種より少なく、器壁も0.6cm内外と均一になっている。

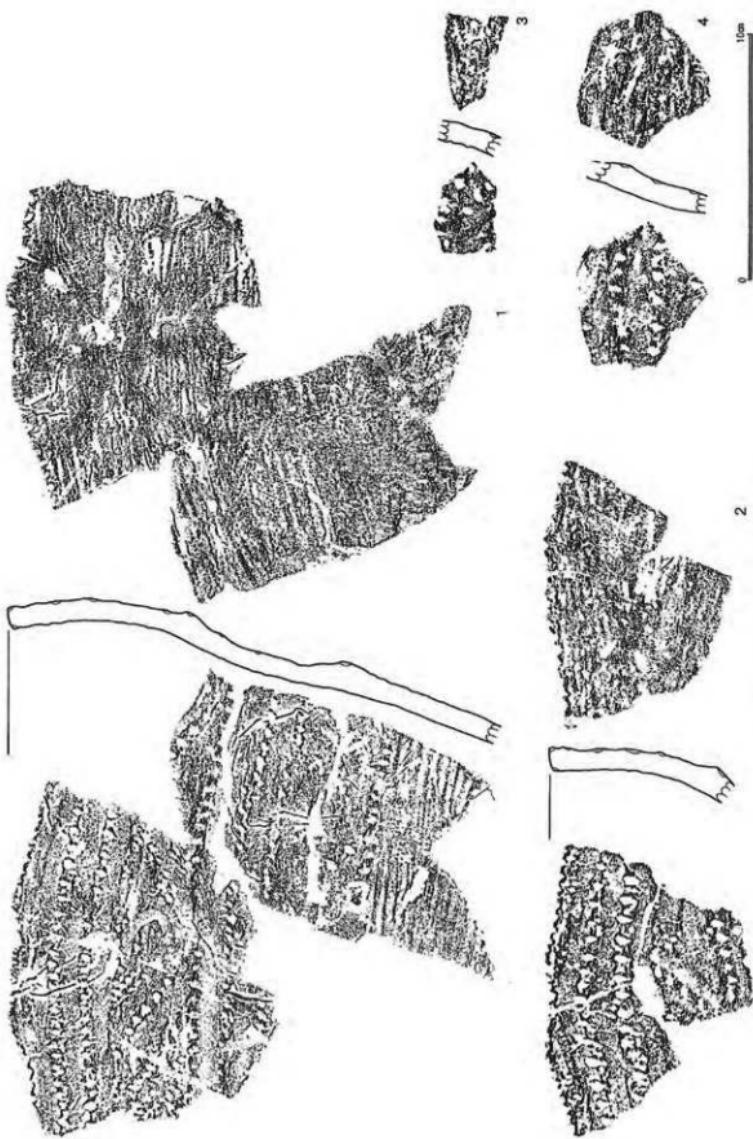
A種 3段の文様帶構成になるもの(第37図~第38図)

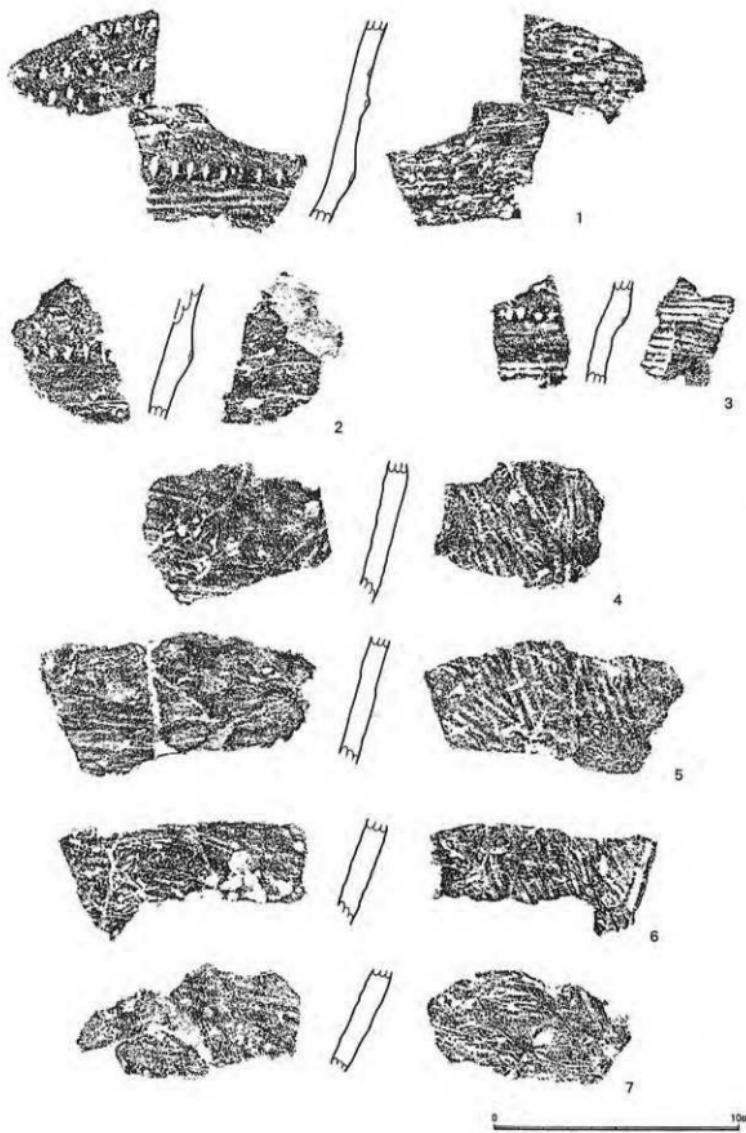
胴部に屈曲部を2箇所設け、口縁部文様帶、頸部文様帶、胴部文様帶の3段の文様帶を設けている。

同一個体である第37図1~4では、強く内湾する波状口縁となり、口縁部文様帶には浅い凹線で鋸歯状文を施し、凹線と凹線の間にできた微隆起部分の上に連続する刺突を施している。波状口縁部には2つの突起が作り出されている。口唇部には、内外面の端部に連続する刺突が見られる。第36図1に見られる頸部文様帶では、文様帶を区画する屈曲部と平行に、横位の刺突列が2条巡っているが、胴部文様帶に近い部分には刺突列は見られない。胴部文様帶には、胴部文様帶を区画する屈曲部に平行に横位の条痕が見られる。文様帶を区画する屈曲部上には、連続する刺突列が見られる。内面には、横位の条痕調整が見られる。また、この個体では、内外面共に赤彩されている可能性がある。

第38図1・2は、頸部文様帶から胴部文様帶にかけての破片で、前述の第37図の個体が、頸部の屈曲部に平行する横位の刺突列は2条であったのに対し、第38図1・2では3条以上あると考えられる。胴部に近い部分に刺突列が見られないのは同様である。胴部文様帶には、屈曲部に平行に横位の条痕が見られる。屈曲部には刺突列が見られる。内面には、横位の条痕調整が見られるが、2ではやや条痕が浅くな

第37圖 第VI群第2類土器實測圖(1)





第38図 第VI群第2類土器実測図(2)

っている。

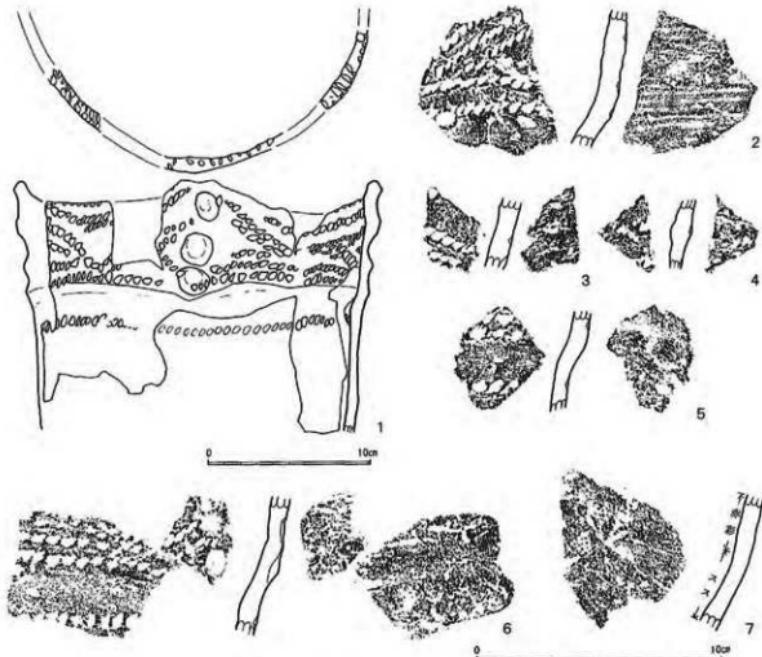
第38図3は、頸部文様帯から胸部文様帯にかけての破片で、頸部文様帯では、胸部文様帯に近い箇所に横位の刺突列が巡っているのが見られる。胸部文様帯では、横位の条痕が見られるが、前述の2個体とは異なり、屈曲部に沿ったやや幅広の凹線が巡っており、その下から横位の条痕を施している。内面には横位の条痕調整が見られる。

第38図4～7は、胸部に横位の条痕が見られ、胎土的特徴などがA種に類似することから、本種に分類した。ただ、内面の条痕が横位でなく斜位となっている。

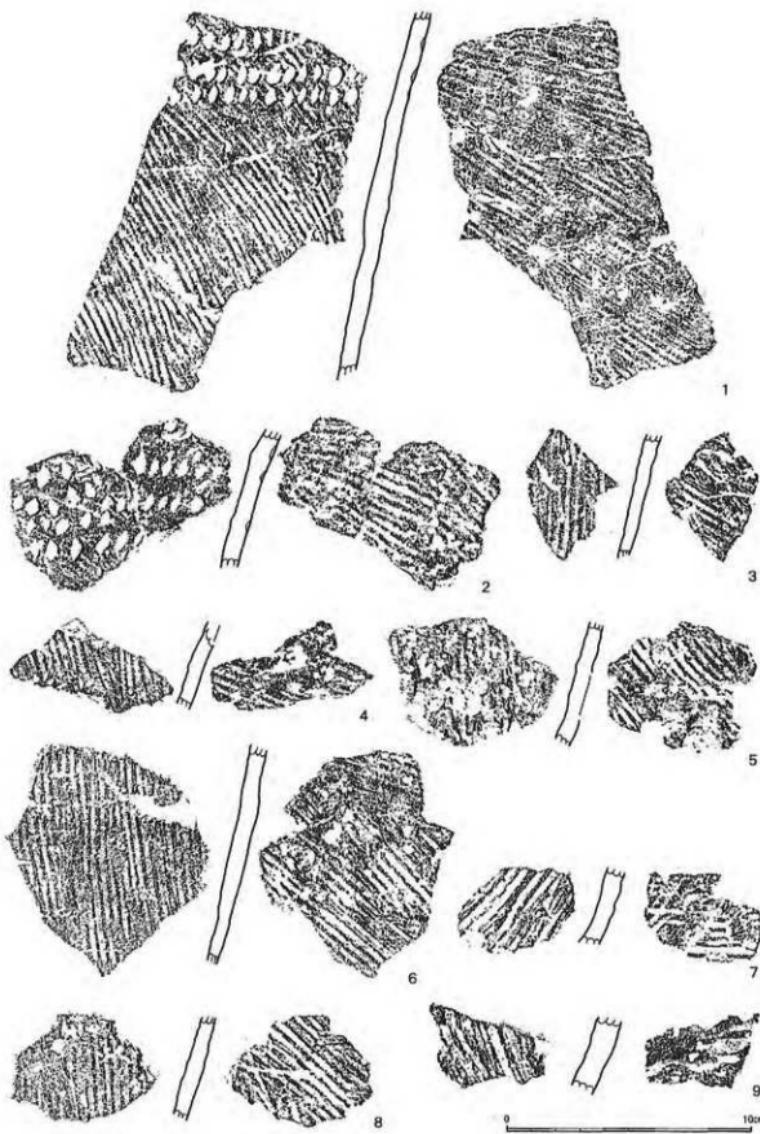
B種 胸部の屈曲部が見られないもの(第39図)

1個体分の出土である。胸部文様帯の屈曲が見られなくなり、口縁部文様帯のみ設けられている。口縁部はやや外反するものの、直線的に立ち上がっている。波状口縁となっており、表面の剥離がありわかりにくいが、頂部はわずかに2つの突起が作り出されている。口唇部は、内外面の端部に連続する刺突が見られる。口縁部文様帯には、波頂部下に円形の押圧を縦位に3つ施し、これを中心に刺突による鋸歯状文が見られる。口縁部文様帯は円形の押圧部分で下部に湾曲している。凹線はわずかに観察される程度で、凹線というより擦痕状となっている。

口縁部文様帯の下には、口縁部文様帯の形状に沿って緩やかに湾曲した刺突列が1条巡っている。胸部破片では、外面に条痕は見られない。内面では、横位の条痕調整は指などで押さえられて消えているところ



第39図 第VI群第2類土器実測図(3)



第40図 第VI群第3類土器実測図

も多い。

この個体は、第37図の個体と同様、内外面共に赤彩されている可能性がある。

第3類 茅山上層式併行の土器(第39図)

口縁部破片ではなく、胴部破片のみである。胴部の屈曲部ではなく、第2類元野式土器と違い、ほりの深い条痕を外面では斜位から縦位に、内面では斜位から横位に施文している(3~9)。

1・2では、刺突列が見られるが、1では横位2条の刺突列の上に、弧状となる刺突列が見られる。2では、弧状あるいは船歯状となる刺突列が見られる。

胎土には、石英・長石などの無色鉱物が多く含まれ、有色鉱物が少ない。器壁は0.5~0.7cmと均一で、焼成は普通程度である。

1・2では、器面が赤化している部分があるが、赤彩なのかどうかはわからない。

第VII群 前期・中期の土器(第41・51図)

第1類 清水ノ上Ⅱ式土器(1~3)

3点出土し、全てを図示した。1・2は口縁部破片、3は胴部の破片である。いずれも器壁は0.5cm程度と薄く、焼成は硬質で纖維痕が顕著である。

1・2は、口縁部の内外面に斜位の刺突列を1条施文している。口唇部には、押圧が見られる。条痕調整は、口縁部付近では横位に、胴部では斜位に見られる。1は口縁部はやや内湾気味に緩く立ち上がりつておらず、2は直線的に立ち上がり、外反している。3は、内外面ともに斜位に条痕調整が見られる。

第2類 諸礎式土器(4~14)

いずれも深鉢形土器である。4は、胴部から底部にかけての深鉢形土器で、底部に屈曲を持つ。横位の浮線文に斜位の縄文RLが施文されている。

5~8は口縁部の破片で、いずれも斜位の縄文RLを施文している。9~10は胴部の破片である。ほとんどが斜位の縄文RLであるが、13のみ縄文LRである。この13は、縄文原体自体も細くなっている。14は、器形が径が狭く筒状になるようである。

諸礎式土器は、いずれも焼成が良好で、硬質である。

第3類 五領ヶ台式土器(15)

1点のみ出土した。地文に縄文RLを斜位に施文し、横位の集合沈線が施文される深鉢形土器である。

第VIII群 無文・底部・その他の土器(第42~44・52図)

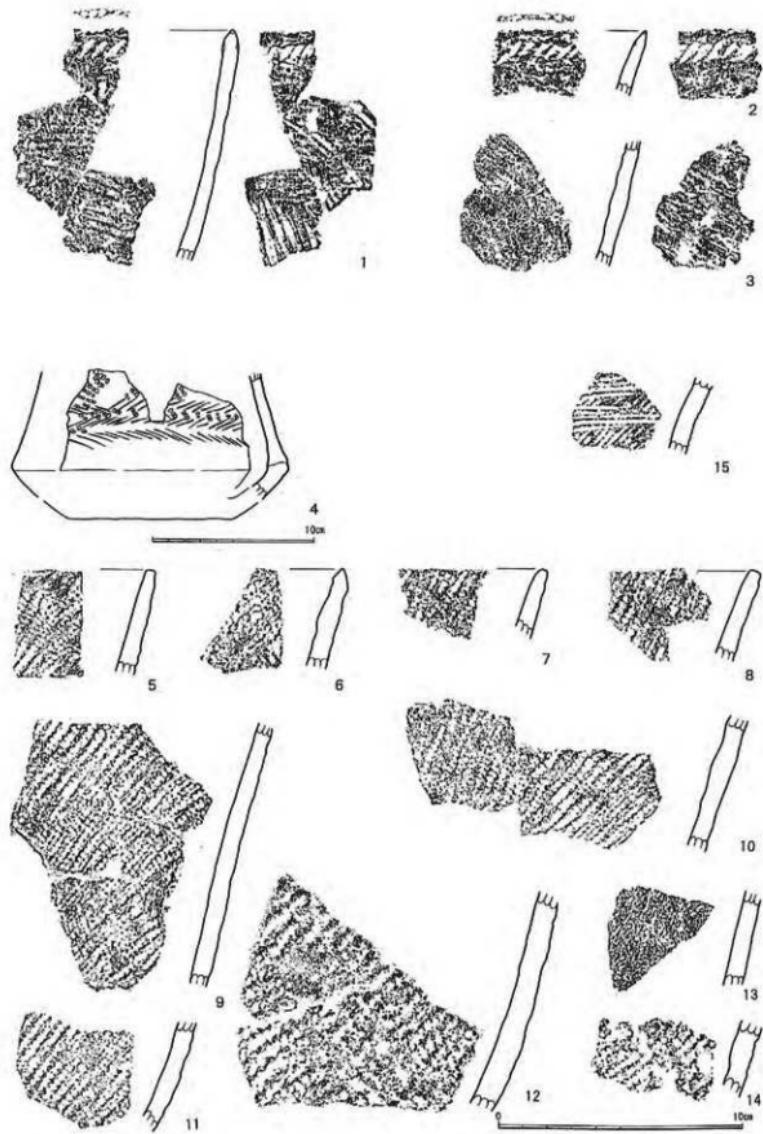
第1類 口縁部に刺突・押圧・刻みがあるもの(第42図)

1~3は、口縁部にへの字状の刺突、口唇部には刻みが見られる。1は平縁、2・3は波状口縁になっている。胎土は平滑であり、焼成は普通程度である。胎土には細粒の石英・長石といった無色鉱物、有色鉱物、微量の雲母、纖維が含まれている。このような胎土の特徴の土器はなく、時期は不明である。

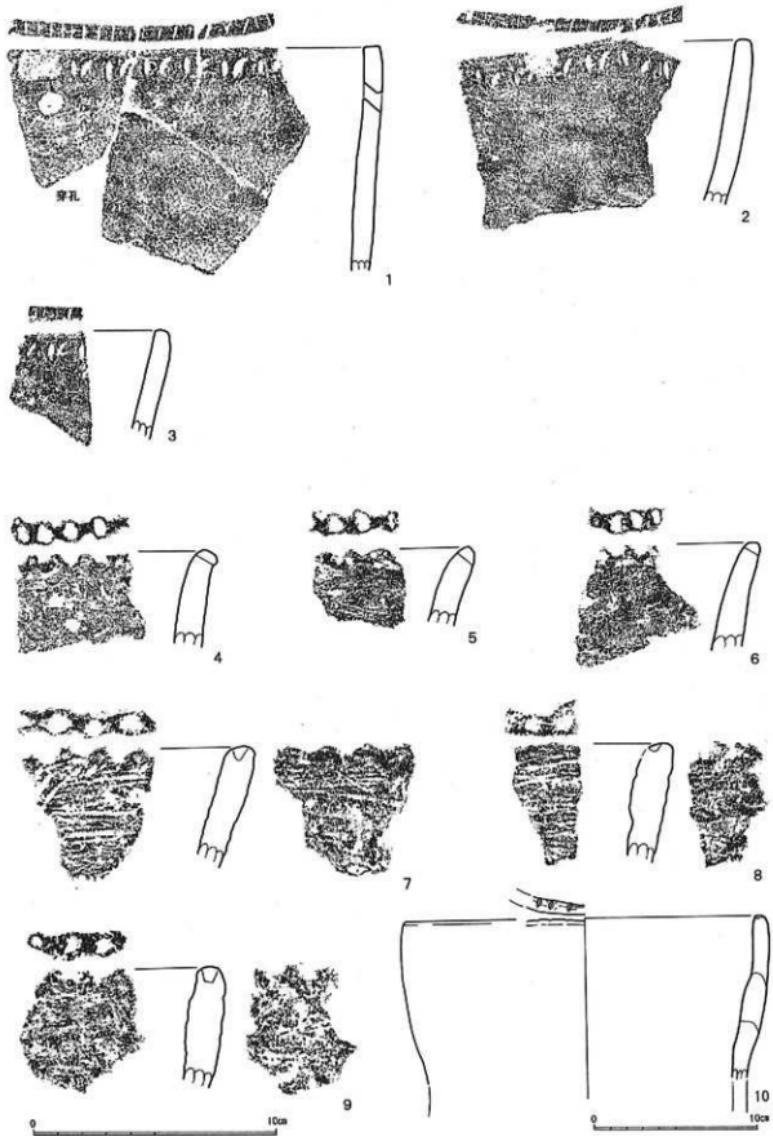
4~6は、口唇部に棒状工具による押圧が見られる。いずれも平縁である。胎土には、石英・長石などの無色鉱物、有色鉱物、纖維が含まれるが、白色鉱物は少なく、有色鉱物が多い。器面は平滑で、焼成は普通程度である。図示はしていないが、このような胎土の特徴を持つ無文の胴部片が出土している。早期後半のものと考えられている。

7~9は、口唇部に角状工具による刺突が見られる。器面は内外とも縦位の条痕が見られる。胎土には纖維が多量に含まれ、焼成はやや不良である。器壁は1.3cm程度と厚い。いずれも平縁である。

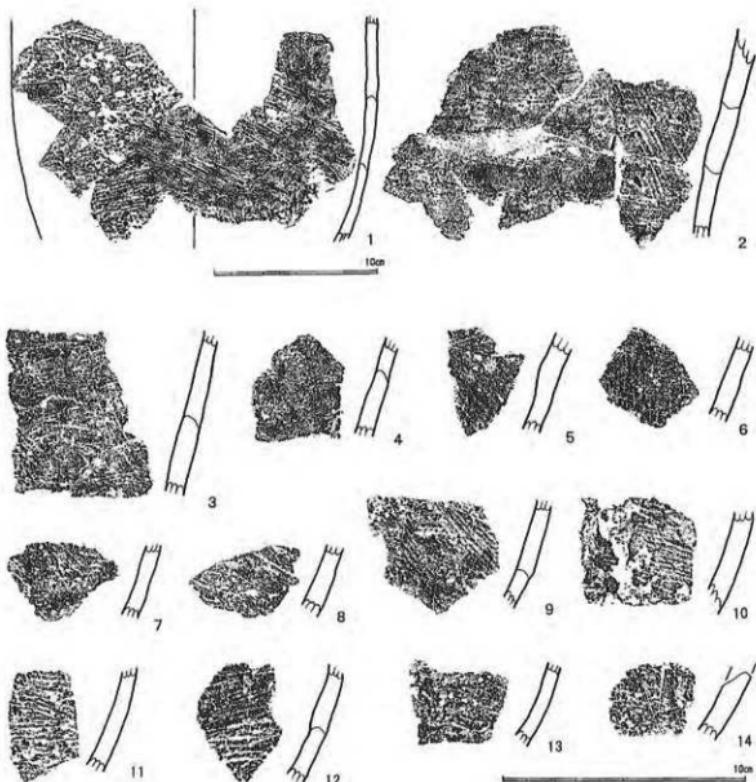
10は、口唇部に刻みが見られる。器形は、胴部にくびれを持つ深鉢形土器と思われる。平縁である。胎土には粒の大きな石英・長石類の無色鉱物が多く含まれ、また砂粒のようなものも見られる。纖維は比較的多く、器面に纖維痕が見られる。器壁は1.3cm程度と厚い。胎土の特徴は、第III群高山寺式土器に類似



第41図 第VII群土器実測図



第42図 第VIII群第1類土器実測図



第43図 第VII群第2類土器実測図

する。

第2類 器面に擦痕が見られるもの(第43図)

胴部破片のみである。横位・斜位に擦痕が見られる。擦痕の幅は1~2cm程度である。擦痕を施した後に器面をなでて整えたり、また擦痕を施しているものもあり、胴部中ほどの破片に多い。胎土には石英・長石といった無色鉱物が含まれるが僅かで、有色鉱物多く含まれ、特に雲母の混入が非常に多い。器壁は0.5~0.8cmと比較的薄く均質である。胎土の特徴は、第IV群貝殻沈線文系土器群の第4類に類似する。

1は、遺物の出土もまばらとなったローム漸移層から一括出土したもので、遺物包含層の最下層出土である。

第3類 無文の底部・その他の土器(第43図)

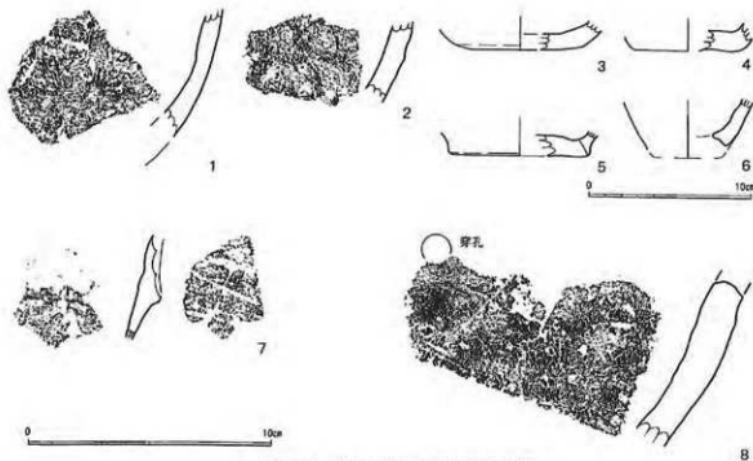
1・2は尖底土器の底部である。胎土には、石英・長石といった無色鉱物が多く含まれ、繊維痕も見られる。胎土の特徴は、第III類高山寺式土器に類似する。

3~6は、平底土器の底部である。3は、胎土に繊維を含むため早期後半のものと思われる。4~6

は、胎土に纖維を含まず、焼成も良好で、第Ⅶ群前期・中期の土器の諸穢式土器のものと思われる。

7は、分類できなかったもので、器面が剥落してわかりづらいが、外面に横位の隆帯が見られ内面には斜位の沈線が見られるものである。直線的に立ち上がる器形であるようである。胎土には長石類が多く含まれ、砂粒のようなものも見られる。纖維も含んでいる。器壁は薄く0.5cm程度である。

8は、穿孔のある無文の土器である。胴部下半の破片である。胎土には粒の大きな石英・長石等の無色鉱物と有色鉱物を多く含み、纖維も多く、纖維痕が見られる。



第44図 第Ⅶ群第3類土器実測図

<参考文献>

小林達雄 編 2008 『総覧 繩文土器』

田中 総 1999 「中部地方における縄文早期沈線文土器群の終末について—関東以西における早期前半から後半への移行期の問題—」『長野県考古学会誌』—縄文早期部会特集— 87・88号

小笠原永隆 1999 「中部地方を中心とする縄紋時代早期中葉土器編年の展望—「シンポジウム」の再検討を中心とした若干の予察—」『長野県考古学会誌』—縄文早期部会特集— 87・88号

三田村美彦 2003 「山梨県の縄文時代早期沈線文土器終末期前後の検討」『研究紀要19 20周年記念論文集』

山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター

下島 健弘 2009 「清水柳E類土器の共伴関係と細分」『清水柳E類土器を考える』 静岡県考古学会東部例会ミニシンポジウム

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『梅ノ木沢遺跡I』

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009 『元野遺跡』

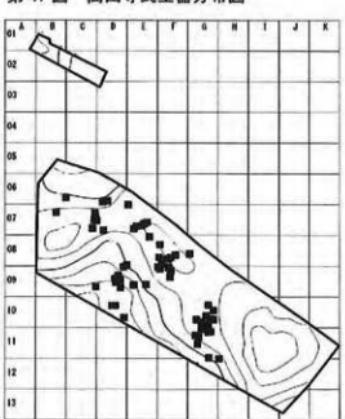
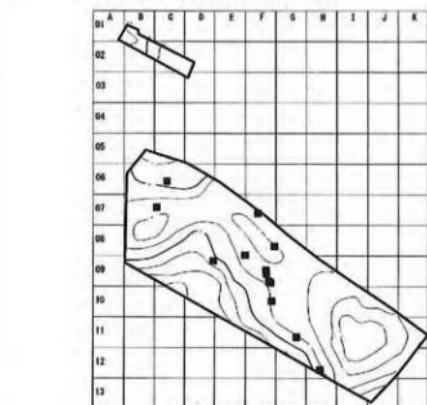
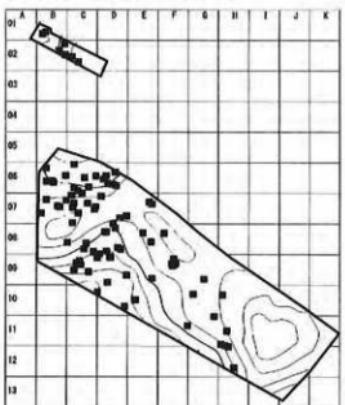
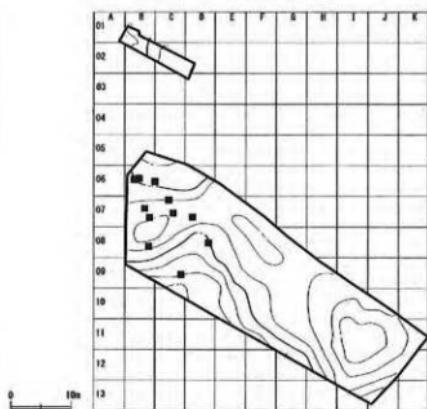
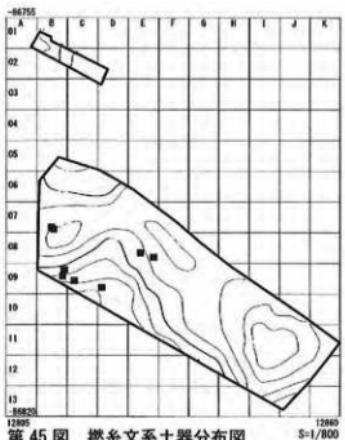
沼津市教育委員会 1991 『広合遺跡(c区)・二ツ洞遺跡(a区)発掘調査報告書』

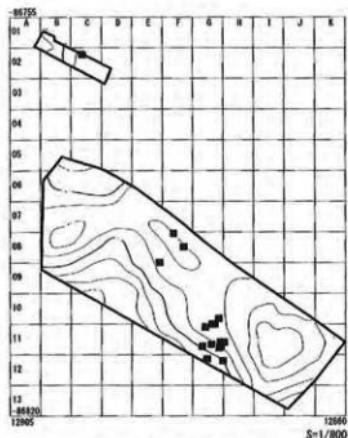
沼津市教育委員会 2001 『葛原沢第IV遺跡(a・b区)発掘調査報告書』

富士宮市教育委員会 1983 『若宮遺跡』

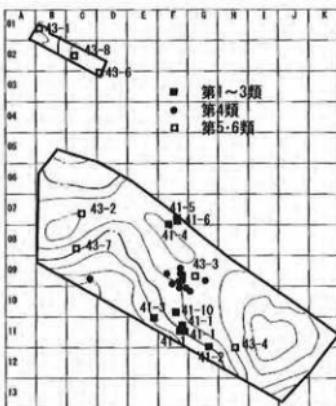
富士宮市教育委員会 1986 『黒田向林遺跡』

富士宮市教育委員会 2000 『石数遺跡』

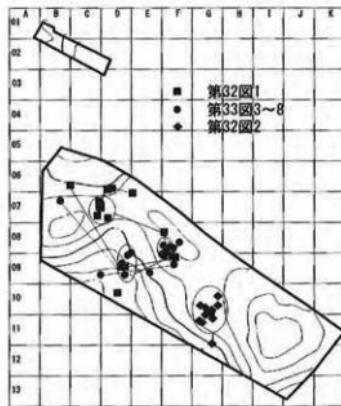




第51図 諸礫系土器遺物分布図



第52図 不明・その他の土器遺物分布図



第53図 清水柳 E 類土器接合関係

遺物点は、報告書掲載分のうち、確認調査トレンチ内及び搅乱出土の土器は除く。

第2表 出土土器観察表

図番号	分類 群・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
23-1			胴部	4号鑿石	普通	石英・長石等の無色鉱物多く混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。縦縞有。	桜 (7.5YR6/8)		清水櫻E類か
24-1	I-1	撫糸文系	胴部	C-9	やや不良	石英・長石等の無色鉱物混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。縦縞多い。	灰褐色 (7.5YR6/2)	撫糸文原体RL	早期前半
24-2	I-1	撫糸文系	胴部	B-9	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞多い。	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	撫糸文原体RL	早期前半
24-3	I-2	撫糸文系	胴部	D-9	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞多い。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	撫糸文原体?	早期前半
24-4	I-2	撫糸文系	口縁部	B-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞少。	灰褐色 (7.5YR5/2)	撫糸文原体?	早期前半
24-5	I-2	撫糸文系	胴部	E-8	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞多い。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	撫糸文原体?	早期前半
24-6	I-2	撫糸文系	胴部	B-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。縦縞多。	灰褐色 (7.5YR4/2)	撫糸文原体?	早期簡単 24-6-7は同一個体か
24-7	I-2	撫糸文系	胴部	B-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。縦縞多。	褐灰 (7.5YR4/1)	撫糸文原体?	早期前半 24-6-7は同一個体か
24-8	I-3	撫糸文系	胴部	H-12	普通	石英・長石等の無色鉱物少量混入し、有色鉱物やや多い。雲母も目立つ。縦縞有?	桜 (7.5YR6/6)	撫糸文原体R	早期前半
25-1	II-1	押型文系	胴部	D-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞少。	明褐色 (7.5YR7/2)	山形押型文	早期前半
25-2	II-1	押型文系	胴部	C-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞少。	にぶい桜 (7.5YR7/4)	山形押型文	早期前半
25-3	II-1	押型文系	胴部	D-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞多。	明褐色 (7.5YR7/2)	山形押型文 内面縦付帯	早期前半、 内面縦付帯
25-4	II-1	押型文系	胴部	C-9	やや不良	石英・長石等の無色鉱物混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。縦縞多。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	山形押型文	早期前半
25-5	II-1	押型文系	胴部～底部	B-6	やや不良	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。縦縞多。	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	山形押型文	早期簡単
25-6	II-1	押型文系	胴部～底部	B-6	普通	石英・長石等の無色鉱物混入し、有色鉱物やや多い。縦縞多。	にぶい桜 (7.5YR6/4)	山形押型文	早期前半
25-7	II-2	押型文系	胴部	B-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞多。	にぶい桜 (7.5YR5/3)	横円押型文	早期前半
25-8	II-2	押型文系	胴部	B-7	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞多。	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	横円押型文	早期前半
25-9	II-2	押型文系	胴部	B-9	やや不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。縦縞有。	灰褐色 (5YR5/2)	横円押型文	早期前半
25-10	II-2	押型文系	胴部～底部	D-8	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。縦縞有。	明赤褐 (5YR5/8)	横円押型文?	早期前半 内面縦付帯 25-10-11 は同一個体
25-11	II-2	押型文系	胴部～底部	C-7	普通	石英・長石等のやや大粒の無色鉱物混入し、有色鉱物少ない。砂粒のようなものも見られる。縦縞有。	明赤褐 (5YR5/9)	横円押型文?	早期前半 内面縦付帯 25-10-11 は同一個体
25-12	II-2	押型文系 細久保式	口縁部	C-7	普通	石英・長石等の無色鉱物少量混入し、有色鉱物あるいは砂粒やや多い。雲母も目立つ。縦縞有?	明赤褐 (5YR5/6)	横円押型文	早期前半
26-1	III-1	高山寺	口縁部	G-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多量に混入し、有色鉱物も混入する。縦縞有。	明赤褐 (5YR5/6)	外面: 横円押型文 内面: 斜行沈線	
26-2	III-1	高山寺	口縁部	H-12	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多量に混入し、有色鉱物も混入する。縦縞有。	にぶい桜 (7.5YR6/4)	外面: 横円押型文 内面: 斜行沈線	
26-3	III-1	高山寺	口縁部～胴部	D-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多量に混入し、有色鉱物も混入する。縦縞有。	にぶい桜 (7.5YR6/3)	外面: 横円押型文 内面: 斜行沈線	
26-4	III-1	高山寺	胴部	H-11	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多量に混入し、有色鉱物も混入する。縦縞有。	桜 (7.5YR6/6)	横円押型文	
26-5	III-1	高山寺	胴部	E-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多量に混入し、有色鉱物も混入する。縦縞有。	明赤褐 (5YR5/8)	横円押型文	
26-6	III-1	高山寺	胴部	C-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多量に混入し、有色鉱物も混入する。縦縞有。	桜 (7.5YR6/6)	横円押型文	

回収号	分類群・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
26-7	Ⅲ-1	高山寺	胴部	D-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	横円押型文	
26-8	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	横円押型文	
26-9	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	横円押型文	
26-10	Ⅲ-1	高山寺	胴部	H-11	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	横円押型文	
26-11	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-9	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	横円押型文	
26-12	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	横円押型文	
26-13	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	横円押型文	
26-14	Ⅲ-1	高山寺	胴部	H-11	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	横円押型文	
26-15	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	横円押型文	
26-16	Ⅲ-1	高山寺	胴部	F-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物粒多量に混入し、有色鉱物も混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	横円押型文	内面煤付着
27-1	Ⅲ-2	高山寺	口縁部	C-8,D-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明黄褐色 (10YR6/6)	外面:横円押型文 内面:斜行沈線	
27-2	Ⅲ-2	高山寺	口縁部	B-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が少量混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	外面:横円押型文 内面:斜行沈線	
27-3	Ⅲ-2	高山寺	口縁部	C-7,E-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	横円押型文、口唇部押圧	
27-4	Ⅲ-2	高山寺	口縁部	C-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	横円押型文、口唇部押圧	
27-5	Ⅲ-2	高山寺	頭部	E-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	褐 (7.5YR4/3)	横円押型文	
27-6	Ⅲ-2	高山寺	胴部	D-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	褐 (7.5YR4/3)	横円押型文	
27-7	Ⅲ-2	高山寺	胴部	D-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	横円押型文	
27-8	Ⅲ-2	高山寺	頭部	C-7,D-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	外面:横円押型文 内面:斜行沈線	
27-9	Ⅲ-2	高山寺	胴部	D-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	褐 (7.5YR4/3)	横円押型文	
27-10	Ⅲ-2	高山寺	胴部	B-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	褐 (7.5YR4/3)	横円押型文	
27-11	Ⅲ-2	高山寺	胴部	B-2	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	横円押型文	
27-12	Ⅲ-2	高山寺	胴部	雄1T	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	横円押型文	
27-13	Ⅲ-2	高山寺	胴部	C-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	横円押型文	
28-1	Ⅲ-3	高山寺	口縁部	C-7	普通	石英・長石等の無色鉱物が少量混入し、有色鉱物が混入する。蓋母に見られる。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	外面:格子状拵糸文 原体I、口唇部刺突 内面:斜行沈線	
28-2	Ⅲ-3	高山寺	口縁部	D-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい褐 (7.5YR6/4)	格子状拵糸文？ 原体I	

図一一番号	分類 群・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
28-3	III-3	高山寺	口縁部	C-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (10YR6/6)	格子状撚糸文原体I、内面斜行沈線?	
28-4	III-3	高山寺	口縁部	C-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	格子状撚糸文 原体R	波状口縁、内面保付着
28-5	III-3	高山寺	胴部	C-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	格子状撚糸文原体I	
28-6	III-3	高山寺	口縁部～胴部	G-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	外面:格子状撚糸文 原体I 内面:斜行沈線?	
28-7	III-3	高山寺	頭部	D-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	格子状撚糸文 原体I?	
28-8	III-3	高山寺	胴部	C-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	格子状撚糸文 原体R	
28-9	III-3	高山寺	胴部	C-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	撚糸文原体I	
28-10	III-3	高山寺	胴部	D-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	緑 (5YR6/6)	格子状撚糸文 原体I	
28-11	III-3	高山寺	胴部	D-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	赤褐色 (5YR4/6)	格子状撚糸文 原体I	土器片転用?
28-12	III-3	高山寺	胴部	確認3T	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	格子状撚糸文原体R	
28-13	III-3	高山寺	胴部	E-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	緑 (7.5YR6/6)	格子状撚糸文 原体I?	
28-14	III-3	高山寺	胴部	C-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	格子状撚糸文 原体I	
29-1	III-4	高山寺	口縁部	D-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が混入し、有色鉱物が混入する。雲母も見られる。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	撚糸文原体I	
29-2	III-4	高山寺	口縁部	H-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が混入する。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	撚糸文原体I、口部唇押状剥離	
29-3	III-4	高山寺	口縁部	B-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	外面:撚糸文原体I 内面:斜行沈線	
29-4	III-4	高山寺	頭部	D-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/8)	撚糸文原体I	
29-5	III-4	高山寺	胴部	D-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	緑 (7.5YR6/6)	撚糸文原体I	
29-6	III-4	高山寺	頭部	D-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい緑 (7.5YR5/3)	撚糸文原体I	小形の土器
29-7	III-4	高山寺	頭部	B-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	外面:撚糸文原体I? 内面:斜行沈線	
29-8	III-4	高山寺	頭部	C-2	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撚糸文原体I	
29-9	III-4	高山寺	頭部	B-1	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撚糸文原体R	
29-10	III-4	高山寺	頭部	C-2	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	赤褐色 (5YR4/6)	撚糸文原体I	
29-11	III-4	高山寺	胴部	B-2	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	撚糸文原体I	
29-12	III-4	高山寺	胴部	C-7	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	緑 (7.5YR6/6)	撚糸文 原体不明	
29-13	III-4	高山寺	胴部	確認3T	普通	石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。雲母も見られる。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撚糸文原体I?	
29-14	III-4	高山寺	胴部	C-6	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撚糸文原体I	
29-15	III-4	高山寺	胴部	D-6	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撚糸文原体I?	

回一番号	分類群・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
29-16	Ⅲ-4	高山寺	胴部	D-9	普通	石英・長石等の白色鉱物が多い量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	黒褐色 (5YR3/1)	撫系文原体L 模倣沈線	
30-1	Ⅲ-4	高山寺	胴部	確1T	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撫系文原体I	
30-2	Ⅲ-4	高山寺	胴部	C-6	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撫系文原体I	
30-3	Ⅲ-4	高山寺	胴部	確1T	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撫系文原体R	
30-4	Ⅲ-4	高山寺	胴部	B-1	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撫系文原体I	
30-5	Ⅲ-4	高山寺	胴部	B-2	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	撫系文原体R	
30-6	Ⅲ-4	高山寺	胴部	E-7	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	棕 (7.5YR6/6)	撫系文原体I	
30-7	Ⅲ-4	高山寺	胴部～底部	B-6	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	撫系文原体I	
31-1	Ⅲ-5	高山寺	口縁部	F-11	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい褐 (7.5YR5/4)	口唇部押圧	
31-2	Ⅲ-5	高山寺	口縁部	G-11	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多く、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい褐 (7.5YR6/4)	無文	
31-3	Ⅲ-5	高山寺	口縁部	C-7	普通	石英・長石等の白色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	口唇部押圧	
31-4	Ⅲ-5	高山寺	口縁部	D-9	普通	大粒の石英・長石等の白色鉱物が多く、有色鉱物が混入する。雲母も見られる。織維有。	灰褐色 (7.5YR4/2)	無文	31-4-5は同一個体か
31-5	Ⅲ-5	高山寺	口縁部	C-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。雲母も見られる。織維有。	灰褐色 (7.5YR4/2)	無文	31-4-5は同一個体か
31-6	Ⅲ-5	高山寺	口縁部	D-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	穿孔あり	
31-7	Ⅲ-5	高山寺	胴部	B-6	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。織維有。	棕 (7.5YR6/6)		転用か
31-8	Ⅲ-5	高山寺	胴部	C-8,D-9	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	棕 (7.5YR6/6)	無文	
31-9	Ⅲ-5	高山寺	胴部	C-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい褐 (7.5YR5/4)		
31-10	Ⅲ-5	高山寺	胴部	確1T	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。織維有。	棕 (7.5YR6/6)		
31-11	Ⅲ-5	高山寺	胴部～底部	D-8	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)		
31-12	Ⅲ-5	高山寺併行	底部	D-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)		
31-13	Ⅲ-5	高山寺併行	底部	E-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/7)		
31-14	Ⅲ-5	高山寺	底部	E-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物が混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)		
31-15	Ⅲ-5	高山寺併行	底部	C-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明黄褐色 (10YR6/6)		
31-16	Ⅲ-5	高山寺	胴部～底部	B-7	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	棕 (7.5YR6/6)		
32-1	IV-1	田戸上層終末	頭部～胴部	C-7	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	棕 (5YR6/6)	沈線画、貝殻模様文	
32-2	IV-1	田戸上層終末	胴部	確1T	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。織維有。	棕 (5YR6/6)	沈線、貝殻族縞文	

図一番号	分類 群・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
32-3	IV-2	沈線文系 終末	頭部～胴部		普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も非常に目立つ。織維有。	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	沈線(斜位)	穿孔有
32-4	IV-2	沈線文系 終末	胴部		普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母が非常に目立つ。織維有。	褐色 (7.5YR4/3)	沈線(鉛齒状)	
32-5	IV-2	沈線文系 終末	口縁部	F-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線1本単位(斜位)、口唇部剥 离	
32-6	IV-2	沈線文系 終末	頭部?	C-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線1本単位(斜位)	
32-7	IV-2	沈線文系 終末	胴部	D-9	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線(斜位)	
32-8	IV-2	沈線文系 終末	頭部～胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も非常に目立つ。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	沈線(斜位)	
32-9	IV-2	沈線文系 終末	口縁部	G-12	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、多量の有色鉱物も混入する。雲母も目立つ。織維有。	褐色 (7.5YR4/3)	沈線(斜位)	
32-10	IV-3	羽ノ木山 西式	胴部	表揮	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物も混入する。雲母も目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線2本単位(格子状?)、地文 横位帯底	
32-11	IV-4	沈線文系 終末	口縁部～頸 部	G-11	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物も混入する。雲母も目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線3本単位(矢羽状)	
32-12	IV-4	沈線文系 終末	頭部～胴部	F-8F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	沈線2本単位?(強状・駆位)、胴 部下平接合条線	
32-13	IV-4	沈線文系 終末	頭部～胴部	F-10	普通	石英・長石等の無色鉱物、多量の有色鉱物が混入する。雲母も目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線(斜位)	
32-14	IV-4	沈線文系 終末	頭部	E-8	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	沈線(駆位)	
32-15	IV-4	沈線文系 終末	頭部～胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	沈線(駆状)	
32-16	IV-4	沈線文系 終末	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	沈線(駆状)	
33-1	V-1	清水柳E 類	口縁部～胴 部	B-6.C-7, D-6.D-7, D-9.F-8,F- 9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。織維多い。	赤褐色 (2.5YR4/6)	格状底庄底文(原体)、駆位・橫 位底庄(底庄上に斜位格状底庄 底文)	口徑(26.4) 器高(0) 底径(1.6) 底径(1.6) 弦径(1/2~ 1/4以下) 33-1, 34-3~ 34-8#同一個体
33-2	V-1	清水柳E 類	胴部	G-10,G- 11	普通	石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようのものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	横位底庄(底庄上に横位格状底 庄底文(原体))	
34-1	V-1	清水柳E 類	口縁部～胴 部	E-7,E-8	普通	石英・長石等の無色鉱物と多量に混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようのものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	駆位底庄底文(原体)、波状口縁	
34-2	V-1	清水柳E 類	口縁部	G-10	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようのものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	格状底庄底文	
34-3	V-1	清水柳E 類	口縁部～胴 部	B-7,C-9, D-8,D-9, E-9,F-8, F-9	やや 不良	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。織維多い。	赤褐色 (2.5YR4/6)	格状底庄底文(原体)、駆位・橫 位底庄(底庄上に斜位格状底庄 底文)	33-1, 34- 3~8#同一 個体
34-4	V-1	清水柳E 類	口縁部～胴 部	B-8,D-9, E-9,F-8, F-9	やや 不良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維多い。	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	格状底庄底文(原体)、駆位・橫 位底庄(底庄上に格状底庄底 文)	外面煤付 33-1, 34-3~8#同一 個体
34-5	V-1	清水柳E 類	口縁部	F-9	やや 不良	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。織維多い。	赤褐色 (2.5YR4/6)	格状底庄底文(原体)	32-1, 33- 3~8#同一 個体

図-番号	分類 群-類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
34-6	V-1	清水柳E類	口縁部	E-9	やや不良	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。織維多い。	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	格状帯圧痕文(原体)	33-1、34-3-8は同一個体
34-7	V-1	清水柳E類	口縁部	F-8	やや不良	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。織維多い。	赤褐色 (2.5YR4/6)	格状帯圧痕文(原体)、横位輪帯(壓痕上に斜位格状帯圧痕文)	33-1、34-3-8は同一個体
34-8	V-1	清水柳E類	口縁部	G-3T	やや不良	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。織維多い。	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	格状帯圧痕文(原体)、横位輪帯(縫合上に斜位格状帯圧痕文)	32-1、33-3-8は同一個体
34-9	V-1	清水柳E類	口縁部	G-10	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR7/6)	格状帯圧痕文(原体?)、細縞線	外面煤全面 に付着
35-1	V-1	清水柳E類	口縁部	D-9	普通	石英・長石等の無色鉱物が多く混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	格状帯圧痕文(原体?)	35-1~3は同一個体
35-2	V-1	清水柳E類	口縁部	G-8	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	格状帯圧痕文(原体?)	35-1~3は同一個体
35-3	V-1	清水柳E類	胴部	D-9	普通	石英・長石等の無色鉱物多く混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	格状帯圧痕文(原体?)	35-1~3は同一個体
35-4	V-1	清水柳E類	口縁部	D-10	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	にぶい褐 (7.5YR5/3)	格状帯圧痕文(原体?)	35-4~8は同一個体
35-5	V-1	清水柳E類	口縁部	E-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR7/6)	格状帯圧痕文(原体?)	35-4~8は同一個体
35-6	V-1	清水柳E類	口縁部	D-10	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	格状帯圧痕文(原体)、横位輪帯(縫合上に斜位格状帯圧痕文)	35-4~8は同一個体
35-7	V-1	清水柳E類	口縁部	F-8	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	格状帯圧痕文(原体)	35-4~8は同一個体
35-8	V-1	清水柳E類	胴部	H-11	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	黄褐色 (10YR5/6)	格状帯圧痕文(原体)、横位輪帯(縫合上に斜位格状帯圧痕文)	35-4~8は同一個体
35-9	V-1	清水柳E類	胴部	G-3T	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	格状帯圧痕文(原体)、横位輪帯(縫合上に斜位格状帯圧痕文)	35-4~8は同一個体
35-10	V-2	清水柳E類併行	胴部	G-10	普通	石英・長石等の無色鉱物が多量に混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/8)	横位輪帯、格子状沈線	35-10~11は同一個体
35-11	V-2	清水柳E類併行	胴部	G-11	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようるものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	格子状沈線	35-10~11は同一個体
35-12	V-2	清水柳E類併行	胴部	G-10	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。砂粒のようるものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR6/6)	格子状沈線	35-10~11は同一個体
36-1	VI-1	鶴ヶ島台	胴部上半	H-12	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。雲母も目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	外面:横掛け状区画文の間に押引文、区画の交点に円形刺突文 内面:斜位參差調整	外面煤付着
36-2	VI-1	鶴ヶ島台	胴部上半	G-1T	普通	石英・長石、有色鉱物が混入する。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	外面:横掛け状区画文の間に押引文、区画の交点に円形刺突文 内面:斜位參差調整	外面煤付着
36-3	VI-1	鶴ヶ島台	胴部下半	F-9	普通	石英・長石、有色鉱物混入するが少量。雲母はやや多い。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	外面:腰位平行沈線、斜位2本単位の押引文	36-3~4は同一個体
36-4	VI-1	鶴ヶ島台	胴部下半	F-9	普通	石英・長石、有色鉱物等の鉱物が混入するが少量。雲母はやや多い。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	外面:斜位2本単位の押引文	36-3~4は同一個体
37-1	VI-2	元野	口縁部～胴部	B-6B-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	黄褐色 (7.5YR7/8)	外面:凹線、口縫部錐形斜刻突列、胴部横位輪帯 内面:条痕調整	波状口縫、内面赤彩?、37-1~4は同一個体
37-2	VI-2	元野	口縁部	D-BF-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	褐 (7.5YR7/6)	外面:鉢合斜列、凹線 内面:条痕調整	波状口縫、内面赤彩?、37-1~4は同一個体
37-3	VI-2	元野	口縁部	G-3T	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	褐 (7.5YR7/6)	外面:鉢合斜列(鉢底状か) 内面:条痕調整	37-1~4は同一個体

図-番号	分類 群-種	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
37-4	VI-2	元野	頭部～胴部	塙3T	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR7/6)	外面:横位刺突列 内面:条痕調整	37-1～4は同一個体
38-1	VI-2	元野	頭部～胴部	E-10	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:横位刺突列、胴部横位条痕 内面:条痕調整	38-1・2は同一個体
38-2	VI-2	元野	頭部～胴部	C-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (5YR6/6)	外面:横位刺突列	外 面 赤 彩？ 38-1 ・2は同一個 体
38-3	VI-2	元野	頭部～胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR7/6)	外面:横位刺突列、凹線、胴部 横位条痕	外 面 赤 彩？
38-4	VI-2	元野	胴部	B-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (5YR6/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	
38-5	VI-2	元野	胴部	B-6	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR7/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	内面赤彩？
38-6	VI-2	元野	胴部	B-6	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR7/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	
38-7	VI-2	元野	胴部	B-6	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (7.5YR7/7)	外面:条痕 内面:条痕調整	内 外 面 赤 彩？
39-1	VI-2	元野	口縁部～胴部	B-1,E-9, F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明黄橙 (10YR6/6)	外面:凹線、口縁部横位刺突列、胴部横位刺突列 内面:条痕調整残存	口径(2.7) 器高(15.3) 波状口縁、 内面赤彩、 残存1/2, 3 9-1～7は 同一個体
39-2	VI-2	元野	口縁部	E-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:鉈齒状刺突列 内面:条痕調整	39-1～7は 同一個体
39-3	VI-2	元野	口縁部	E-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:鉈齒状刺突列 内面:条痕調整	39-1～7は 同一個体
39-4	VI-2	元野	口縁部	B-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	橙 (5YR6/6)	外面:鉈齒状刺突列、凹線 内面:条痕調整	外 面 赤 彩？ 39-1 ～7は同 一組体
39-5	VI-2	元野	口縁部～胴部	D-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:刺突列 内面:条痕調整	内面赤彩、 39-1～7は 同一個体
39-6	VI-2	元野	口縁部	E-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	明黄橙 (10YR6/6)	外面:鉈齒状刺突列、円形押圧 内面:条痕調整残存	内面赤彩、 39-1～7は 同一個体
39-7	VI-2	元野	胴部	E-9	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	内面:条痕調整残存	内面赤彩、 爆発着、39 -1～7は同 一組体
40-1	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	塙3T	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:横位・弧状or鉈齒状刺突列、条痕 内面:条痕調整	外 面 赤 彩？
40-2	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	塙1T	普通	石英・長石等の無色鉱物多く混入する。有色鉱物が少ない。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:横位・弧状or鉈齒状刺突列？、条痕 内面:条痕調整	内面赤彩？
40-3	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	C-2	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	
40-4	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	塙1T	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	にぶい黄橙 (10YR7/4)	外面:条痕 内面:条痕調整	内面赤彩？
40-5	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	塙1T	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	
40-6	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	C-2	普通	石英・長石等の無色鉱物多く、有色鉱物も混入する。織維有。	にぶい黄橙 (10YR6/4)	外面:条痕 内面:条痕調整	
40-7	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	塙1T	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	
40-8	VI-3	茅山上層 併行(焰 烟?)	胴部	塙1T	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	

回一番号	分類器・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
40-9	VII-3	茅山上層 伊行(拍 焼?)	胴部	C-2	普通	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物が混入する。砂粒のよう な物も見られる。織縫有	褐 (7.5YR7/6)	外面:条痕 内面:条痕調整	
41-1	VII-1	清水ノ上 II	口縁部	確1T	良	石英・長石が混入する。有色鉱 物は僅僅か。織縫有	明黄褐色 (2.5YR6/6)	外面:口縁端部にへら状工具に よる削突刃 内面:口縁端部にへら状工具に よる削突刃 口唇部:棒状工具による押圧 内外面とも横位から斜位の条痕 調整	
41-2	VII-1	清水ノ上 II	口縁部	確1T	良	石英・長石が混入する。有色鉱 物は僅僅か。織縫有	明黄褐色 (2.5YR6/6)	外面:口縁端部にへら状工具に よる削突刃 内面:口縁端部にへら状工具に よる削突刃 口唇部:棒状工具による押圧	
41-3	VII-1	清水ノ上 II	胴部	確1T	良	石英・長石が混入する。有色鉱 物は僅僅か。織縫有	明黄褐色 (2.5YR6/6)	外面とも斜位の条痕調整	
41-4	VII-2	諸磤	底部	G-10.G- 11	良	石英・長石等の無色鉱物粒、 有色鉱物が混入する。	赤褐色 (2.5YR4/6)	浮線文、縄文原体RL	器高(7.9) 底径(10.0)
41-5	VII-2	諸磤	口縁部	H-11	良	石英・長石等が混入する。有色鉱 物は僅僅か。雲母も微量混入。	明赤褐色 (5YR5/8)	縄文原体RL	
41-6	VII-2	諸磤	口縁部	擾乱	良	石英・長石、有色鉱物多く混 入。雲母も混入。	明赤褐色 (5YR5/6)	縄文原体RL	波状口縁か
41-7	VII-2	諸磤	口縁部	H-12	良	石英・長石、有色鉱物混入。	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	縄文原体RL	
41-8	VII-2	諸磤	口縁部	G-11	良	石英・長石、有色鉱物混入。	赤褐色 (5YR4/8)	縄文原体RL	
41-9	VII-2	諸磤	胴部	G-11	良	石英・長石が混入する。有色鉱 物は僅か。雲母も微量混入。	褐色 (7.5YR4/3)	縄文原体RL	
41-10	VII-2	諸磤	胴部	G-11	良	石英・長石等の無色鉱物粒が 多く混入する。有色鉱物は僅か。	灰褐色 (7.5YR4/2)	縄文原体RL	
41-11	VII-2	諸磤	胴部	G-11	良	石英・長石等の無色鉱物粒が 多く混入する。有色鉱物は僅か。	明赤褐色 (5YR5/6)	縄文原体RL	内面煤付着
41-12	VII-2	諸磤	胴部	E-8.F-8	普通	石英・長石等の無色鉱物粒が 多く混入する。有色鉱物は僅か。 砂粒のようないもも見られる。	褐 (7.5YR6/6)	縄文原体RL	
41-13	VII-2	諸磤	胴部	C-2F-8	良	石英・長石等の無色鉱物が 混入する。雲母も混入する。	明赤褐色 (5YR5/6)	縄文原体LR	外側煤付着
41-14	VII-2	諸磤	胴部	G-11.G- 12	普通	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。雲母も目 立つ。	明褐色 (7.5YR5/6)	縄文原体RL	
41-15	VII-3	五箇ヶ谷	胴部	確1T	普通	石英・長石等の無色鉱物多く 混入。有色鉱物も混入する。 雲母も混入する。砂粒のよう なものも見られる。	赤褐色 (2.5YR4/6)	混合赤線、地文縄文原体R	
42-1	Ⅸ-1	不明	口縁部	F-11	普通	石英・長石等の無色鉱物等、 有色鉱物が混入する。雲母も 微量混入。	明赤褐色 (5YR5/6)	口縁端部削突、口唇部削み	穿孔有
42-2	Ⅸ-1	不明	口縁部	G-11	普通	石英・長石等の無色鉱物等、 有色鉱物が混入する。雲母も 微量混入。	明赤褐色 (5YR5/6)	口縁端部削突、口唇部削み	波状口縫
42-3	Ⅸ-1	不明	口縁部	E-11	普通	石英・長石等の無色鉱物等、 有色鉱物が混入する。雲母も 微量混入。	明赤褐色 (5YR5/6)	口縁端部削突、口唇部削み	波状口縫か
42-4	Ⅸ-1	不明	口縁部	F-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。雲母も 微量混入。	褐 (7.5YR6/8)	口唇部押圧	早期後半
42-5	Ⅸ-1	不明	口縁部	F-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。雲母も 微量混入。	褐 (7.5YR4/6)	口唇部押圧	早期後半
42-6	Ⅸ-1	不明	口縁部	F-7	普通	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。雲母も 微量混入。	褐 (7.5YR4/3)	口唇部押圧	早期後半
42-7	Ⅸ-1	不明	口縁部	確1T	やや 不良	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。砂粒のよ うな物も見られる。織縫多い。	明黄褐色 (10YR6/6)	口唇部削突、条痕調整	早期後半
42-8	Ⅸ-1	不明	口縁部	確1T	やや 不良	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。砂粒のよ うな物も見られる。織縫多い。	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	口唇部削突、条痕調整	早期後半
42-9	Ⅸ-1	不明	口縁部	確1T	やや 不良	石英・長石等の無色鉱物、有 色鉱物多く混入する。砂粒のよ うな物も見られる。織縫多い。	明黄褐色 (10YR6/6)	口唇部削突、条痕調整	早期後半
42-10	Ⅸ-1	不明	口縁部	F-10	普通	大粒の石英・長石等の無色鉱 物、有色鉱物が混入する。砂 粒のようないもも見られる。織 縫有り。	明褐色 (7.5YR5/6)	口唇部削突	口径(22.0) 器高(9.9) 残存1/4 高山寺併行 か

図-番号	分類 群・類	型式	部位	出土位置	焼成	胎土	色調	文様	備考
43-1	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物が混入し、有色鉱物多量に混入する。雲母が非常に目立つ。織維有。	明赤褐色 (7.5YR5/6)	擦痕	器高(13.3)
43-2	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物が混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母が非常に目立つ。織維有。	黄褐色 (10YR5/6)	擦痕	
43-3	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物混入し、有色鉱物多量に混入する。雲母が非常に目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	擦痕	
43-4	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物が混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母が目立つ。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	擦痕	
43-5	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	擦痕	
43-6	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	擦痕	
43-7	VII-2	不明	胴部	C-9	普通	石英・長石等の無色鉱物が混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母が目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	擦痕	
43-8	VII-2	不明	胴部	G-10	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母も目立つ。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	擦痕	
43-9	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物が混入し、有色鉱物多量に混入する。雲母も非常に目立つ。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	擦痕	
43-10	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母が目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	擦痕	
43-11	VII-2	不明	胴部	F-9	普通	石英・長石等の無色鉱物混入し、有色鉱物多量に混入する。雲母が非常に目立つ。織維有。	明赤褐色 (5YR5/6)	擦痕	
43-12	VII-2	不明	胴部	F-10	普通	石英・長石等の無色鉱物が混入し、有色鉱物が少量に混入する。雲母も非常に目立つ。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	擦痕	
43-13	VII-2	不明	胴部	F-10	普通	石英・長石等の無色鉱物は混入するが僅かで、有色鉱物多量に混入する。雲母が非常に目立つ。織維有。	明褐色 (7.5YR5/6)	擦痕	
44-1	VII-3	不明	底部	B-1	普通	石英・長石等のやや大粒の無色鉱物混入し、有色鉱物少ない。織維有。	橙 (7.5YR6/6)	尖底	押型文か
44-2	VII-3	不明	底部	C-7	普通	石英・長石等の無色鉱物混入し、有色鉱物少ない。織維有。	橙 (7.5YR6/7)	尖底	押型文か
44-3	VII-3	不明	底部	G-9	普通	石英・長石等の無色鉱物混入するが僅かで、有色鉱物が混入する。砂粒のようのものも見られる。織維有。	明赤褐色 (5YR5/8)	平底	早期後半
44-4	VII-3	諸礫か	底部	H-11	普通	石英・長石等の無色鉱物多く混入し、有色鉱物も混入する。織維有。		平底	
44-5	VII-3	諸礫か	底部	複数	良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物混入する。	明赤褐色 (5YR5/8)	平底	
44-6	VII-3	諸礫か	底部	D-3	良	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物混入する。	赤褐色 (2.5YR4/6)	平底	
44-7	VII-3	不明	胴部	C-8	普通	石英・長石等のやや大粒の無色鉱物多く混入し、有色鉱物も混入する。砂粒のようなものも見られる。織維有。	橙 (5YR6/6)	外面:陸寄 内面:斜位平行沈線	
44-8	VII-3	不明	胴部	C-2	普通	石英・長石等の無色鉱物、有色鉱物が混入する。砂粒も混入する。織維多い。	赤褐色 (5YR4/6)		穿孔有、高 山寺か

2. 石器

今回の発掘調査では、79点の石器の出土が確認されている。帰属時期は不明な要素が多いが、出土土器からかんがみて縄文時代早期後半と前期後半の二時期を主体にするとと思われる。それらの石器の各種類を挙げると次の通りである。石器の法量の詳細については観察表(第3表)に示した。

(1) 石鏃(第54図)

石鏃は32点出土しており、全て無茎石鏃と考えられる。分類は(鈴木1983)を参照にして、基部の形状から3類に集約できた。I類一円基式1点、II類一平基式2点、III類一凹基式22点、不明7点に分けられた。

● I類一円基式

● II類一平基式

● III類一凹基式

- 1. 両側縁が直線的なもの
 - a. 正三角形状
 - b. 二等辺三角形状
- 2. 両側縁が外湾的なもの
 - a. 正三角形状
 - b. 二等辺三角形状
- 3. 両側縁が内湾的なもの
 - a. 正三角形状
 - b. 二等辺三角形状
- 4. 逆刺が直線的になる、いわゆる鉤形鏃タイプ
 - a. 正三角形状
 - b. 二等辺三角形状

5. その他の凹基式

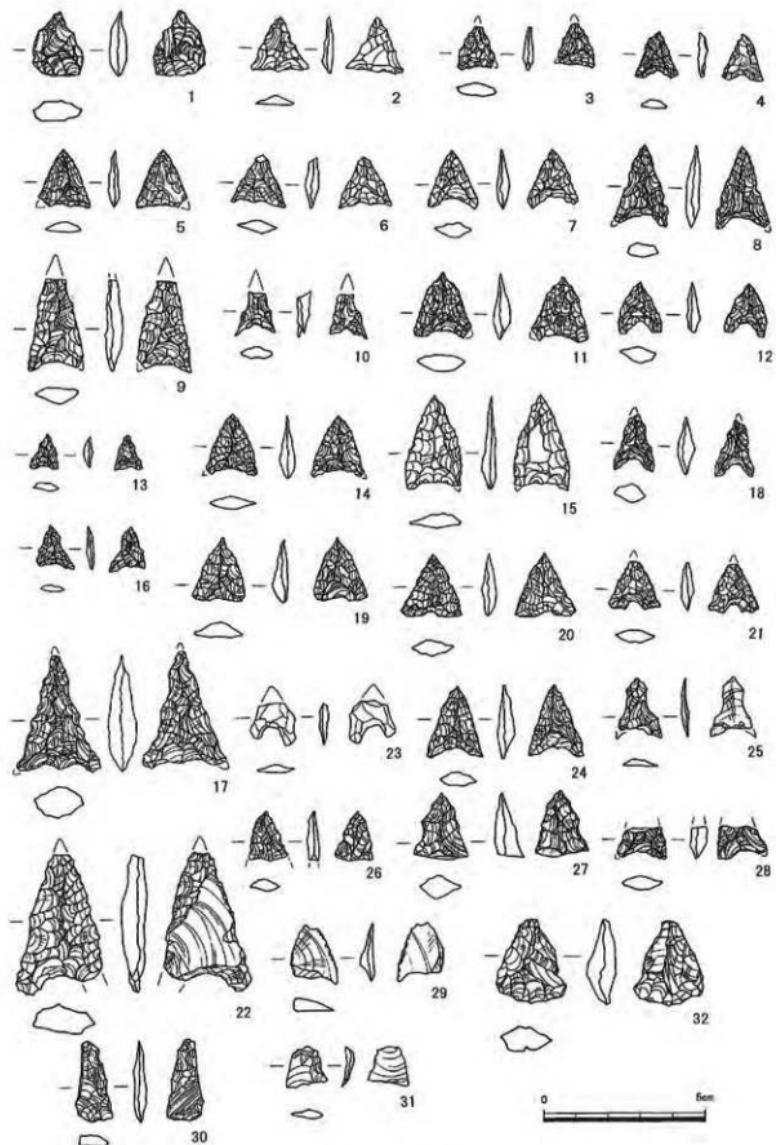
● 不明

I類にあたる1は一見、未製品と思われたが、先端部が調整されており製品と認識される。II類にあたる2は富士山で産出される玄武岩製である。

全体の出土数が少ないので明確に述べられないがIII類一凹基式が石鏃全体の大半を占める。III類は、上の分類からさらに抉り込みの深浅によって細分が可能だが、ここでは特徴のあるものだけを選び紹介する。III-1-aは4~7である。4・5は黒曜石、6は安山岩、7はチャートを用いている。III-1-bは8~10までで、すべて黒曜石が使われており、抉りが浅い。III-2-aは11~14である。11は刺突部に尖起があるタイプである。13だけは長さ1.0cmの小型品である。III-2-bは15の1点のみである。チャート製で、裏面に平坦打面が残っている。III-3-aは16で、刺突部に尖起があるタイプである。III-3-bは17・18である。17は黒曜石製の先端が欠けているが残存長3.5cmを測る大型品である。III-4-aは19~21である。III-4-bは22の1点で、黒曜石で先端が一部欠けるが残存長4.3cmを測る大型品である。逆刺が欠損している。III-5は23~25である。23は先端が欠落している。石材が安山岩で軟質な石材を使用しており、剥離が明瞭でない。24・25は平面が五角形状になるものと考えられる。

判別が難しいものは不明に分類した。26~32まである。26・27は逆刺部が欠損し、28は先端部が欠損している。29・30は押圧剥離の段階で廃棄された失敗作と思われる。31・32は刺突部に二次的な加工がされていないので未製品の段階と考えられる。

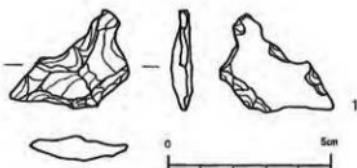
石材は32点中、26点が黒曜石製で占められており使用頻度が高い。次いでチャートが使われている。



第54図 石器実測図

(2) 石匙 (第55図)

石匙は1点のみ出土している。凝灰岩製の横型石匙で、つまみ部が片寄る小型なタイプである。刃部は一部やや内湾状に呈し、刃部部分は3.6cmを測る。全体的に風化が著しい。



第55図 石匙実測図

(3) 石錐 (第56図)

石錐は3点出土している。1はD10グリッドから出土している黒曜石製で、明瞭なつまみ状の頭部と錐部をもつものである。錐部の幅は0.3～0.4cmで菱形状の断面形を呈しており、先端は欠損している。頭部の表面に2箇所と裏面に1箇所の打点とコーンが確認できる。2は黒曜石製である。小型品と思われ錐部が欠損している。3は石錐と考えられる資料である。凝灰岩製で背面には自然面が残っており、明瞭な錐部でない。

(4) 打製石斧 (第57図)

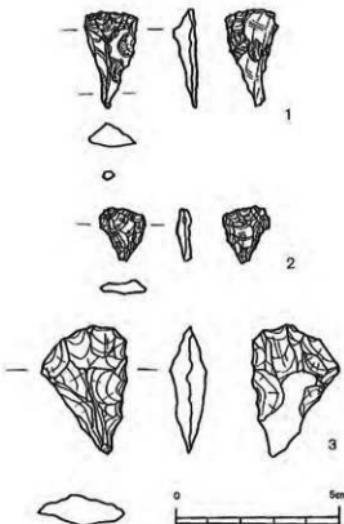
打製石斧は1点だけ出土している。砂岩製で背面側に自然面が残る素材である。短冊形で刃部形状はやや円刃に調整され、刃付は片刃である。

(5) スクレイバー類 (第58・59図)

剥片に刃部を施した、搔器・削器的な剥片石器をスクレイバー類とした。このスクレイバー類は11点認められ、エンドスクレイバー(先刃搔器)的なもの(第58図-1～5)、サイドスクレイバー(削器)的なもの(第59図-1～6)に分けられる。

a. 搗器(第58図)

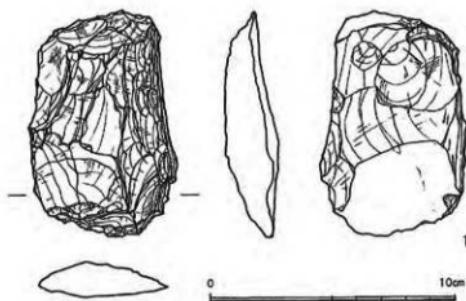
1は凝灰岩の剥片を使用し、その四つの辺に、細かい刃部を加工している。裏面には自然面の風化面が残っており、全体としては円形搔器の範疇にはいるかもしれない。2は厚手の剥片を利用しているが二次加工が施されていない。このことから搔器と判断した。大きな打点が表面に1箇所、裏面に2箇所確認でき、つまみを意識した成形と考えられ、石匙の製作途上の可能性がある。3は凝灰岩の撥形に成形した剥片を使用し、その長い辺にかけて刃部が表裏両面ともに施されている。4は3と同じく凝灰岩を撥形に整形した剥片を使用しているが、比較的厚手の素材である。石材の風化も著しい。5は黒曜石製で平面が半月状を呈しており片面にだけ刃部の調整が施されている。



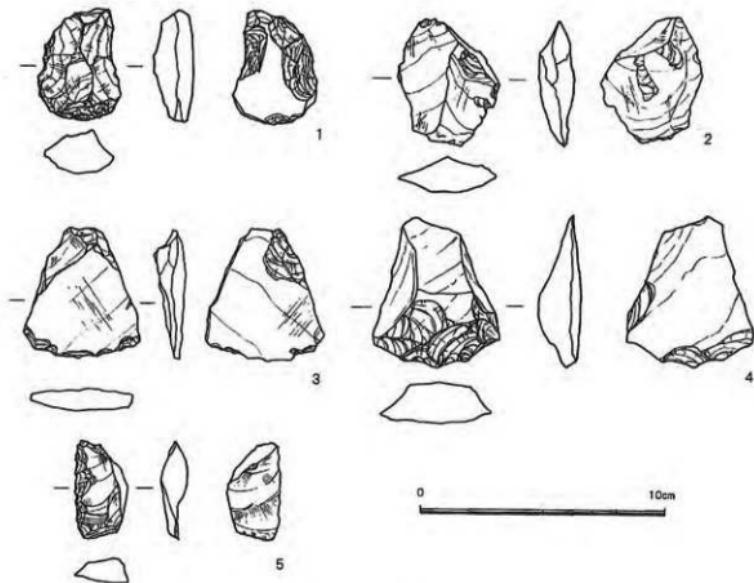
第56図 石錐実測図

b. 削器(第59図)

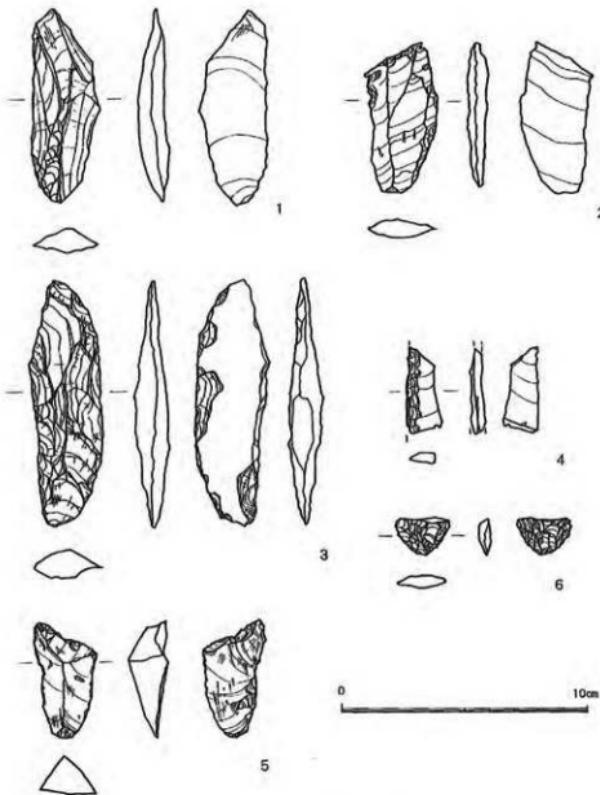
1は凝灰岩の縦長の剥片を使用している。表面左側の一部のみに弧状の刃を作出している。また、表面に膨刃面を意識した剥離が確認できる。器形に分類できるかもしれないが、大きく削器と捉えて、ここでは可能性に留めたい。2は凝灰岩の薄い剥片を使用して、外湾した長辺部分の表面のみに弧状の刃が断続的に施されている。3は砂岩製である。表面に綿密な刃部を側辺に調整している。裏面は風化面か自然面で占めているが、まばらだが刃部を施している部分が確認できる。4は多孔質な玄武岩で、表面のみに弧状の刃部が形成されている。5・6は黒曜石製である。5は辺部に細かい刃部を施している。6は先端部のみの残存と思われるが急斜度の二次加工により弧状の刃部を設けている。



第57図 打製石斧実測図



第58図 刮器実測図



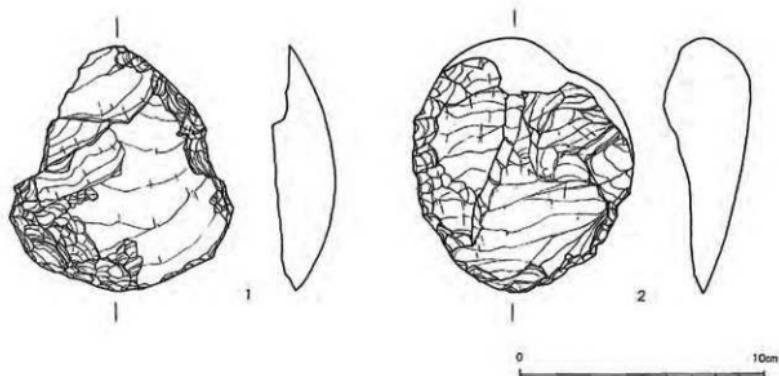
第59図 削器実測図

(6) 碓 器 (第60図)

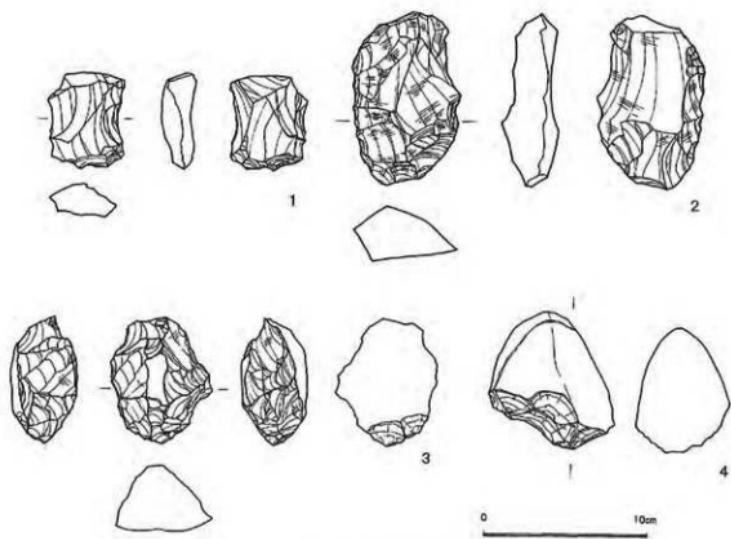
円錐に細かい剥離で成形しているものを碓器とした。本遺跡では2点出土している。1は砂岩製で、粗い剥離の後に比較的小さい剥離で成形しており、湾曲した辺部には刃部を施している。また、抉りを意識した剥離も確認できる。2は幅が広い下端部に丁寧な刃部を形成している。粗く割った平坦面に細かい調整剥離がある。砂岩製。

(7) 石 核 (第61図)

石核は4点図化した。すべて凝灰岩製の青灰色で、図化していない石核も含め石材は凝灰岩製かホルンフェルス製の2種類である。3・4は素材の円錐面が残されている。



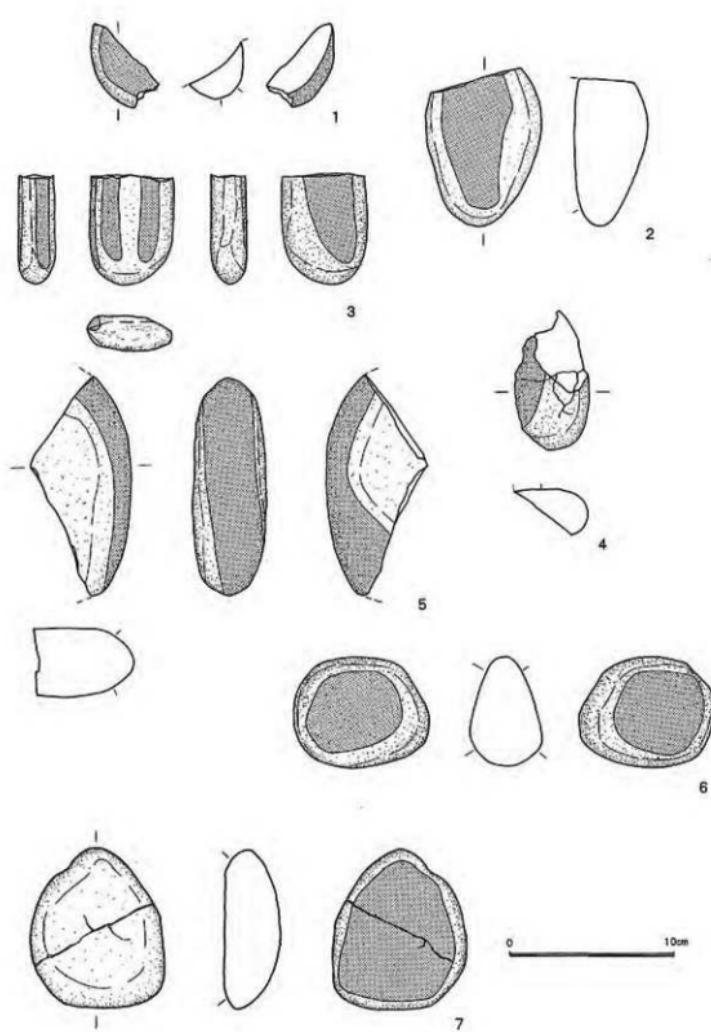
第60図 碓器実測図



第61図 石核実測図

(9) 磨 石・敲 石・磨敲石・特殊磨石（第62～66図）

自然礫をほぼそのままの形で用いて、使用により変形したと考えられる石器を、磨石・敲石・磨敲石・特殊磨石と区分して報告する。分類は（中村2009）を参照に進めた。出土数は磨石6点（第62



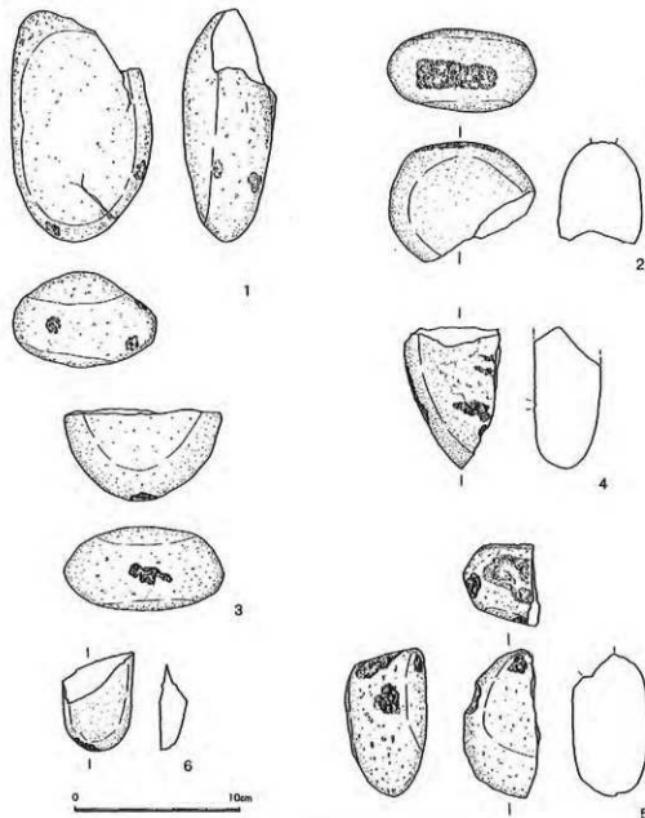
第62図 磨石実測図

図1～7) 敲石10点 (第63図1～6・64図7～10) 磨敲石10点 (第65図1～9 第66図10) 特殊磨石1点 (第66図特殊磨石1) である。

磨石は、磨りに使用したと想定される面が確認されるものである。平滑でなくとも凹凸のない平坦面あるいはゆるやかな凸面と認識されるものはこれに含めた。敲石は、石の表面があげた状の凹凸が確認されるものである。表面が潰れるにとどまらず剥離を生じる場合もある。磨敲石は、先にあげた磨り敲き両方を有するものを扱った。特殊磨石は、比較的大きい長棒の礫を用い、長軸方向に並行する面がすべて磨面となり三角柱状になるものを今回は定義づけして選んだ。

さらに磨石・敲石・磨敲石は礫の形状から次のように分類した。

- I類－円盤状の礫を用いたもの
- II類－棒状の礫を用いたもの
- III類－塊状の礫を用いたもの



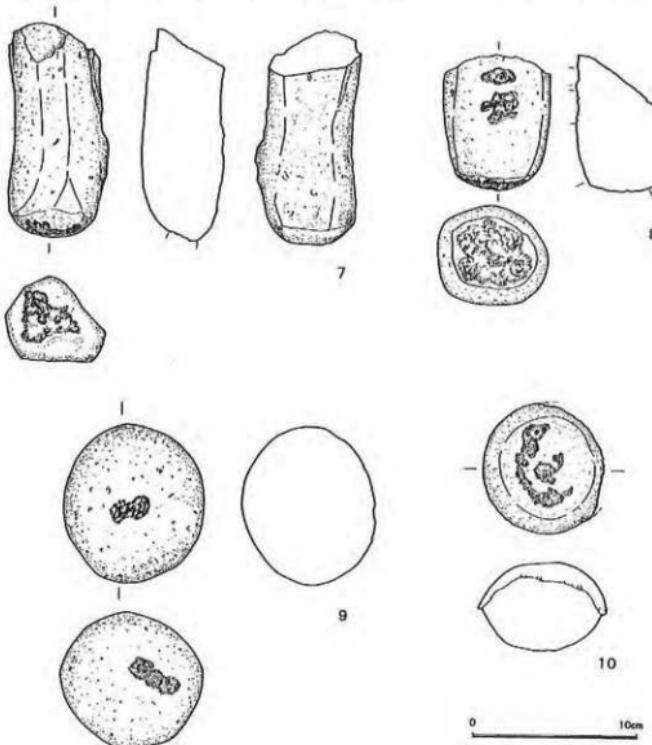
第63図 敲石実測図 (その1)

a. 磨石(第62図)

すべてが I 類で石材も砂岩である。1は両面にわたって磨面が認められる。2は扁平な円錐を用いており磨面は片面だけにある。3は扁平な円錐に両面、周縁部に磨面が認められるが、表面の磨きは指幅2本帯状が平行に走っている。4は残存部が少なく約2cm幅の磨面しか確認できない。ひび割れがある。5は周縁部のみに磨面がある。磨面の幅は3.0cmを測る。6は扁平な円錐を使用し、両面に磨面が認められる。7は片面に8.5cm×6.5cm範囲で磨面が確認できる。

b. 敲石(第63・64図)

I 類が5点(1～5)、II 類が3点(6～8)、III 類が2点(9・10)と多岐にわたる。石材は火山岩、安山岩、砂岩がみられる。1は角閃石を含む安山岩製で多孔質である。ひび割れがあり、敲打痕は周縁部のみ3箇所で散発的に認められる。2は周縁部に長さ4.8cmの幅1.3～1.8cmの明瞭な敲打痕が設けられている。3は周縁部に長さ2.2cm、最大幅1.0cmの敲打痕が認められる。4は扁平な碟に敲打痕が平坦面と周縁部にある。5は石材が火山岩で、富士川流域で産出されるものである。平坦面に1箇所、周縁部に2箇所、敲打痕が認められる。6は遺存状態が約1/8と想定され



第64図 敲石実測図(その2)

るが、全体的には棒状の礫と考えられる。端部に敲打痕がある。7は砂岩礫で端部に3.0×3.5cmの敲打痕がある。8は敲打痕が端部だけでなく側面にも確認される。9は塊状の礫で、石材が火山岩か発砲している安山岩か流紋岩を使用している。10は半分欠落しているが塊状の礫であったと考えられる。弱い敲打痕が認められる。

c. 磨敲石(第65・66図10)

I類のみである。1は側面、周縁部に磨きがあり、端部に敲打痕がある。2は遺存状態が1/5だが、側面に磨きと敲打痕が重なって認められる。3は周縁部をほぼ一周巡らすように弱い敲打痕があり、散発的に強い敲打痕があり、側面に磨きが7.1cm×2.8cmの範囲で確認できる。4はひび割れがあり、表面に敲打痕3箇所あり、裏面に8.7cm×6.6cm範囲の磨面が認められる。5は石材がグリンタフで、周縁部に敲打痕、側面に磨きがある。6は1/2が欠損しており、周縁部に敲打痕、両側面に磨きが認められる。7は平面が隅丸の三角形を呈しており、長辺だけに5箇所の敲打痕が確認できる。両側面に磨きがある。8は砂岩か砾岩で、側面に敲打痕と磨きが重なって認められる。周縁部にも敲打痕がある。9は石材がグリンタフで側面に6.7cm×2.9cmの範囲で敲打痕があり、7.8cm×6.2cm範囲で磨きが認められる。10は火碎岩製の扁平な礫に両側面に磨き、周縁部に1箇所の敲打痕が確認できる。

d. 特殊磨石(第66図特殊磨石1)

砂岩製で、両端が欠損している。断面は二等辺三角形状で、平坦の三面すべてに磨りが確認できる。磨面の最大幅は長辺で6.6cm、二等辺の部分で4.4~5.3cmを測る。

(10) 石皿(第66図石皿1)

石皿の破片と考えられるものが1点出土している。多孔質玄武岩製の扁平で平面が楕円形を呈すと思われる。縁はほとんどなく、使用痕は縁辺部のみなので確認できなかった。

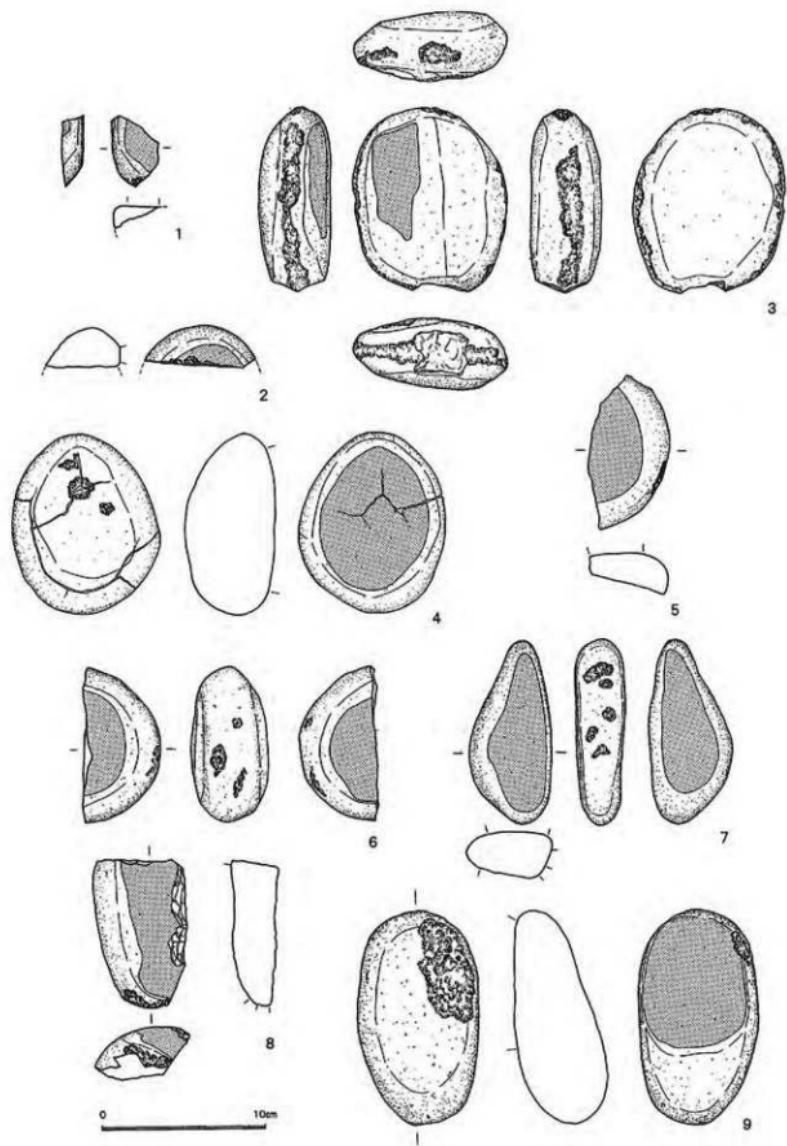
参考文献

鈴木道之助 1983 「3. 石器II 石鎌」『绳文文化の研究』7 雄山閣

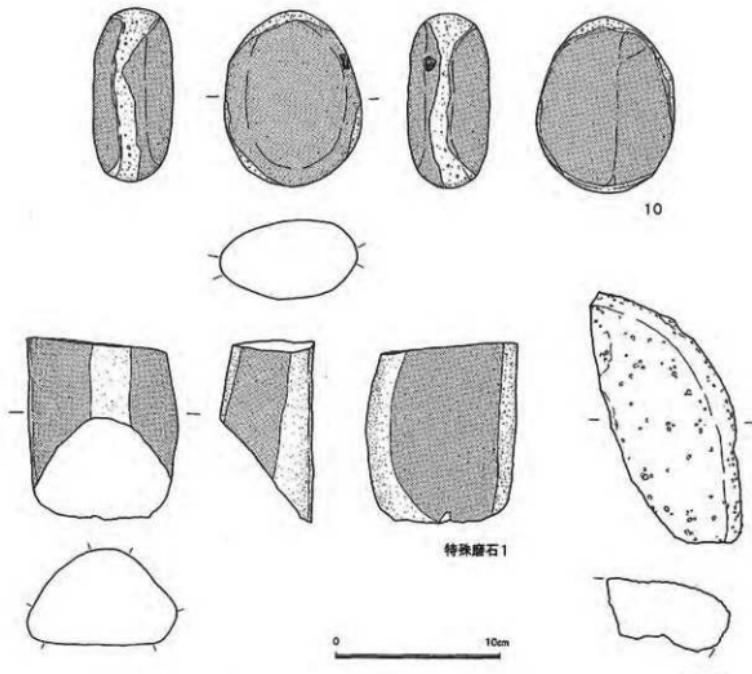
中村雄紀 2009 「第V章第2節2石器」丸尾北遺跡 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

第3表 出土石器組成表

	石鏃	石匙	石錐	打製石斧	搔器	削器	礫器	磨石	敲石	磨敲石	特殊磨石	石皿	合計
黒曜石	26		2		1	2							31
玄武岩	1					1						1	3
安山岩系	2									3	1		6
チャート	3												3
凝灰岩		1	1		4	2							8
砂岩				1		1	2	7	5	7	1		24
火山岩										2			2
グリンタフ											2		2
合計	32	1	3	1	5	6	2	7	10	10	1	1	79



第65図 磨敲石実測図



第66図 磨敲石・特殊磨石・石皿実測図

石皿1

第4表 石器観察表

石器

No.	分類	出土区	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	遺存状態	備考
1	I	E-10	黒曜石	2.0	1.4	0.5	1.4	完形	
2	II	E-8	玄武岩	1.7	1.8	0.3	0.5	完形	石村富士山産
3	II	E-9	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.3	略完形	
4	III-1-a	H-11	黒曜石	1.4	(1.3)	0.3	(0.4)	逆剥欠	
5	III-1-a	F-8	黒曜石	1.8	(1.6)	0.3	(0.6)	逆剥欠	
6	III-1-a	F-8	安山岩	(1.6)	1.6	0.4	(0.7)	先端欠	
7	III-1-a	F-9	チャート	1.8	1.6	0.4	0.6	完形	
8	III-1-b	F-9	黒曜石	2.5	1.7	0.4	2.3	略完形	
9	III-1-b	G-10	黒曜石	(2.8)	(1.6)	0.6	(1.7)	先端逆剥欠	
10	III-1-b	G-7	黒曜石	2.1	1.7	0.5	1.0	完形	
11	III-2-a	D-9	黒曜石	2.0	(1.7)	0.6	(1.2)	逆剥欠	
12	III-2-a	F-8	黒曜石	1.6	1.3	0.4	0.8	完形	
13	III-2-a	G-10	黒曜石	1.0	0.8	0.3	0.2	完形	
14	III-2-b	D-8	黒曜石	1.9	1.6	0.4	0.7	略完形	
15	III-2-b	E-7	チャート	2.9	1.7	0.4	1.3	略完形	
16	III-3-a	G-1	黒曜石	1.8	1.2	0.2	0.2	完形	
17	III-3-b	D-10	黒曜石	(3.5)	(2.6)	0.9	(4.2)	先端逆剥欠	
18	III-3-b	H-10	黒曜石	(1.7)	1.4	0.5	(0.6)	先端欠	
19	III-4-a	B-1	黒曜石	1.9	(1.6)	0.5	(1.0)	逆剥欠	
20	III-4-a	C-7	黒曜石	1.9	1.9	0.4	0.8	略完形	

No.	分類	出土区	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	遺存状態	備考
21	III-4-a	B-6	黒曜石	(1.4)	1.6	0.4	(0.5)	先端欠	
22	III-4-b	D-7	黒曜石	(4.3)	(1.5)	(0.8)	(6.2)	先端逆剥欠	
23	III-5	E-9	安山岩	(1.3)	1.3	0.3	(0.4)	先端欠	
24	III-5	F-8	黒曜石	(1.8)	1.2	0.4	(0.5)	先端欠	
25	III-5	F-8	チヤート	2.3	(1.2)	0.2	(0.2)	逆剥欠	
26	不明	E-10	黒曜石	(1.5)	(1.1)	(0.4)	(0.4)	脚部欠	
27	不明	D-8	黒曜石	(2.0)	(1.6)	(0.7)	(1.9)	脚部欠	
28	不明	建設調査トレンチ	黒曜石	(1.0)	(1.5)	(0.5)	(0.4)	先端逆剥欠	
29	不明	B-6	黒曜石	2.3	(1.4)	0.4	(0.6)	逆剥欠	製作過程での破損か
30	不明	B-6	黒曜石	(2.5)	(1.1)	0.4	(1.0)	半分欠	製作過程での破損か
31	不明	D-10	黒曜石	1.2	1.2	0.2	0.2	完形	未製品
32	不明	F-8	黒曜石	2.5	2.2	0.9	3.2	完形	未製品

石剣

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	揚型	C-7	凝灰岩	3.1	3.6	0.7	5.0	完形	風化著しい

石錐

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1		D-10	黒曜石	(2.9)	1.5	0.7	(1.6)	錐先先端欠	
2		F-10	黒曜石	(1.7)	1.4	0.3	(0.6)	錐部欠	
3		F-7	凝灰岩(軟性)	4.0	2.6	1.0	6.5	完形	未製品か

打製石斧

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	短柄形	D-10	砂岩	10.1	5.8	2.1	100	完形	片刃

搔器

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	搔器	F-8	凝灰岩	4.5	3.6	1.7	24.6	完形	
2	搔器	D-9	凝灰岩(軟性)	5.1	4.1	1.4	20.6	完形	
3	搔器	C-7	凝灰岩	5.3	4.8	1.3	25.5	完形	
4	搔器	C-9	凝灰岩	6.1	5.2	1.7	48.6	完形	
5	搔器	C-5	黒曜石	3.9	2.1	1.2	7.1	完形	

削器

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	削器	D-7	凝灰岩	9.9	2.7	1.1	18.7	完形	彫器の可能性あり
2	削器	D-6	凝灰岩	6.1	2.9	0.7	14.1	2/3	
3	削器	表裸	砂岩	9.9	2.9	1.3	33.5	完形	
4	削器	C-9	玄武岩	3.5	1.5	0.7	2.9	1/4	石材富士山産
5	削器	D-8	黒曜石	4.7	2.5	1.5	9.0	3/5	
6	削器	E-7	黒曜石	1.5	2.1	0.5	1.3	1/5	

理器

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	片刃内腹頭	F-9	砂岩	9.9	9.2	2.5	195.0	完形	抉りを入れている
2	片刃内腹頭	C-9	砂岩	10.3	9.1	3.5	310.0	完形	

石核

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1		E-7	凝灰岩	5.8	4.9	2.0	61.5	完形	
2		G-10	凝灰岩	10.6	6.7	3.5	222.0	完形	
3		C-6	凝灰岩	7.7	6.2	4.1	178.0	完形	
4		F-9	凝灰岩	8.4	7.8	5.2	339.0	完形	

磨石

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	D-6	砂岩	(5.5)	(2.7)	(4.0)	(40.5)	1/4	
2	I	D-8	砂岩	(9.6)	7.1	4.6	(386.0)	4/5	石材スランプ際にむ
3	I	G-10	砂岩	(6.7)	5.2	2.2	(140.0)	2/3	
4	I	C-5	砂岩	(8.4)	(4.6)	(2.8)	(82.0)	2/5	ひび割れあり
5	I	C-9	砂岩	(13.3)	(6.1)	4.5	(360.0)	3/5	
6	I	C-7	砂岩	8.3	6.7	4.4	363.0	完形	
7	I	G-12	砂岩	9.9	8.2	3.4	364.0	完形	ひび割れあり

敲石

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	D-6	安山岩	(14.1)	8.6	5.8	(732.0)	4/5	ひび割れあり 石材角閃石含む
2	I	H-10	砂岩	(8.9)	(7.0)	5.1	(350.0)	2/3	
3	I	C-6	安山岩	(9.7)	(5.4)	5.2	(260.0)	1/2	石材角閃石含む
4	I	D-8	砂岩	(8.5)	(5.8)	(4.2)	(262.0)	2/5	
5	I	C-6	火山岩	(9.0)	(4.6)	(5.1)	(249.0)	1/2	富士川流域産か
6	II	確認調査表採	砂岩	(6.0)	(4.3)	(1.7)	(45.5)	1/8	
7	II		砂岩	(13.1)	6.0	5.1	(550.0)	3/5	
8	II	C-9	安山岩	(8.4)	6.6	6.0	(391.0)	2/3	石材角閃石含む
9	III	G-10	火山岩	8.5	8.1	8.1	785.0	完形	石材が発見している安山岩、または流紋岩か
10	III	E-8	砂岩	(7.9)	(7.4)	(4.5)	(292.0)	2/3	

磨歯石

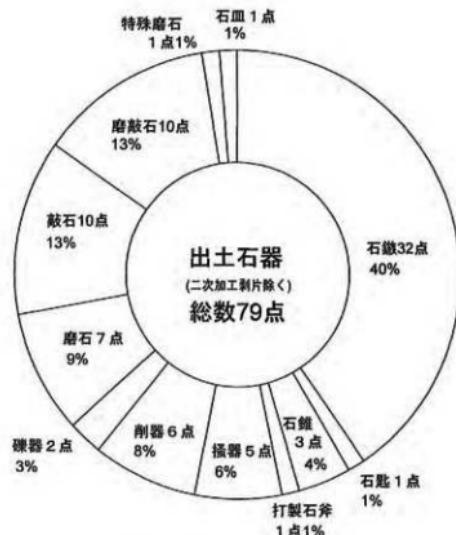
No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	I	F-9	砂岩	(4.3)	(2.9)	(1.4)	(19.5)	1/5	
2	I	F-10	砂岩	(6.6)	(2.6)	(4.5)	(83.6)	1/5	
3	I	G-9	砂岩	11.2	9.4	4.4	630.0	完形	
4	I	D-9	砂岩	10.9	9.0	5.4	631.0	完形	ひび割れあり
5	I	E-7	グリントフ	(9.4)	(5.0)	(2.0)	(123.0)	2/5	
6	I	E-7	砂岩	(9.4)	(4.8)	4.2	(264.0)	1/2	
7	I	E-6	砂岩	11.2	5.1	3.0	224.0	完形	
8	I	H-12	砂岩・砾岩	(8.0)	(5.8)	3.0	(179.0)	3/4	
9	I	E-7	グリントフ	13.3	7.5	5.1	632.0	完形	
10	I	F-9	安山岩	10.8	8.5	5.0	635.0	完形	

特殊磨石

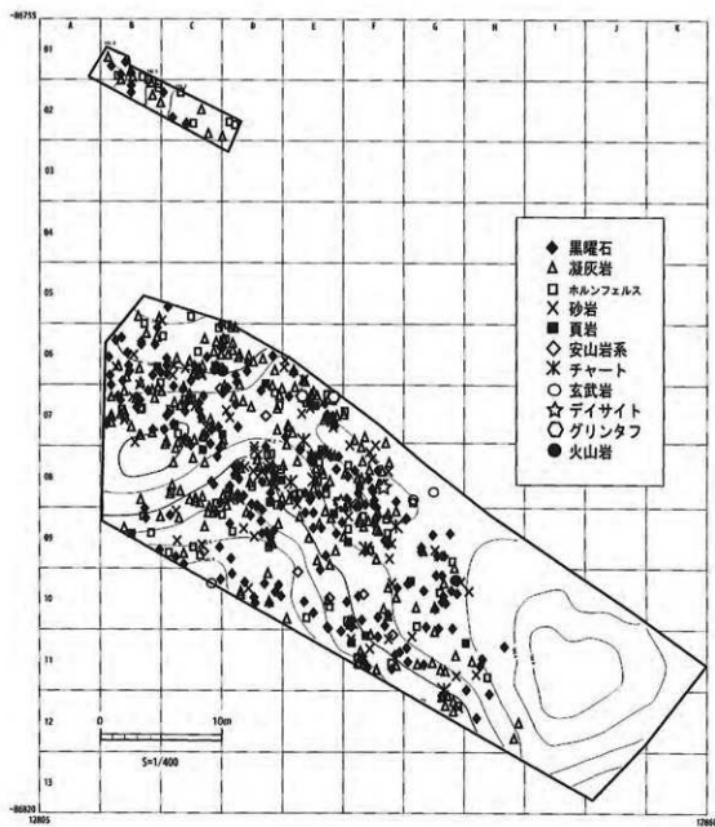
No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1	三角柱状	G-9	砂岩	(11.0)	9.3	5.8	(772.0)	崩壊欠	

石器

No.	分類	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	遺存状態	備考
1		第8号集石	多孔質玄武岩	(15.1)	(9.5)	(4.7)	(592.0)	1/6	



第5表 石器組成割合表



第67図 石材別石器剥片分布図

第V章 まとめ

1. 遺構

本調査において検出された遺構は、集石（土坑を含める）10基、炉穴4基、焼土ブロック散布域1箇所、土坑3基であった。時期的には撚糸文・押型文から条痕文系土器を伴った縄文時代早期前半から後半に比定されるが、縄文時代早期の遺構に伴出遺物が少なく、時期の特定に困難が伴うことは本遺跡でも共通して、唯一、4号集石（土坑）内に清水柳E類土器と思われる土器片が出土し、その周辺が同土器の分布域であることを考え合わせて、その因果が認められるに過ぎない。

分布域は第10号集石が北西に大きく離れるが、それ以外の遺構は南西に開口する馬蹄形の緩斜面を40mほどの範囲の中で構築されており、4号集石（土坑）を始め、それぞれの遺構がそれぞれの時期に共通した条件のなかで営みを持った結果と理解できる。

本遺跡の特徴である集石は、疊を意図的に配列した「配石遺構」と区別されて、「集石遺構」として捉えられ、疊だけが集合状態にあるものと、土坑内に疊が集合状態にあるものに分けられている。これらの疊の多くに、火熱を受けて赤色化し、さらに煤やタール状の付着物が付いているものがある場合は、蒸し焼きや石焼き調理の施設として理解されており、本遺跡の集石はこれにあたる。

ここでは、集石のうち、6基を占める集石土坑について検討してみたい。対象は集石土坑が確認された本市の6遺跡と愛鷹山麓の2遺跡とした。なお、時期については当該遺跡の主体時期を概略的に示している。

先ず、本遺跡の集石土坑の検出数が調査面積に対して異常に高いことに気付く。10基を検出する若宮遺跡でも1基/650m²であり、これをはるかに上回る1基/150m²である。前期初頭の峯石遺跡例を除けば、ほとんどの遺跡は1基/1,500~2,000m²である。確かに調査区の設定と集石土坑の包含地域とのマッチングの如何もあろうが、当該期の遺物の分布域からすると、構築割合は決して高くない遺構であることは確かである。

次に、関連する他の遺構とのあり方を見ると、集石はほとんどの遺跡で量の多少はあるものの同一の構造で存在していて、集石土坑と使用目的の因果が伺える。また、この集石を構成する疊に火熱を加えた施設であろう、焼土や炉穴を伴う遺跡を見ると、いずれも集石の検出数が多い代官屋敷II・大鹿窪・若宮・葛原沢第IVの4遺跡で認められ、焼土や炉穴の確認のない5遺跡は1~3基と少ないと共通している。

遺跡名	時期	調査面積	集石土坑	集石	焼土	炉穴	住居	備考
代官屋敷II	早期後	900m ²	6	4	1	4	—	
大鹿窪	草創後	1,500m ²	1	10	2	—	11	3-1調査区
若宮	早期中	6,500m ²	10	5	—	60	28	
代官屋敷I	早期後	1,550m ²	1	4	—	—	—	C地区
上石敷	早期後	2,500m ²	3	—	—	—	—	中期集石3
石敷	早期後	3,080m ²	1	1	—	—	1	
峯石	前期初	500m ²	2	1	—	—	1	方形土坑
葛原沢第IV	早期前	5,400m ²	4	3	—	3	—	遺物分布域
ニツ洞	早期後	4,200m ²	2	—	—	—	—	

第6表 集石土坑出土遺跡一覧

これは、集石（土坑も含む）に対応する加熱施設の絶対量が限られていることを示すとともに、集石（土坑も含む）と加熱施設の離れた位置関係をも示唆していると考えられる。

この状況に住居のあり方を見ると、大鹿窯・若宮・峯石の本遺跡とは若干条件の異なった3遺跡と、石敷遺跡に1棟が認められるだけであり、一般的には住居を隣接しないことが普通のようである。

上記の遺構の特性をもって、本遺跡と似通った遺構構成を持つ愛鷹山麓葛原沢第IV遺跡でその配置を見ると、本遺跡と同様に弱い谷地形に沿って40~50mの範囲を遺構の分布域に定め、3基の炉址群と4基の集石（土坑）群が緩い尾根筋を超えて両サイドに位置するなど、完全に遺構の住み分けがされている。詳細には炉址が斜面に、集石土坑が谷あいの平坦面に占地するなど遺構の効率性が理解された故の、時期的な重なりの結果であろうが、それが炉址と集石土坑との一対性と隔離性の可能性を現しているとすれば、本遺跡例は馬蹄形緩斜面の中央凹面を介して対面する左右の袖部分に占地し合った、一対性と隔離性の重なりの結果として見ることもでき、また、集石土坑のみ確認される遺跡では炉穴等加熱施設との隔離性を現していると言えるかも知れない。

統いて、集石土坑の個体について概観してみたい。

集石土坑は坑内に砾が集合状態であることが第一義であり、これに本教育委員会が過去の調査から得た所見を加えると、構成砾は拳大の被熱砾・被碎砾を主体にして、楕状・皿状の掘り方に隙間なく詰められている。土坑の壁面には加熱行為は認められず、埋土内の炭化物もあり目立たないことが特徴で、その場での加熱行為はないことで共通している。

法量及び構成砾が知れる集石土坑は、5遺跡で22基が確認されている（第7表）。

これらの最大値は、若宮1号の140×135×25cm・構成砾252個で、最小値は代官屋敷II10号の55×40×10cm・構成砾12個であり、8倍以上の容量の差が認められる。これを概観したなかで、両者の中間である径100cmを基準に分類を進めると、

A類—120cm以上 3基（若宮1・4・7号）

B類—119~80cm 13基（代官屋敷II2・4・5・6号、上石敷1・2号、峯石3号、若宮II2・5・6・9・11・12号）

C類—79~60cm 2基（代官屋敷II8号、峯石4号）

D類—59cm以下 4基（代官屋敷II10号、上石敷3号、若宮8号、石敷2号）

に分類される。

遺跡/遺構		形状・長×短×深cm	数量	類	遺跡/遺構		形状・長×短×深cm	数量	類
代 官 屋 敷 II	2	円・115×100×20	111	B	若 宮	1	円・140×135×25	252	A
	4	円・90×80×10	48	B		2	円・110×100×25	167	B
	5	円・100×100×20	54	B		4	楕・120×80×30	197	A
	6	円・80×80×30	112	B		5	円・105×95×35	155	B
	8	円・65×65×10	39	C		6	円・(90×80)×20	(51)	B
	10	円・55×40×10	12	D		7	円・145×120×30	128	A
	1	円・115×95×10	95	B		8	円・50×50×10	25	D
	2	円・90×80×10	40	B		9	円・85×85×15	50	B
上 石 敷	3	円・53×50×5	8	D		11	円・85×80×30	61	B
	3	方・86×80×20	59	B		12	円・(80×80×20)	43	B
	4	方・64×61×10	47	C		2	円・50×48×7	21	D
				石					

石-石敷遺跡

第7表 市内遺跡出土集石土坑一覧

その結果、B類土坑が60%を占め、本地域の集石土坑は100cm前後の法量であることが一般的であると言える。

また、120cmを超えるA類は若宮遺跡に限られて3基を見る。草創期出土例として大鹿窪遺跡に149×114cmを測る集石土坑を1基確認するが、これが時期を遡る特徴的な法量を示しているのかはまだ判断できない。

逆に、小型の集石土坑（D類）は数的に一般ではないが各遺跡に存在している。その占地は石敷2号が住居跡より5mの所に位置する以外は、代官屋敷II10号が18m、上石敷3号が17m、若宮8号が15mと他の集石土坑と大きく離れて存在する。

それぞれの時期把握は通例のようにはつきりしないが、代官屋敷II10号のあり方を記して今後の検討の資料に加えておけば、先ず、尾根巾の狭い頂部に単独で存在して、その一帯は高山寺式土器の集中分布域である。なお、本市では黒田向林遺跡が高山寺式土器の出土遺跡として著名であるが、300m²の調査面積のなかには焼土、集石は確認されたが、集石土坑は出土していない。この出土状況が集石土坑は単独に存在する（隔離性）という逆からの証明になるか、今後の出土例を期待しておきたい。

なお、縄文時代前期初頭の峯石遺跡では方形の掘り方をもつ集石土坑が出土している。この時期から住居形状が円形から方形に転換していくなかで、集石の土坑形状も転換していくのか、類例が限られるため付記しておく。

＜参考文献＞

富士宮市教育委員会 1994 富士宮市文化財調査報告書第18集 『峯石遺跡』

2. 土 器

本調査では、縄文時代早期前半の撚糸文系土器、押型文系土器、早期中葉の高山寺式土器、貝殻沈線文系終末期の土器、早期後半の条痕文系土器である清水柳E類土器、鶴ヶ島台式土器、東海条痕文系土器の元野式土器と茅山上層式併行の柏畑式土器と思われる土器、前期初頭の清水ノ上II式土器、前期前半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器が出土した。第I次調査では、早期前半の撚糸文系土器、押型文系土器、早期後半の野島式土器、前期前半の諸磯式土器、中期初頭の五領ヶ台式土器が出土している。本調査においては、野島式土器の出土は見られなかったが、新たに高山寺式土器、貝殻沈線文系土器、清水柳E類土器、東海条痕文系土器、清水ノ上II式土器の出土が見られたことになる。静岡県東部の愛鷹山麓を中心に分布する清水柳E類土器は、富士山南西麓では初の出土である。

本調査地点は、高山寺式期が最も広範囲の分布となり、次いで条痕文系土器群となる。そのため遺跡の中心時期は高山寺式期及び早期後半条痕文系土器群の時期と考えられる。第I次調査地点では、前期から中期初頭までの間は連続的に継続し、諸磯式期が中心時期となっており、時期によって選地を違っているようである。

本調査区内での時期による土器分布の変化は、南側調査区西側の微高地から中央の小規模な谷に向かう斜面地を占有する早期前半、調査区全体を占有する高山寺式期、小規模な谷を囲む平坦面に分布する貝殻沈線文系から条痕文系土器群の時期・前期前半の諸磯式期、条痕文系土器群の中でも茅山上層式併行の柏畑式期と考えられる土器群の時期には、北側調査区にも分布域が広がる。前期初頭の清水ノ上II式期は、確認調査1トレンチ出土であり、第45～53図の遺物分布図には示せなかったが、北側調査区と南側調査区との間に分布している。遺物分布図に示す点は、報告書掲載分のうち確認調査出土資料や搅乱出土資料を除いたものであり、また無文や小片のため報告書に掲載しなかった土器もあるためすべての傾向を示しているということではないが、各時期、分布に重複する区域はあるものの、細かな変化は認められるようである。

本遺跡辺では年々縄文時代早期の資料が増加し、東側丘陵に立地する早期前半の撫糸文系土器・押型文系土器の集落跡である若宮遺跡から始まり、南西方向約800mに早期中葉の相木式土器や貝殻沈線文系土器を出土した石敷遺跡、北東方向約1kmに東海条痕文系土器を出土した丸塚遺跡が挙げられる。本調査では、高山寺式期や、条痕文系土器群の清水柳E類の時期、鶴ヶ島台式期、茅山下層併行の元野式期が加わり、富士山南西麓における縄文時代早期の様相が次第に明らかになりつつある。

3. 石 器

石器は79点出土しており内訳をあげれば、石鏃32点、石匙1点、石錐3点、打製石斧1点、攝器5点、削器6点、礫器2点、磨石7点、敲石10点、磨敲石10点、特殊磨石1点、石皿1点である。遺構に伴う出土は石皿の第8号集石のみで、あとは表採か包含層の出土である。

石材使用量では、多い順に挙げれば黒曜石358点、凝灰岩243点、ホルンフェルス87点、砂岩74点、頁岩15点、安山岩系8点、チャート7点、玄武岩3点、デイサイト2点、グリントフ2点、火山岩2点となつた。最も石材として選択されているものは黒曜石であり、石鏃や石錐、スクレイバー類などの狩猟具、工具、調理具に主体的に使用されていることが分かる。黒曜石剥片の分布では、329点がグリッド内遺物として取り上げられ、そのうちの60点、約18%が7号集石を中心としたD8-E8グリッド範囲内で出土している。全体的に調査区東側になるにつれ剥片の出土も少くなり、遺構の希薄さと比例している(第67図)。次に石材として採用されているものは凝灰岩である。製品としてはスクレイバー類に集約される。石質は、青灰色で表面は滑らかなガラス質の風合いをもち風化面は灰白色の特徴がある。この条件で産地を同定すれば、神奈川県丹沢層群を流れる中小の河川およびその支流で採集されるものと考えられる(前嶋・森島 2007)。順じて多いホルンフェルスでは製品がみられず剥片、石核に限定される。石質は青灰色で脂肪光沢があり、ざらつき感の手触りで割れ口は貝殻状の特徴がある。この条件で採集地を同定すると富士川流域・釜無川流域と考えられる(前嶋・森島 2003)。

組成については石鏃が全体の40%を占めている。次いで植物食を調理する礫石器類は37%を示して高い出土数を誇っているが、敲石と磨石の加工用途の違いから考えると、やはり石鏃製作を中心とした狩猟活動の依存が高いように思える(第5表)。周辺に分布する縄文時代早期の遺跡における石器組成を比較してみれば、代官屋敷遺跡1次調査で石鏃が51%、礫石器類が16.8%、若宮遺跡で石鏃が79.6%、礫石器類が13.3%、黒田向林遺跡で石鏃が58.1%、礫石器類が36.5%、石敷遺跡で石鏃が54.8%、礫石器類が38.4%を示し、いずれも石鏃の優位性が読み取れる。今回の調査も同じ傾向を示した結果になったと考えられる。また縄文時代早期の特質である特殊磨石の出土(篠原 2003)が1点のみと少ない結果であったことは、縄文時代前期後半の土器が含まれる様相をふまえて今後の検討課題になる。

〈参考文献〉

- 前嶋秀樹・森島富士夫 2003 「ホルンフェルスの入手先を明らかにする」『静岡県考古学研究』No.35
前嶋秀樹・森島富士夫 2007 「凝灰岩の入手先を明らかにする—硬質細粒凝灰岩について—」『研究紀要』第13号
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
馬飼野行雄 1987 「第Ⅳ章縄文時代第2節2石器について」『代官屋敷遺跡』富士宮市教育委員会
馬飼野行雄 1983 「第Ⅱ章遺物第1節石器」『若宮遺跡 本文編』富士宮市教育委員会
小野田 晶 2000 「Ⅲ遺構と遺物4縄文時代の遺物B. 石器」「石敷遺跡」富士宮市教育委員会
馬飼野行雄 1986 「4発見された遺構と遺物 b. 遺物」『黒田向林遺跡』富士宮市教育委員会
篠原 正 2003 「石の道具の製作から用途まで一群馬県横川大林遺跡検出の縄文時代早期の石器から—」
印旛郡市文化財センター研究紀要 3

報告書抄録

ふりがな	だいかんやしきいせきに						
書名	代官屋敷遺跡Ⅱ						
副書名	鶴山田不動産による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第43集						
編著者名	馬飼野行雄 保竹貴幸 田中城久 佐野恵里						
編集機関	富士宮市教育委員会 富士山文化課						
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 Tel0544-22-1111(代)						
発行年月日	平成22年(2010)5月31日						
遺跡名	所在地	コード		北緯 東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡				
代官屋敷遺跡	富士宮市小泉 字代官屋敷 2231番2ほか	22207	市番号 11 県番号 121	35° 13' 04" 138° 38' 27"	20090907 ?	約900	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
代官屋敷遺跡	散 布 地	縄文時 代 ～中期	集石・炉穴・土坑	土器・石器			

富士宮市文化財調査報告書 第43集

代官屋敷遺跡Ⅱ

鶴山田不動産による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年5月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111(代)

印刷 三扇美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636(代)

写 真 図 版

図版 1



1. 調査区全体



2. 調査状況

図版 2



1. 第1号集石



2. 第2号集石

図版 3



1. 第2号集石(半裁状況)



2. 第2号集石(土坑)

図版 4



1. 第3号集石



2. 第5号集石(上層)

図版 5



1. 第5号集石(下層)



2. 第5号集石(土坑)

図版 6

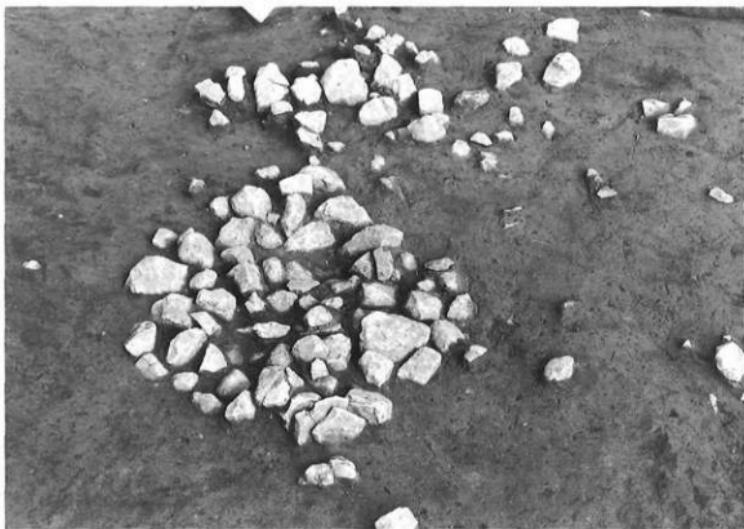


1. 第4号集石

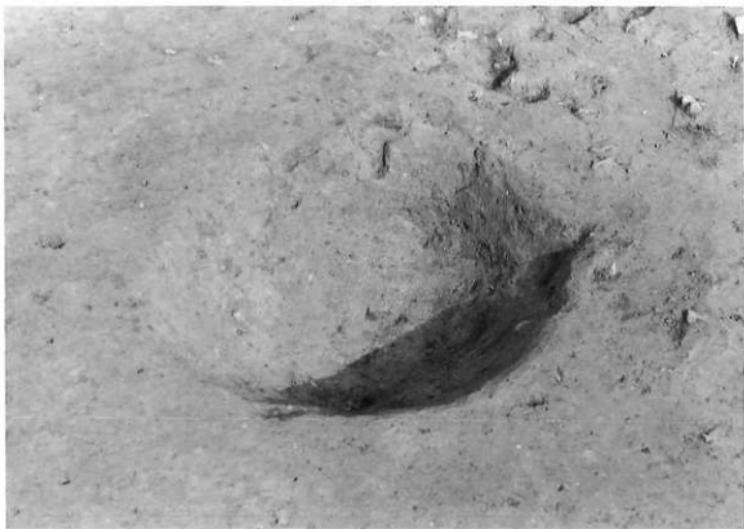


2. 第4号集石(土坑)

図版 7



1. 第6号集石



2. 第6号集石(土坑)

図版 8



1. 第7号集石



2. 第9号集石

図版 9



1. 第8号集石



2. 第8号集石(土坑)

図版 10



1. 第10号集石



2. 第1号炉穴

图版 11



1. 第2号炉穴



2. 第3号炉穴

图版 12

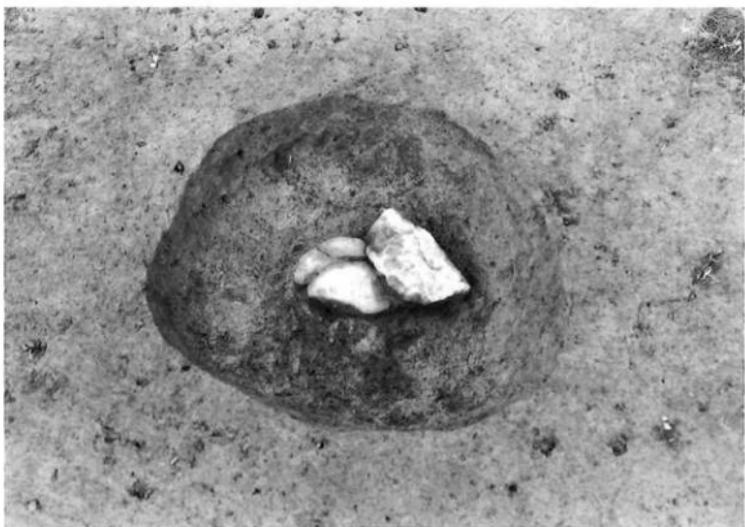


1. 第4号炉穴



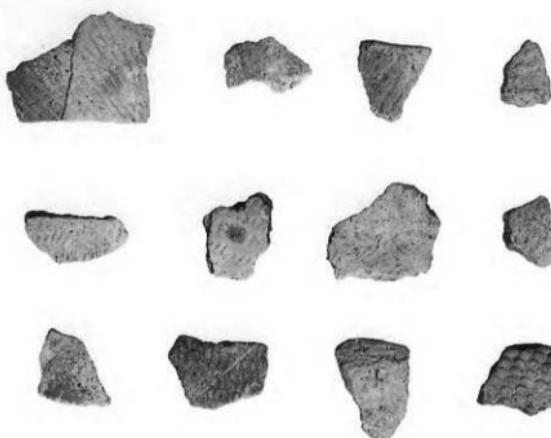
2. 第1号土坑

図版 13

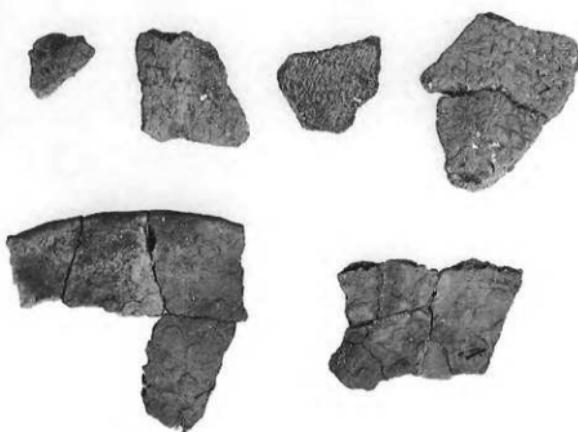


1. 第2号土坑

図版 14

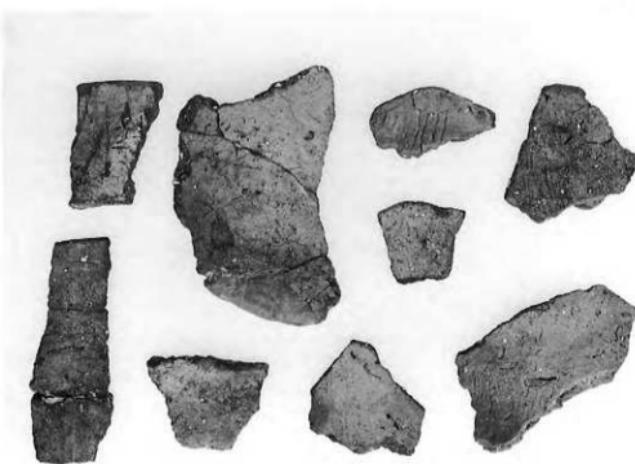


1. 第Ⅰ・Ⅱ群土器

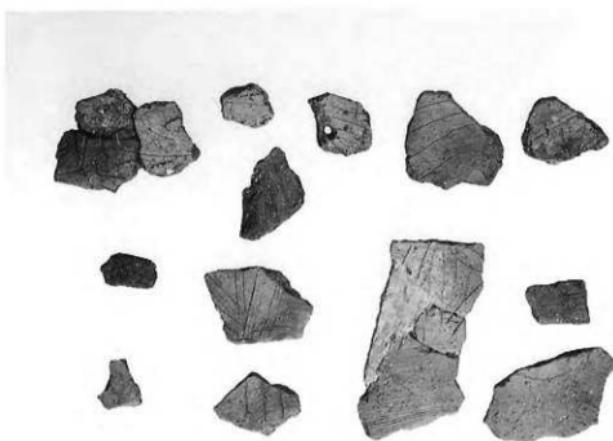


2. 第Ⅲ群土器(1)

図版 15



1. 第III群土器(2)

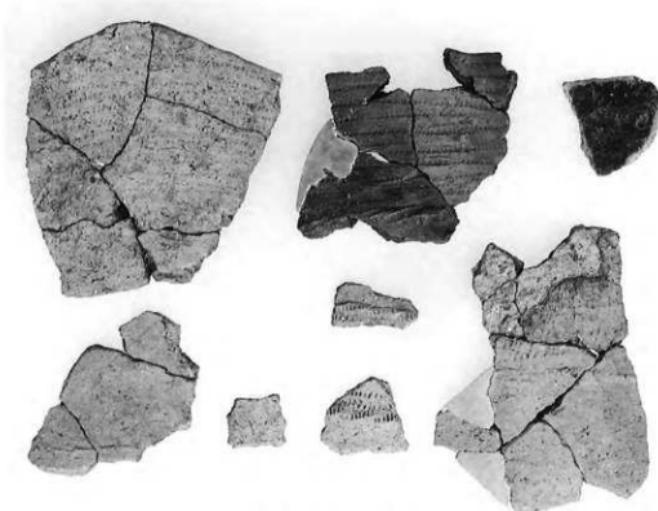


2. 第IV群土器

図版 16

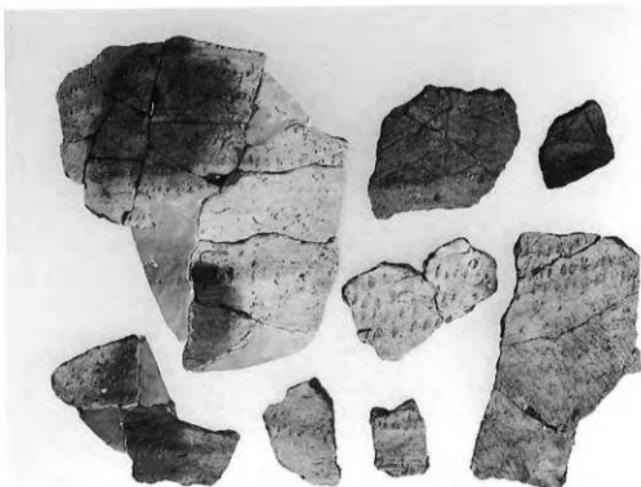


1. 第V群土器(第33図 1)



2. 第V群土器(2)

図版 17

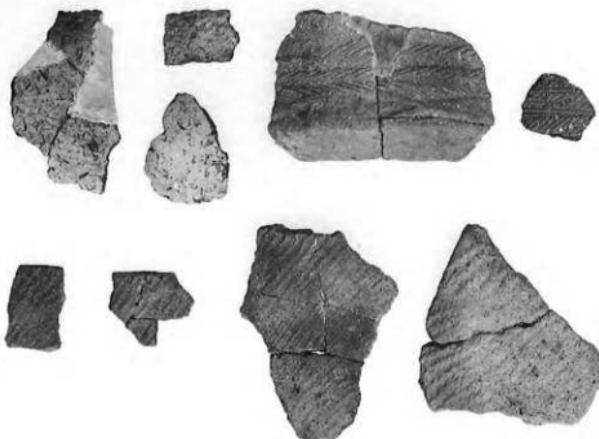


1. 第VI群土器(1)



2. 第VI群土器(2) (第39図 1)

図版 18



1. 第VII群土器

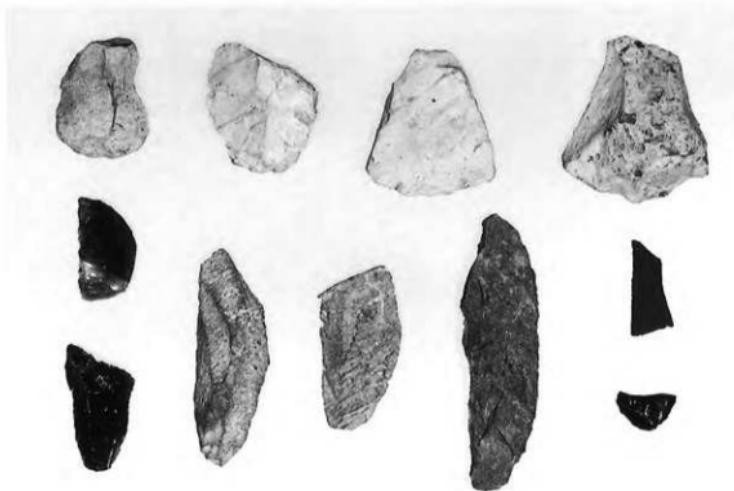


2. 第VIII群土器

図版 19

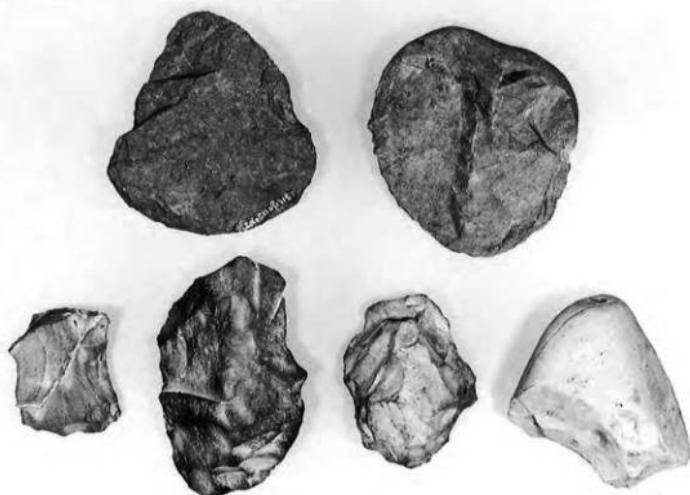


1. 石鎚(第54図1~32)

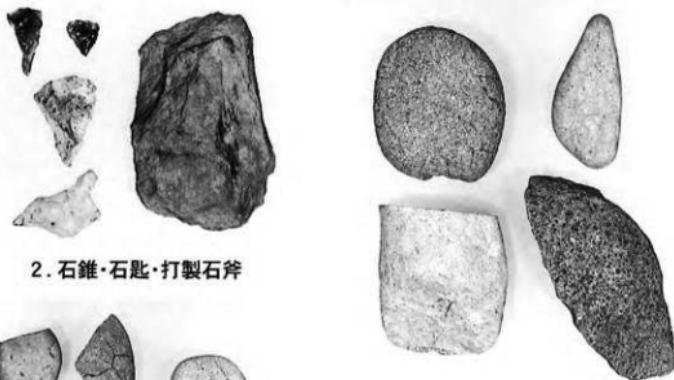


2. スクレイバー(搔器:第58図1~5 削器:第59図1~6)

図版 20



1. 磁器(第60図1・2) 石核(第61図1~4)



2. 石錐・石匙・打製石斧



3. 磨敲石・特殊磨石・石皿

4. 研石・敲石